明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

January 1th 1909.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 200

大日本蠶絲會報

第貳百號要目

▲甘樂社長 山口太三郎君▼

●大師拜謁の感を述べて二百號の祝辭に代ふ　會頭男爵 松平正直

●明治四十二年を迎ふ　會頭男爵 松平正直

●余の蠶絲業に對する經歷及希望　男爵 蜂澤榮一

●余の發見したる新蠶種　農學博士 大森順造

●蠶の一變性と其遺傳の有樣（英文）　農學博士 外山龜太郎

●蠶絲業と日本國民の經濟　法學博士 松崎藏之助

●高山社の教育主義　高山社蠶業學校長 町田菊次郎

●原富岡製絲場は如何なる方針を以て工女に對するか　原富岡製絲所長 古鄕時待

●世人の知らんとする甘樂社は如何なる歷史を有するか　甘樂社取締役 岩瀨麗策

●秋蠶飼育上桑園の改良すべき要點　千藤一策

●基督聖書の絹の辨財天女品の青色野蠶といふ文字の史的研究　石田孫太郎

●事蹟に受賞したる大成社　加藤知正

●四十二年度に於ける日米蠶絲貿易　法學博士男爵 阪谷芳朗

●舶來品を淺く田中式顯微鏡は如何にして發明せられしか　田中李次郎

●我邦に於ける清人の蠶業教育　東京蠶業學校長 關鉦三郎

●夜服と夜具　醫學士 貴家學而

▲下仁田社長 佐藤量平君▼

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

賜天覽

恭賀新年

特許 中原式生繭乾燥器 伊國 佛國 特許出願
中原式煮繭器

○本乾燥器は生繭乾燥器中の大王と稱せらる本器は大小數種に分つ即ち小形は一回壹石五斗入より三石入六石入大は拾貳石入、四拾八石入、貳百石入等にして蒸汽と火熱の兩式ありて棚枠と旋風器と相待て回轉す

○本煮繭器は煮繭と繰絲を分業にして生産費を減少し繰絲時間を短縮し絲量を多く出ださしめ且つ燃料を減ずる上に於て世界唯一のものとす

○本器は繭の煮加減均一に宜しき爲繰絲中落繭せざれば絲量多く繰絲神速なる事を保證す

○本器御試驗の爲八拾人繰以上の製絲家に於て据付方御望みの方へ本器壹臺と繭煮方熟練の男工壹名相添三週間御貸與可申上候實地御試用の結果良好にして利益あるものと御認定の節は更に御相談可仕候若し不結果にて御戻し有之候共決して異議無し

○說明書御請求の節は乾燥器又は煮繭器と書分け御通知相成度直に呈送す

東京市本所區德石衛門町三ッ目橋通
特許中原式生繭乾燥器 特許中原式煮繭器 製作販賣所
電話浅花二貳二六番電報(ナカ)振替貯金口座一六五〇四

大日本蠶絲會報　第二百號

目次

口繪

總裁殿下品評會場御發車竝靜岡支會發會式と品評會褒賞授與式の光景
澁澤男爵と坂谷男爵
大日本蠶絲會滋賀支會婦人部發會式
甘樂社と同社長山口太三郎君
下仁田社と同社長佐藤量平君

重要記事 …… 一—二

大詔拜讀の感を述べて二百號の祝辭に代ふ　會頭男爵　松平正直

論議 …… 三—二〇

明治四十二年を迎ふ　會頭男爵　松平正直
余の蠶絲業に對する經歷及希望　男爵　澁澤榮一
余の發見したる新蠶種　農學博士　大森順造
蠶の一變性と其遺傳の有樣（英文）　農學博士　外山龜太郎

演壇 …… 二一—二五

蠶絲業と日本國民の經濟　法學博士　松崎藏之助

集芳 …… 二五—三八

高山社の教育主義　高山社蠶業學校長　町田菊次郎
原富岡製絲所は如何なる方針を以て工女に對するか　原富岡製絲所長　古郷時待
秋蠶飼育上桑園を改良すべき要點　千藤一策
基督聖書の絹と辨財天女品の青色野蠶といふ文字の史的研究　石田孫太郎
事蹟に受賞されたる大成社　加藤知正

叩門 …… 三九—四九

四十二年度に於ける日米蠶絲貿易　法學博士男爵　阪谷芳郎
舶來品を凌ぐ田中式顯微鏡は如何にして發明せられしか　田中杢次郎
世人の知らんとする甘樂社は如何なる歷史を有するか　甘樂社取締役　岩瀬麗策
我邦に於ける淸人の蠶業教育　東亞蠶業學校長　關鉦三郎

實務 …… 四九—五〇

桑園年中行事　愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎

家庭 …… 五一—五二

衣服と夜具　馬場由

心影 …… 五三—六〇

●甘樂社長　山口太三郎君　●下仁田社長　佐藤量平君　醫學士　貴家學而

絲況 …… 六一—六四

●橫濱市場

問答 …… 六五—六八

●蠶網リウキウ草の件に就き質問竝答●蠶室用燈火に就き質問竝答●蛹證の顯微鏡檢査に就き質問竝答●蛆害に就き質問竝答●消毒に就き質問竝答●蠶の種類に就き質問竝答●蠶病消毒の件に就き質問竝答●胡枝子に就き質問竝答●繭殺蛹乾燥丼に貯藏に就き質問竝答●蠶兒飼育に就き質問竝答●玉絲に就き質問竝答

抄錄評論 …… 六八—七〇

●農業觀＝農村の好樂問題＝廿七年間の逆戰＝文科大學學制改革＝肥料取締改正運動＝日韓農業觀

會務錄事 …… 七一—八三

評議員會功績調查委員＝支會の新設＝支會職員の囑託＝地方委員部職員の囑託＝特別會員の推擧＝婦人部の設置＝通信委員の囑託＝理事學藝委員の出張＝星野理事の訃＝三重支會品評會＝熊本支會品評會＝下野支會品評會＝島根支會品評會

蠶桑雜觀 …… 八三—九六

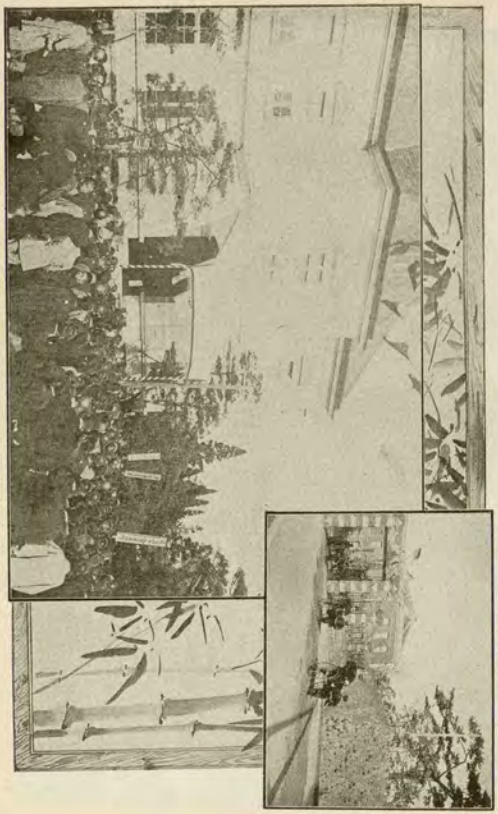
露國の日本生絲＝大浦農相の視察＝折返絲の改製＝帝國冷藏庫の名古屋支庫＝新案暖房器＝女子養蠶講習會＝石川縣能美郡に於ける記念的事業＝蠶業ヘ詐書＝生絲檢查所月報
●蠶海消滴●文藝●雜錄●新刊紹介●寄贈書目●人事彙報●次號の目次

迎歲の辭

乾坤旋轉無涯の時を刻み去つて茲に玉曆を改め新に鶴算を增す
嗚呼是明治四十二年の春瑞靄環宇に充ち山河草木一として新な
らざるはなし本會此佳辰に於て全國の會員諸賢と相見え新春の
賀詞を述ぶ福祉も亦極れる哉
本誌創刊以來既に十八星霜幸に聖代の餘澤を受けて今や茲に二
百號の春を迎へたり靜に過去を顧みれば時に或は蕩搖の憾なき
にあらざりしと雖も步一步其基礎を鞏固にしつゝ常によく本會
の目的に副ひ鋭意斯業の改良發展に資したるの結妙からざるを
自信するものなり然れども日と共に舊を釋て月と共に新に就く
は萬象の大則本誌亦此大則に從つて更に一新生面を開き多々益
々斯業に貢獻せんとす賞くは全國の會員諸賢斯業の爲尙新なる
聲援を與へられんことを

明治四十二年一月元日

大日本蠶絲會



東宮殿下御出會

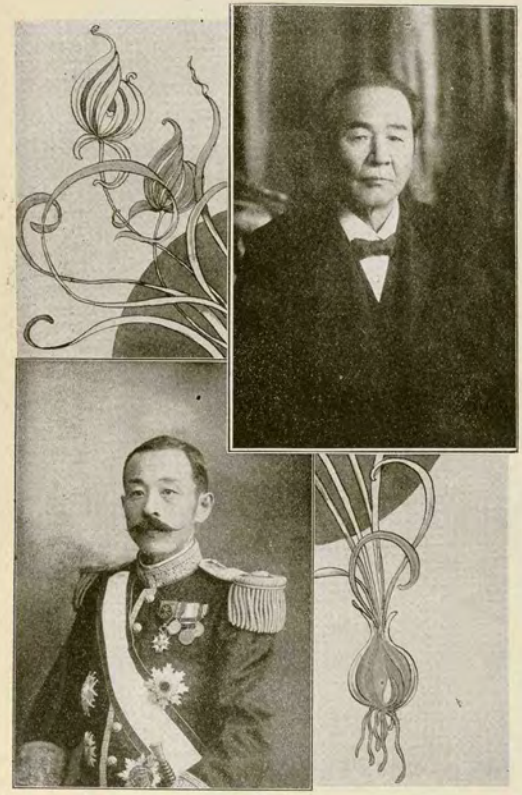
Départ de S.A.I. le prince notre Président

式典授賞當會所出張所一隅に於ける式會場會員閲覽會本

Inauguration de notre succursale de Sikizosho et la cérémonie de la distribution des prix au premier concours agricole et industriel.

男爵渋澤榮一君

Monsieur le Baron Y. Shibusawa.

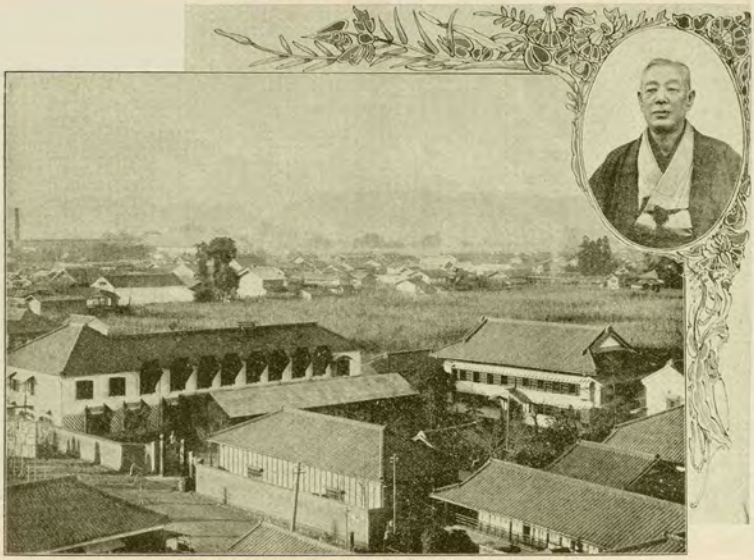


法學博士男爵坂谷芳郎君

Monsieur le Baron H. Sakatani, Docteur en droit.

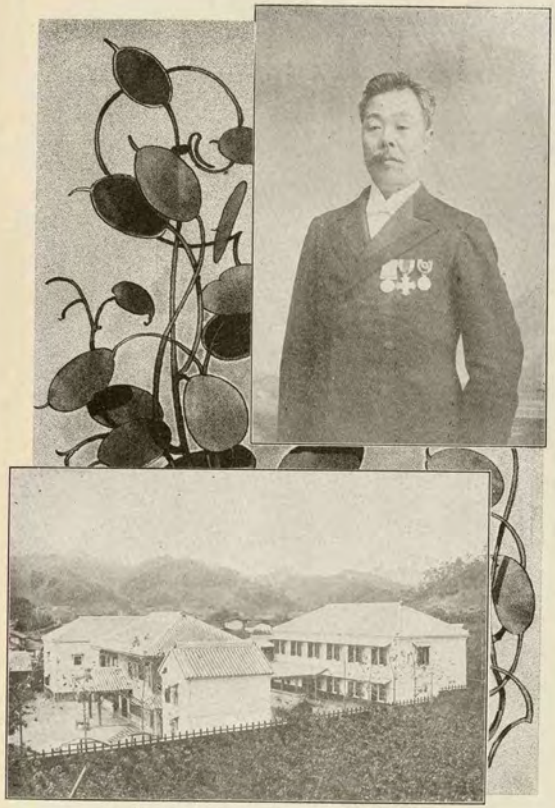
本會滋賀支會長濱婦人部發會式發列員

Première assemblée des membres féminins de notre succursale de Shiga.



甘樂社と同社長山口太三郎君

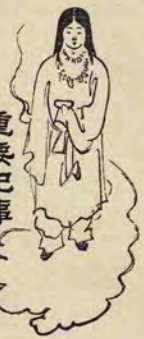
La compagnie "Kanrakusha" et son Président monsieur T. Yamaguchi.



株式會社佐藤紅茶と紅茶仕下

La Compagnie "Shimonitasha" et son President Monsieur R. Sato.

大日本蠶絲會報　第貳百號



重要記事

大詔拜讀の感を述べて貳百號の祝詞に代ふ

會頭　男爵　松平正直

我允文允武なる今上天皇陛下は、明治四十一年十月十三日を以ていとも貴き詔勅を下し賜りました、慶んで是を拝讀いたしますに、宏大無邊、崇高、絶大の威恩に觸れまして洵に感激の至に禁へられません、本會茲に十有八回の餘を重ね、四十二年の新春、第二百號の發刊に當りまして、六萬有餘の會員諸君と共に之を拝讀し、聖旨に悖ることなからんことを期する考てあります、余不敏、聖旨の宏遠にして叡慮の御座します處を詳に窺ふことが出來ませぬけれども、遙に拝察し奉れば、帝國臣民たるものゝ、日夜服膺すべき適切なる當今の要訓であります、國運發展の道を指導せさせ賜ふたことゝ深く恐懼致すのであります。

陛下が國家の爲に、民草の福祉を増進するに、將た亦、世界平和の爲に大御心を注がせ給ふことは、今更申すも畏きことながら今回の詔勅を拝するに至りましては、誰か感奮せない者がありませう、驚ら〳〵慨れ、世界現時の大勢は、活動、進化、向上の大潮流の中に在りまして、日進月歩、文運日に〳〵に新となり、寸時も止みません、而して地球上に國として存在する以上は、洋の東西を問はず、地積の大小を論せず、此進化向上の潮流に船々浮べなければなりませぬ船を浮べました以上は、徒らに安息を貪り棹さすことに怠るときは、進化の波に覆へされ、克く活動して舵を取りつゝ進むひとときは、激浪怒濤を破りて彼岸に達します、又彼の流れて止むことなき水は、常に新にして清澄掬すべきでありますが止て居る水は遂に腐れて生氣がありません、前者は滔々として海洋に注くに、同じ分子を有する水でありながら、後者は日光に晒され空氣に曝されて、何時か知らぬ間に亡失してしまいます、國家の存亡も是と同じ理ではありませんか、興廢起伏のありました世界の歴史は、其事實を示して吾々に以上の眞理を與へて居ります、幸にして我國には上に歴代英明なる君主を戴き、下忠良なる臣民のありましたが爲に世界

歴史に於る様な興亡は、建國以來未だ曾て御座いませんけれども、明治維新の大業に至る迄は、聰明を蔽ふて文明の鏡に曇影を印しました憾は少くないので御座います。

明治の御代になりましてからは、上御一人は夙夜國事に御軫念あらせられました結果、文物燦然として起り、國威は年と共に揚りまして、今や四圍八紘に汎く、世界無二の帝國として列強と班を作にするに至りました、然るに尚世界の大勢は前述の如くでありますから、其大勢に遅れない様、進化と、向上とを念とし、忠實業に勵み無窮の進化無限の活動より來ります、日に新なる文明の恩澤に浴し、各自の幸福を増進すると同時に、國威と共に發揚する國光を汚すことなく建國以來の精華を世界に示すとに勉めねばなりません、而して各自の幸祉を増進せよふとするには、國運の發展に須たなければなりません、國運の發展は國民の健全なる進歩に基するのでありますから、國民の健全なる進歩を計りまするには第一國民の堅實なる志操を養はねばなりませぬ、堅實なる志操とは世界の大勢を達觀せる國家的觀念から發動する、恒心の動作が日常の職分の上に現る丶様勤むる心であると考へます、言葉を換へて言へば、軍人たると農業者たるとを問はず商工業者たると爲政者たるとを問はず、國民の全部か擧げて協力一致夙夜和智醒し、忠實業に服するにあるのであります今や日露大戰の後を享けましたる日本は、戰後日尚淺きに係らず、外は世界列強と共に、永く世界平和の慶に頼らんとして折衝其効を奏し、各國との協約を締結されましたのは、洵に慶賀の至りに堪へません、斯の如く本邦四圍の境遇が平和の風に滿たされてある以上は、先以て内に殖産興業を發達せしめまして、過去の創痍を醫するに勉めますと同時に、國富の充實を計りまして、二千五百年來享け來りました日本國の前途の爲めに、至大至重の天職を盡さねばならぬ時期であります即ち勤儉産を治めまして道義の頽廢を防ぎ、熱誠事に當りまして資を貯ふべき時期であります。

我同胞は一度劍を携げて戰場に臨みますれば、死を期して生還を期せず、砲彈山を劈て碎け、腥風颯々たる處に、更により多く傷ける戰友を援けまして、己の負傷己の流血淋漓たるを忘れ、仆る丶をも知らない程、勇烈にして且厚き友情の美を發揮しまする民族であるのに、平和の戰爭に之を見ますれば、政界と云はず實業界と云はず、己を省ずして人を羨望しましたり、奮鬪と努力とに依りまして成功、榮達した者をも怨嗟し、長幼序を失ひ、他人を犠牲に供し、他人の商標を模造するも己の榮達を計りまして愧づる色もなく、廉耻の心日に失せ、風敎道義月に頽りまして、公徳を思ふ志は益々薄うなり行きますのは、寔に痛心に禁へぬ次第で、斯る有様では國運の發展を期し、永く平和の恩澤に浴せよふといたしましても、望て得べからざることと素よりであります、故に御軫念の餘り詔書の下りましたのも決して偶然では御座いますまい

惟ふに上は宰相國臣より、下は樵爺漁夫に至るまで、上下心を一にせなかつたならば、國の平和國家の發展は望んでも得られませぬ、泰山は蟻穴より崩る丶ではありませんか、皆心を一にして國家を思ひ、各自忠實職務に服し勤めて怠らず、華を去り實に就き産を治むるに勉めましたならば、恒産供はり恒心起り信義を重し、禮節を尊ぶことになりませう、斯くしましたならば、蒼生は常に崇高莊嚴なる希望の光を仰さつ丶、而も平和の樂を享け醇厚の民となり、憂へずして均を附、上に非政の嘆なく、朋黨墻に鬩ぐの慘もありますまい、斯くて互に和誠め勵みましたならば、頽廢に似かんとする道義、風敎も振興するに至るでせふ、風敎が振興しましたならば、國運發展の資源を涵養することを得まして、庶幾は我帝國の精華を世界に表彰することと疑ひなく、祖先の遺風を纂ぐると共に、永く平和の恩澤に浴することが出來ませう、恐れながら、大詔の御主旨が玆にあるかと存じますさりながら、聖旨は實に至高絶大で御ざいまして、是はほんの一端を窺いたるに過ぎませぬ、實に戊申の大詔は、無窮なる我帝國將來に生命の淵源を明にせささ賜ふたものと確信致します、斯る御惠み厚き勅詔を拜しまする國民は、欣喜雀躍して努力、奮勵業務に勵まねばなりません、翻て國産中の重要なる位置を占むる我蠶絲業界を見ますれば聖旨の剴切なる、或は斯業の爲に下し賜へるのではないかと感ぜらるの丶であります、本會並に會員諸君の責任、重且大なるではありませんか諸君夫れ自重して服庸に勉められんことを、四十二年一月一日第二百號の紙上に於て謹て大詔を拜讀したるの所感を特に諸君に警告するのであります。

論叢

明治四十二年を迎ふ

會頭 男爵 松平正直

祥雲天に靉靆き、瑞兆歴々として鳳城を廻り、佳氣六合に洽くして、衆庶生氣に滿ち、上下椒杯を擧げ相喜んで希望の光輝燦閃たる、四十有二年の佳辰を迎ふるは、洵に是れ昭代の恩澤でありまして、此千歳一遇の明治の御代に生を稟けましたる五千萬同胞の幸祉は、山の高き海の廣きを以てしましても、譬ふるに足りません、本會又此恩澤に浴しまして、齢を重ぬること玆に十有八回第二百號の發刊に當り六萬有餘の會員諸君と共に、涯りなき多幸多福なる新春を迎へまするのは、感喜に堪へない次第でありまして會員諸君と共に、いやが上にも榮へゆく御代の、無疆と聖壽の萬歳とを壽ぎまつる外、爲すべきを知りません、

惟ふに新年の慶賀すべきは、萬古不變の事でありまして、獨り今歳のみではありません、左れども殊に己酉の春光に浴

しまして、抃舞に堪えない次第のものは、國民の永來永劫傳へて忘るべからざる紀念と、最後の勝利者たるべき吾が經驗とを持して、奮闘すべき鏡臺に臨むからであります、抑も

永劫忘るべからざる記念とは何ぞや

他なし、客年十月十三日下し賜へる詔勅是其一なり、六月三日皇后陛下東京蠶業講習所に行啓あらせられまして御巡覽の後、懇篤なる御言葉を蠶絲業者に下させられました、是其二也、東宮妃殿下には、昨春浦山御所に於て、親しく御養蠶せさせ給ひ、範を民草の上に垂れさせられました、是其三也、本會總裁伏見宮殿下には、斯業の御奬勵に厚き、幾多重要の職に在らせられ御繁忙に渡らせ給ふにも係らず、夙に起き夜に寢ねなく御繁多の御眼ひなく御奬勵在らせられました、即十月七日には本會臨時總會に十月二十八日には靜岡支會發會式幷に第一回品評會褒賞授與式に、台臨在らせられまして、本會の為に盡力せられました、是より先、皇后陛下が、東京蠶業講習所へ行啓せられました、是其四也、嘆、在らせられました後に、總裁殿下にも台臨在らせられまして蠶絲業の實務を親しく御覧せられました、是其五也、嘆、九重の雲井に高く御座しまして、民草の產業を御軫念在らせらるゝこと、丹の如く雲井遠かに金枝玉葉の御身を以て、蒼生の業を御奬勵遊ばさるゝこと斯樣であります、今日諸君、我々の携る蠶絲業が、國家經濟上重きを爲すものなかつたならば、他に擇んで之を何ふことが、どうして出來ませうか、子孫に傳へまして永く記憶すべき紀念で御座います、過去一年に於る我蠶絲業界は、四十年度末期以來絲況の消沈に連れて、旗色頓に引立たず、意氣沈滯の間に一年を空過せる感があります、各自相省て慄慄たる點は御座いますまいか、抑も何故に意氣が消沈したでせふか、云ふ迄もなく絲價の安いのに驚を拔かれたからでせふか、果して然らば生絲は賣れなくつて安かつたでせふか、賣れて安かつたでせふか。

年次	目標	調査額	生絲輸出額	輸出額ノ調査額ニ對スル百分率
三十一年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十二年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十三年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十四年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十五年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十六年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十七年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十八年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
三十九年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇
四十年	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	三〇〇〇〇〇〇	一〇〇

之を絲計に見まするに、明治三十一年以降十ヶ年中、最多量を輸出しましたのは三十九年度及三十七年度で、一昨年は第三位に在ります、左れども、其輸出總價額、及び平均價格に至りましては、縱び末期に暴落しましたに、未曾有の額を示して居ります、右の如くでありますのに、少からざる憂慮と悲觀とで、四十一年を迎へました、而して昨四十一年度に於きましては、其惰勢を受けて顔る振はなかつたが、尙十一月末に於る輸出總額の累計は、九千二百九十六萬餘圓で、之を四十年度十一月の累計一億〇九百六十餘萬圓に比ぶれば一千六百六十四萬餘圓の差があります、三十九年度の八千百十九萬餘圓と三十九年度の九千三百六十七萬餘圓（何れも十一月迄の累計）に比べますれば、蠶絲業界を擧げて悲觀すべき、數量及價格ではありませんか、然るに悲觀するは、其意を得ない話ではありませんか、之を

消費額の上から見た ら大樂觀

せざるを得ない、四十年度に於る世界生絲の消費額は、約五百八十九萬餘貫であるのに、日本からは其約三分の一、細かく云ふたら三百四十九分の百輸出して居る、之を十年前に比較して見れば、十年前には四百十七萬餘貫の需要額であつて、日本からは、約五分の一しか送り出さなかつた、十年の間に世界の消費高は、五割より增加して居らんのに、日本の輸出額は十割以上、即倍額以上を輸出する樣になりました、實に悅ばしいではありませんか然らば

日本の生絲が增したか

然り、日本の生絲は、增した、增したけれども、十年前に比べれば其產額は五割餘りしか增さぬ、然るに輸出額は倍額以上に上ると云ふには、何か原因がなければならぬ、其原因は眼りも直さず、日本絲を世界で多く使ふ樣になつた、然らば悲觀處でない、御に將來の爲めに慶賀すべき現象ではありませんか過去の失敗は

吾輩は蠶絲業の爲に悅ぶ

人の失敗を見て、悅ぶと云ふたら、人が惡い樣であるが、將來を考へたならば、悅ばずに居られない、何故なれば、養蠶家と製蠶家とを互々密着せしむる媒介を、過去の苦き經驗が產み出す導火線であるし、尙又着實に製絲を爲さしむる訓戒を與へられたからである、經世家が熟々考へたならば、必ずや思ひ當ることであろう、即四十年度に於て正貨を輸入した額は、兎に角未曾有の金高であつた、此未曾有の金は、好し製絲家の手に甘い汁を吸さなかつたとしても、山麓、河畔の養蠶家が悲運に陷ちたと云ふものは、慎重の態度を外して上調子に乘り過ぎ、何處迄も絲價が昇るものと期待した結果ではあるまいか、此點に於て、今後の製絲業者は、大に相誡め、自重して事に當るだろう、斯く觀じ來れば大に悅ばねばならぬのに、悲觀するは思ふにしたゞ

敢無榮の夢が醒めぬからだ

會報購讀者
上組合せられた方には左の會報購讀券を送上げます
(一)五人以上の組合者は半年分の會報購讀券
(二)十人以上の組合者には一年分の會報購讀券
(三)以上五人分購買の組に半年分の會報購讀券
今一時に五人以

然り、一石四五十圓叢に往來して居つた繭が一夜明くれば六七十圓の價格を表はし、九百圓の高直を表した爲に、養蠶家は一度に二年振も收穫し、製絲家は一組に就て出來ない先から手付を打つて、買つて置くと云ふ上調子に乗り返して、製絲家先づ苦き經驗を嘗めた從て繭は安からざる間すで、昨年の三四月頃は、安過ぎて養蠶家が困るだろうと杞憂を懷た位でありましたが、幸に、相當の價格を保つことを得たのは、豫想外の幸でありましたが、尚一時高直を表した好兆の夢が醒めなくつて、繭が百圓にならねば引合はぬから、蠶を止めるより外ないなどと、途方もない事を云ふものもあるが、以て知るべき、繭が高く賣れれば從て繭の相場も上るから、希くは高く買つて高く賣つて繭の安いのは需要供給並に、其他の經濟關係で仕樣がないが、斯く云ふ吾輩と雖も敢て絲の安いのを好むものでもない、又繭を安く賣らしたいのでもない、絲が高く賣れれば從て繭の相場も上るから、希くは高く買つて高く賣れたいが、賣れても安いのは需要供給並に、其他の經濟關係で仕樣がないが

若し繭が五圓にならねば止めるが得策か

之に就て考へねばならぬ、繭が安いから之ふて、山畑の水の無い處へ蒔き作れない、然らば小麥か大麥を作るより外仕樣がない、其處で大麥を作つて販入が何程あるか、先づ統計に依つて見れば、今國の平均一反歩の收穫高は、大麥は一石三斗で、小麥は八斗五升平均である、左れば大麥は一石八圓の相場にして十圓四十錢、小麥は一石十二圓の相場にして十圓二十錢、夫れに裏作が同額の收入あると見做すも、大麥地で二十圓四十錢の收額にしか當らぬ、之を養蠶に比較したら、何程の相違であるか、一反歩から八斗八升の收穫は、戦争の時は、三十圓八十錢の販入になるではありませんか、勿論養蠶の經費に就きましては、幾分人夫を多く要する點はありますが、差額の全部を擧げて人夫賃に支拂ふ程多くもありますまい而して多く要りました人夫賃は、多くは自分の收入になるのであります、三十五圓の相場でも、大麥や小麥より遙かに收穫が多いではありませんか、夫れでも五圓にならねば止める、三十圓取るのが嫌で二十圓取れば好いと云ふなら、夫れは致し方がないが、農業者は空想に走つて一攫千金の夢を見てはなりませぬ

若し養蠶家と製絲家と密着して居つたならば

左程悲觀に陥ることもなかつたろうと思ふが、こは十日の致し方ない次第であるが、確に、製絲業者は經濟上及需要、供給並に事業經營の上に於て、繭が五圓以上に何時でも賣ると思ふ、夫れと同時に養蠶家も、繭が五圓以上に何時でも賣れるものでないと云ふことも、悟られたろうと思ふ、而して尚蠶業は補の德に於る、博板の樣に相互に扶助して行かねば、力あるものでないことも了解せられたろうと思ふ、然か思へば一昨年の冬以來、手付け之蠶絲業界の打擊は、大きく其傷痍は尚癒えぬけれども、與へられた教訓は實業と共に永遠に、之を蠶へ、蠶は一度に二年振も收穫し、製絲家は一組に就て出來ない先から手付を打つて、買つて置くと云ふ上調子に乗り返して、製絲家先づ苦き經驗を嘗めた從て繭は安からざる間すで、昨年の三四月頃は、安過ぎて養蠶家が困るだろうと杞憂を懷た位でありましたが、幸に、相當の價格を保つことを得たのは、豫想外の幸でありましたが、尚一時高直を表した好兆の夢が醒めなくつて、繭が百圓にならねば引合はぬから、蠶を止めるより外ないなどと、途方もない事を云ふものもあるが、以て知るべき、繭が高く賣れれば從て繭の相場も上るから、希くは高く買つて高く賣つて繭の安いのは需要供給並に、其他の經濟關係で仕樣がないが

奮闘の門出に屠蘇の甘さかな

加へるに遙かに海を隔てた北米合衆國は、客年十一月大統領の撰擧終りをゲ[illegible]まして最も本邦に親善なるタフト氏が推されて白宮[illegible]に入らんとするさへあるに、舊臘二米間に於る外交文書の交換は永く、東洋の平和を確保し、相互に親密を加へまして、[illegible]ることは舊に倍するとあろうとは、何人も信じて疑はぬ處であります、將に悲境の難を越えまして、希望嶋々たる春光に働かんとする前途に直日つ此彦兆があります、屠蘇の味殊に甘く、勇氣頓に倍するを覺ゆるではありませんか、

一年の計は元旦に在り、既に古きを温ね、是より聊か四十二年に於る吾人の希望を遠べて、會員諸君に貢さんとす

今年は何程に生絲が賣れるか

是が第一の問題である、之が完まつて始めて生産費其他を按排せねばならぬが、事は未來に懸て居るから、兩か雪か計も知り難いが、昨年度の平均額位を見當として賣る心算ならば、大見込違ひもあるまいかと思ふが、或は標準の安いのに驚く人もあらんが、なれども、自分が高く賣ろうと思ふても、賣手計りで買手がなければ始まらぬ諺だ、左らばとて二年も三年も賣らんで居ることも出來難い、夫れ故に、此の後に製絲家は蠶繭を買ふは[illegible]まいか、經濟的經驗を有する製絲業諸君は、或は之其下の算盤を立つるかも知れぬが、前途回復の見込はあるからと云ふて、相場以上の算盤も取れまい、尚且つ大恐るは無恐の賭に懲りた降だから、前轍に鑑み先賣して、事業を安全に經營する樣勉むるだろうが、術こうなれば一升九匁平均の繭量として、

繭は何程に賣れるか

を考へねばならぬが、先づ昨年幷と思ふて居つたら後に落膽する樣なこともなかろうかと思ふ、斯く云ふたならば諸物價幷に勞銀の騰貴した今日、引合はぬと云ふ人もあろうが、是は張合上から出る言葉に過ぎないので、他の農作物に比較して計數上から出た言葉でないことは、前段に述べた通り明である、茲に蠶絲業の考慮を煩はさねばならぬのは、世界の生絲貿易に於る日本現時の位置に就てである、現今

生絲は世界の必需品

となるに至つた、而して其需要額は年々增加し、其區域は日日廣汎になりつゝあるが、今此際充分の利益を得とするは早計に過ぎ、却て、前途を危くする恐がある、故に今暫くは其區域を廣むるに勉めて、一二の國に多少の經濟的變亂があつても、其影響を蒙ぶることなく、[illegible]樣に、今から心懸けねばならぬと思ふ、左れば現時は利益を得るも云ふよりも、寧ろ、得意場を殖やすと云ふ政策的方面に注視せねばならぬ、夫れには易く賣つて

況く行き渡る樣心懸けねばならぬ時代である、夫れ故に繭が、一石三十五圓であつたならば他の商賣で廣告することを思ふて、五十圓に賣つたが、賣る爲に十五圓の廣告料を拂ふたとふへば何んでもないではありませんか、是が抑も後日高く賣れる資本ではありますまいか

唯我獨尊の時代に非ず

吾輩はずんば人吾に先じて進まん、吾乘ずんば遂に背後に墜つ、佳僧なるなかれ、支那の大、伊佛の精、すべからざるものあり、平和の戰爭に於る優勝旗は、侵略奪取意の儘にして、精良品を安く賣らんとする勇奮兒の上に落つるは水の低きに就くが如く、必らず得らるべきものであるが、殊に寒心に堪えないものは、支那の蠶絲業である、其恐るべき所以のものは、今日迄の程度に止まつて居らぬからである、既に政治の革新、憲法の制定も近く兵事に交通に愈々革新の機運に向ひつゝありますから、日ならずして生産の發達する時機も來るでせう、生産發達の機が來すれば、蠶絲業も無論發達する上に地積の廣大、養むべきものがあります、もしたとへば現在でも上海廣東から、輸出する額は日本と相并んで居りますに、其時代になりましたならば、驚くべき額に上るだろうふと思ひます、加ふるに勞力は低廉です、競爭場裡に立ちますに唯一の武器を持つて居てはありませんか、吾輩は勤勉と熱誠とに依りまして、世界の生絲貿易市場に於る日本の地位を現在の地位以上に發くことに勉めねばなりませぬ

如何にして唯我獨尊の時代を造るか

是抑も春光陽暢なる時、初蚕に於て會員諸君に賣し、且絕叫せねばならぬ骨子である、骨子とは何ぞや、一言にして盡す、曰く安く賣つても尚餘りある樣蠶絲業を經營せよ、唯是のみ、唯右の如しと、是誠に平凡とある、平凡であるが是が最後に必勝を期する所以である、抑も蠶絲業者が絲價不振の爲に意氣消沈する所以のものは、高き品物を作りて高く賣らんとするからである、若しも絲が賣れなくつて安いのであるならば、夫れこそ考へねばならぬが、賣れて安いの用の相場で斯ることは決して生絲のみではない、商品の常であるが、斯の機會こそ販路を擴張する好機會ではありませんか、左れば安く品物を作ることに勉むるは、賣手の義務即ち養蠶家と製絲家の務めではありませんか、直段が安ければ、物が悪いでは販路擴張にはならぬ、尚一層勉強して精製品でなければなりませぬ、斯く說き來るたならば平凡でなくして難い事の樣であるが。

六ヶ敷い樣てやさしいのは蠶絲業

である、其策如何、忠實、勤勉熱誠即ち是也、熱誠事に當り、忠實飼育に從事しましたならば、二割位の增收を得ることはいと易い話ではありませんか、現今の統計に就て見ますに、一枚の蠶種の收繭高は八斗不足、七斗八舛にしか當て居りません、是では高く賣らねばなりますまい、乍併忠實と勤勉とを以て、二割の增收を得ましたならば一石に就て九圓

而して八斗不足取つて居る時は、知らず〳〵勞力、資本を失ひまして、勤勉して多く取る時になりますと、今迄、徒に失して眼に見えなかつたものが、形となつて表はれ、社界の供給に貢ぎまして、斯くしましたならば、客年下し賜へる詔勅の御主旨に添ひ奉る次第ではありませんか、是は決して難い事を强ふる譯ではありません、夫れ證據には日露戰爭の折は、國民一般が熱誠事に當りました結果、勞力の缺乏したことは、少なかつたのに係らず、收繭額は一割以上の增收に上つたではありませんか、然るに昨今は勞力が、舊に復しまして、生産的の力面に盡すことの出來ますが、充分ある時ではありませんか、是が骨子の一つであります。

一反歩から八斗八升の取入ては六十圓でも賣れますまい

蠶絲業上に對して、學理を應用することの遲んで居ります、我國の誇とする處であります、けれども之は一局部の技術の上に止つて、最も必要の、原料である、桑樹栽培の上には、まだ、行き渡らぬ樣であります、最近の統計を見ますれば、一反歩の收繭量は僅に八斗八舛であります、何んと心細い話ではありませんか、何故、桑業の取入が少いでせうか、是は土地の利用法を誤つて居るのが一つ、古い桑の樹を保存して置いて植え返しなくなるのが一つ、學理の應用が足らないのが一つ、先づ以上の三つだろうと思はれます、右は實に遺憾千萬であります、して前述樣心に堪えない次第ではあります、

取らんから桑が繁茂せんのだ

理屈から云へたら、取つたら減るが當然であるが、田地はかりはソーでない、取らねば減る、早い話が米熟の農家は年一年取入が少くなつて、田地は荒びる、計りであるのに、丹

精の養家は年一年取入か多くなつて行くは事實であります取れば增へて、取らねば減るとは、不思議らしいが不思議でない、茲に學理と實際と一致する處があるからである、未熟のものは土も堀り返さねば、肥料も鍬に與へぬ、從て與へた肥料も充分に作物に吸はれなくつて徒らるものが多い、其結果取入が少い、取入が少いから年一年肥料も減じて、尚未熟になるに、丹精のものは肥料を與へるよりも、土を堀り起して地面を粗鬆にし、日光や空氣の流通を好くして、肥料がこなれる樣にするから、少い肥料でも全部作物に吸はれる樣にする、從つて取入が多い、多いから益々勉强して肥料も多く與へる樣になるから取れば取るだけ取入が多くなる、鍬が畑の肥料であるとは昔から云ふてあるが、丹精の農家は隱然學理の應用を充分に行ふて居る、農業に學理を應用することの秀た獨逸では、同じ面積から三倍以上の收獲を得る樣になつたとは、餘程以前に聞た話であるが、我國でも一方に一反歩から四百貫も取入た實驗のあるのに、百七八十貫位に甘んじて居る樣では、縱い生絲が千入百圓に賣る樣になつてもまだ、安いと云ふて居られねばならぬ、若し斯の如くトばつかり見て居つて、自分の丹精を度外に置き、土地を利用して品物を安くする工夫を怠つたならば、他に乘ぜらるゝ恐があるとは云はぬ、丹精の結果として、せめては今の二倍位の收獲を常に持つて居た實を、一反歩から得る樣に、學理の應用と、勤勉と和待つてせねはなりませぬ、是骨子の二であります、二倍と云へば大した樣だか。

一年に二割づゝ增收すれば五年間で今の二倍になる

割合ではありませんか、百八十貫の二割は一ヶ年に三十六貫づゝである、之か一反歩であるから、一坪に割宛つれば僅に百二十匁にしか當たらぬ、二條から一條六十匁づゝの割合である、各自の勤勉に依つて斯く進むることを得たならば、五ヶ年後には繭は今の平年段で賣つても、取入れすら金高は同じではありませんか、斯の如く心を決して發奮場裡に立ち、機先を制して商權の獲得に勉めたならば、伊佛の精、支那の大を以てしましても、恐るゝ處はありますまい。其處で。

製絲家に望みがある

外でもないか、以上の如くして忠實、勤勉事に當つて割安に賣ることに、養蠶家が勉めたものを諸君か中間に立つて暴利を貪つてはならぬ、左ればとて千圓に賣る八百圓に負けますとて安く賣るにも及ばないが、絲況を云へして原繭を踏み倒して買ふなる事では、蠶絲業ノ永遠に各自繁榮する道でない、養蠶家は資本に對する相當の報酬が有れば好いではないか、製絲家は製絲業が保護し發達し、時に消長ある上に絲の改良に注意せねばならぬ、何れも養蠶家が勉强して、良い桑で美しい繭を取つても製絲家が茲に注意せねば

蠶絲業の發展は望んで得られぬ

事になる、即ち製絲家が精製品を造るに勉め、繭質の改良を養蠶家に促し、養蠶家か蠶種業者に原種の改良を促して、初めて改良と發展とが完備するのである、昨年十月以降生絲の優等品と通品と、百圓以上の差額を常に持つて居た實に好い現象ではないか、エキストラを製ると普通品を製すると、其注意手數の上に於て格別の差はあるまい功程と絲量の歩合であるが、ドー算盤に於て、普通品一ヶりもエキストラの方が利益が多い、左れば十萬俵輸出するものとすれば、百圓宛の高直に賣るなら一千萬圓の增收と云ふ事になる、此の一千萬圓の內、原料の屑絲歩合が多いと云ふても此屑絲は反物の價になる工賃が蒙んでも之は地方に分配する金で消失する者ではない、自分の手から出すのでなくつて海外から輸入したものを分配するに過ぎない事を考へねばならぬ之等が國富の一趨となるではないか是が骨子の三、右の如く蠶絲業者が國家的觀念から打算して業務を經營したならば

二十ヶ年の後には

蠶絲業者の勤勉と云ふ二字からでも、生絲が現在と同額又は夫を以上の直段であるとすれば、國債を償還し得る計算になるではありませんか、こは決して空想でない、要は蠶絲業者が忠實、勤勉、事に當るとから云ふと在る、前述の如く勤勉の結果として年々桑園より二割の增收を得る樣に土地を利用したならば、資本を分用わずして生產を高め度になる、此の高まつた生產は除分の收入である、除分の收入を積んだならば、之取る面倒は國富ではありませんか、國の充實は即ち國債償還に資する所以である、右は桑園より二割づゝの增收を得るのみの、計算であるが、飼育の上に於て前述の如く猶二割の增收を得る樣に勉めたならば、兩者相俟つて彼是、四割の增收を得ることになる之を

机上の推論と思ふたら大間違ひ

敢て推論や、空論を以て會員諸君に賞ぬてはありませんか申すも畏き事ながら、昨春、青山御所に於て、親しく御飼育の結果、繭を乘れさせ賜へる實績に感泣するも、難事に非ざること明瞭となるであろう、上に桑園の二割づゝの增收と云ふことは、影響する處が決して少ない、何故なれば、最大の原料たる桑葉が充分繁茂したならば、見事に蠶兒も生育すべく、蠶兒の生育見事ならば豐美の繭を收むしない、技術の改良に、土地の利用に考慮を廻らしたならば、敢て難事とするに足らぬ事ではありませんか、

ことが出來ます、養の繭は精良なる生絲となること疑ありません、斯の如く内に品質を改め外競爭場裡に出で低廉に販ぐことに焦心しましたならば、蠶絲業の成功は期せずして遂げられます。

國家か蠶絲業に重きを置くのは、決して偶然でありませんが斯くて、忠實業に勵み、勤儉産を治めましたならば、詔勅面して上雲井に高く御座します國母陛下を初め奉り、御奬勵遊ばさるゝ御主旨に對し奉りましても、早く此の成功を遂げませの德澤に浴し、大御代の永久榮えをさゝげ石の、巖となりて立て、夫御心に答へまつらねばならない次第でありませんが苦むすまで、謹〻一端かと存じます今迄

述べ來つた處を掻摘めば

第一に桑園を改良して一反歩から三百貫上の收業ある樣にし、第二に、飼育上に改良を施して、一枚の蠶種から一石以上の繭を取る樣に勉め、第三に、製絲家は生絲を精製して好い品物を安く賣る樣に勉め、第四に販路を廣く求むるに勉て、可成絲價に變動を受けない樣にする任るのです、之を行ふには、製絲家と養蠶家及蠶種家とが個々別々ではは其目的を達する事が出來ないから、兩者が和に提携して、安く賣れる樣に各自の勤勉に依る成功を望んだのであります、之が現今の蠶絲業界に最も必要の事と信じます、最て苦言を述べて會員諸君に質します、考えれば別事の樣であります、實行すればいと易い事であります、終に望み御繰返しします。

雨降ずんば人進まん、我桑ぜずんば人之に桑ぜん、事に當り怯懦なる勿れ、自重勤勉業に服し、最も速に最大の勝利を博せんことを

有望なる臺灣の養蠶業

薩北の學野部君より の通信に據れば、臺灣の山地には野生の桑樹が多く、中には純粹の桑樹林もあつて全く野生のものとは思はれぬものもあるのに、是迄は此の天與の產物を利用するものもなく、二利用な試みを為したる者もなかつたが、全然見込なしとも信ぜられて居つた、が加藤蠶絲長其他數人の試みた結果は其好である。尚總督府農事試驗場の家根アンペラの壁で、天井もなく床もない粗屋を建て、試驗したが、何時も結果は其好で種量一匁に對し上繭二斗餘も得た。而して飼料の桑葉は十分の飼料を得る度數を得て、何時も同島に於る養蠶は風の吹き通ぶ風の吹き通ぶと云て居つた故今日迄忘却せられて居つたから怪しまるゝ位である、尚此度は二十四五日上陸するから試驗場には三回飼育して居るゝそふである四回の飼育は容易で佐々木博士の說に依れば廣東地方の蠶は修入せて五回は飼育し得べしとのことである東京農園試驗場では右の蠶種を取り寄せて試育する筈であると、所早晩之を嬉しい報知に接した

余の蠶絲業に對する經歷及希望

男爵 澁澤榮一

今より四十四五年前の飼育法

余は元來農家に生長した者であるけれども今日は直接養蠶に關係をして居らぬ、併し蠶絲業に對する趣味は今尙持つて居るのである、然して余の養蠶業を經營したのは二十二三才迄であるから今よりザツと四十四五年計り前の事である、故に飼育法の知るも餘程昔つて居るであらうと思ふ。

余が郷里に居た時分の飼育法は溫暖飼育と云て盛に力を使た者である、余の母は大層力を入れて溫暖飼育法を主張せられたが今から見れば或は古風の方法で取るに足らぬかも知らぬが、併し當時は汎く行はれたものであつて、然も立派な繭が取れたものである。

余が蠶種を製造した時代の蠶種業

余の生家は埼玉縣に屬するけれども、上州島村の南に當て一里計り の所である島村は有名な蠶業場であつて蠶種を製造する者の多い處であるから余の家なども蠶種を製造した、其頃の蠶種家は普蠶種箱を用いて秋から翌年の春にかけて得意廻りをして其歳の蠶業の豐凶を視察し、前年の蠶種代を集めたものである、其の時に當りて弊作をした養蠶家は御前の御蔭で良い繭が取れたと云てほく〳〵喜んで興れるが扨失敗した養蠶家に成るとまづい顔をして樣々に小言を云ふのである、今から之を追想して見ても隨分苦心惨憺なものであつた、で其頃の養蠶家の智識は幼稚であつたから一般の飼育が巡れば失敗するから勉めて飼育法の講義をして例だものである、寒暖の氣候を我が身に引き當て、拾も赤兒を育つる樣な考で飼育せぬといけぬ空氣の陰湿や蔟桑の溫氣などは育敷ないから窓の明け立て溫暖の加減に注意し蠶座の清潔に圓り濕氣桑屑などを與へては蠶蠶を生ずるの恐れが有るなど、云つて敎て廻つたものである。

其頃の農家の養蠶は國の爲になるとか、又は經濟上の必要杯と云ふ公共的の考ではない、少しでも蠶を飼へば絹の着物の一枚も着らるゝとか、小使取りが出來るとか、或は善い繭を取て人々に褒らるゝのが嬉しいとか云ふ單純な意味の下に行たものである、夫れでも善く用來るとは出來ないとては蠶種家に接する態度が違だものである、況して今日は小にしては一家の盛衰大にしては一國の經濟に影響する大事業としては熱心に經營する蠶種家が失敗したと有ては隨分心配で其の責任も尠くあるまい、蠶種家の身になつても隨分心配で其の責任も重しであるから、十分の注意を拂つて精良の蠶種を供給する樣にありたいと思ふ。

余は如何にして富岡製絲場設計監督の任に當りしか

前に述べたるは余が先年養蠶を實際に行ひ蠶種製造に對する經驗もあるからのことであるが、製絲と云ふ事に就ては何等の實驗も持たぬ、併し明治三四年余が大藏省に奉職せし時に於て間接に生絲製造に關係する樣になつて大に之に趣味を持たのである御承知の如く明治の始の頃は日本から海外へ輸出する生絲は僅少で有たが何人も生絲を以て一國の重要輸出品として奬勵せねばならぬと云ふ考を持ち余も亦同樣の考を持た當時余は大藏少丞で有た時の大藏大輔たる大隈伯は製絲奬勵の爲に模範製絲工場を設置する事を企圖されたが、大藏省内に誰か養蠶の事を知て居るものは居らぬかと尋ねられたから、余は養蠶製絲に稍心得があると云つて出たのが緣となり、爾來養蠶製絲に關する問題は必ず余が參與する事となつた其の頃我國から輸出した生絲は伊太利て出來る樣な精良の生絲ではなかつた、總て皆座繰取であつて、歐羅巴風の機械取はない、故に「デニール」の揃はぬ生絲のみであるから需用地に於て僅に緯絲として消費せらるゝに過ぎない、之では一國の重要輸出品として其の販路を擴張する譯に行かぬから是非伊佛のやうに器械製絲に改めて以て經絲として立派の生絲を產出する樣にしなければならぬと云ふので、先づ富岡製絲場を設立する事になり、之が設計監督の任には悉皆余が當つたのである、之は明治三年の頃であつたが外商和蘭八番「ガイセンハイメル」を介して「ブリュナー」と云ふ技師を雇ひ尙伊太利からも技術者を連れて來り器械をも買入れて來て富岡に模範製絲所を起し實際的に範を天下に示した、之が抑々日本に於ける器械製絲の濫觴である。

今日の蠶絲業は如何にして發達したるか

然れとも附近の人々はアレ御役所の仕事で損得に關せぬから出來るが、到底吾々の眞似し得る事ではないと云つて顧みなかつた、で有るから、之が爲に直接大に改良されたやうにも見へなかつたのであるが、併し之が動機となつて信州にも奧州にも各所に器械製絲場が起つた而して今日全國到る處に汽笛の聲を聞かざるなしの盛況を見るに至たのは實に快心の事である、又此間に於て一の面白い現象を見たのは明治十二三年の頃奧州筋には政府から金を貸して製絲場を立させたのが幾箇所もあつたけれども官の保護に依て出來た者は皆潰れて仕舞つて今日其の影だに止めざるに反し、保護も何も受けずに民間で立てたものは皆成功して居る信州諏訪の各製絲場なども初めのことは知らぬが片倉林小口などと云ふ人々が獨立獨歩て奮鬪した結果が今日の盛況を來したのである、又彼の上州の座繰生絲が貿易市場に隱然たる勢力を有するやうになつたのは、碓氷甘樂下仁田社等の民間に於ける施設經營が發達した爲めである、他に依賴して計畫した事業よりは獨立獨行で計畫した事業の方が寧ろ成功すると云ふ事は之に依て明に證明せらるゝのであるから、他に依賴心のあるのは褒めた事ではない、併し今日の如く製絲業の發達を見るに至りしは、全く明治の初年政府が奬勵の種を蒔いたからである。

境遇は變つても蠶絲業に關係を絕たぬは何が爲めか

余は其の後民業に從事して銀行や會社に關係したのであるが、余の專ら力を盡して居る第一銀行は製絲家に資金の供給をなして始終其增進に便宜を與ふる方針を取て居る、今日橫濱に於ける原、茂木、若尾抔の大販賣店と同じく生絲賣込に盡力して居る澁澤商店は第一銀行より資金を供給して營業して居るのである　故に余は直接蠶絲業に關係せぬでも間接には深い關係を持ちて居るので之に對する趣味は寤に寐中を離れぬのである余が養蠶に對する經營は之を三つに區別することが出來る、即ち第一は農家の上から見たる經營第二は政治の上から見たる經營第三は商業の上から見たる經營である。斯の如く趣味にも經營にも變化のあるのは余の境遇が農家より官吏、官吏より商人と變たからである。併し境遇は變つても蠶業に始終關係を絕たぬのは是非之を充分に發達せしめて、國力の涵養に資したいと思ふ精神に外ならんのである。幸に蠶業は我國の風土に適し、北は北海道より南は臺灣に至る迄出來ぬ處はなく、明治十二三年の頃は僅に四五萬梱の生絲を輸出するに過ぎぬのが今日では二十萬梱も輸出する樣に數十年間に四五倍の發達實に長足の進歩といはねばならぬが斯く四十年前に養蠶をして居た余は此の樣に發達せようとは夢にも思はなんだのである、併し尙此上發達せしむる餘地は十分にあるから當業者は決して今日に安じてはならぬ殊に目前に支那と云ふ大敵を控へて居るのである、又人造絹絲と云ふ恐るべき勁敵も居る、支那は眠つて居る人造絹絲は水や火に對する力が弱いから駄目であるなど〻空嘯みをして、油斷をしたならば必ず後悔する樣なことがあるであろう、されば蠶業家は更に一段の奮勵をせねばならぬ、併し一度に精力を集注して後とが繼續せぬやうではいけないかな、徐々に精力を出して永遠に奮鬪する覺悟を要するのである。

余の蠶絲業家に望みたきもの二つ

終に臨みて特に蠶業家に望みたきは徒に虛榮心に驅られて實益といふことを忘れてはならぬと云ふことである。見掛けは非常に良くても、實益が伴はなければ到底競爭場裡に立て勝ちを制するものではない、品物が良くて直段が安くなれば如何なる勁敵が顯はれても恐るゝことはないのであるから、此の點に於て大に工風を凝されたいのである。次に今一つ望たきは、生絲販賣の方法である。直接外國の需用者と取引するのは吾々の最も望む處である。米國の「バタソン」の機業地に直接取引をすれば其の好みに應じて品物を拵へるから、至極宜しいけれども、一足飛びに橫濱商館の手を離れて遣ると云ふ事は至難の問題でありはせぬか、先づ以て海外販路の狀態を充分に調べ需用者との關係を圓滿に結び付けたる上て遣るやうな方針を取つた方がよくありはせぬか、此の點に於ては製絲業者に一考を煩はしたいのである。（文責編者）

論叢

余の發見したる新蠶種

學勲委員
農學博士　大森順造

我蠶絲業をして常に優者の位置に立たしめやうといふには絶へず經濟的と技術的との二つの方面から研究して少費多獲の道を講じ廉價であつてソーして比較的良質の生絲を多量に生產せしめねばならぬ、で本邦蠶絲業の根本的改良發達を圖らうといふには先づ生絲の原料となる繭から撰擇せねばならぬ、併し如何なる良質の繭を生產するとしても其之を生產する蠶兒の體質が强壯でなく容易に疾病に犯され易いものであつたならば育蠶者に損耗を與ふるから到底其目的を達することが出來ないであらう、又之に反して例令ひ其體質は壯健であつて比較的多量の繭を生產しても、其繭質が不良であつて解舒が惡く、索緒に無益の時間を費し、而かも其生絲の品質が劣惡で節や切斷が多く從つて强伸力が弱いといふやうのものならば、生絲經濟上劣敗者の位置に立たねばならぬといふことは論を俟たぬことである、果して然らば此等の弊害を如何にしたらば除去することが出來るであらう先づ新業を經營する目的に適ふ。

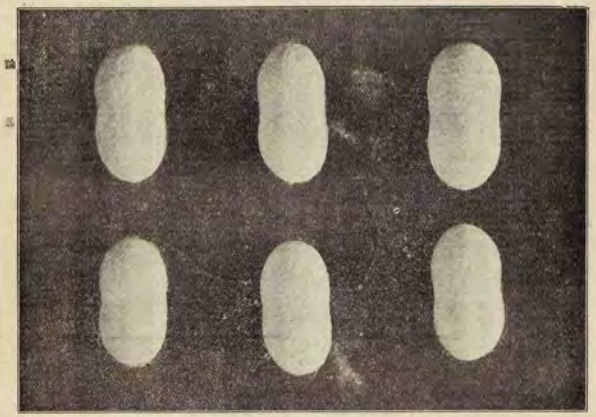
適當なる品種を撰擇するが急務である

一體適當なる品種とは如何なるものを云ふのであらうか、適當なる良種とは其體質が强健であつて、イロ〳〵の病害に抵抗する力が强く誰でも容易に飼育することが出來、然合に少い資料を用ひて比較的多量の絹絲を生產し、而かも繭質が良好で解舒も容易に節も惡く强伸力に富むところのものをいふのである、然るに今本邦の現狀を顧みれば尤も寒心に堪へぬものがある、嘗て農商務省が全國蠶種の種紙試驗成績に掲げたのを見ると、蠶兒は一般に絲量の悪い繭を營み、且つ其繭は概して解舒が雜劣である、之が爲に我蠶絲經濟上に不利を來たしたことは實大であるから、今の内に之が病根を芟除せなかつたならば他の世界蠶絲國と競爭場裏に立つて優者の位置を占むることが出來ないであらう、之れ余の最も憂ふる處であるから、余は多年專心思を茲に潛めて常に强壯で絲量の多い而かも解舒の良好な品種を生產したいと努めたのである、元來本邦種は其體質外國種に比し强壯であつて、敢て良質の生絲を生產する品種の鮮い譯でもないが、其絲質が優良で其光澤が鮮明で解舒が容易であることに至つては之れまでに行はれた幾多試驗の成績に依てみると。

支那種の優良なるものに及ぶ者はない

故に多數の育蠶者は支那種を直に輸入して之が飼育を試みたのである。併し其繭は良質であつても體質が弱い爲に往々もすれば疾病に侵され易いので圓滿なる成績を擧ぐることが出來なかつた、蓋し之は彼我氣候風土の殊異に依つて健全の發育を遂ぐることが出來なかつた爲であることは、明かである

明治四十一年產白露の繭



明治四十一年產白露の繭綿々狀なりたる繭　狀るす假醋に種那支

故に世人は昔く支那種の善良であることを知り乍ら飼育する者の惑い所以であらう、然らば本邦蠶兒は現在のやうな狀態に甘んじて居らねばならぬかといふに決してソーではない、彼に勝るとも劣るやうな品種を飼育してはならぬと云ふことは識者を俟たぬでも明かなことである伊佛のやうな國でも常に品種の撰擇に意を用ひて少費多獲の方法を研究して居るのである、て余は能く動物進化、遺傳の理法を應用したならば支那種の優良なる資質を、强健なる本邦種に移すことが出來るであらうと信じ數年間其法則に基き、嚴密なる標準の下に人爲陶汰を行ひ幾多の新品種を生產したのであるが遂に

豫期に近き一新種

を撰擇することが出來たから、之を白雪と名付けたのである、之は皎々として雪を欺くやうな光澤を有し、熱に遇はしむれば容易に解舒し得るといふところから、斯く命名したのである、今此白雪種に就て蠶兒發育の模樣を通べてみれば其班紋、體形、色澤等は本邦在來の良種といはるゝ又背など、違はず、其生育は一齊で體質が强健である、けれども其繭は在來種とは大に違つて繭綿の狀態、細緻形狀等支那種に能く似て居る、即ち長楕圓形で總目が極めて少く繭絮が粗い（挿畫參照）

支那の繭は從來支那（稍大きく一升二百三四十粒）を容るゝのである。其繭及生絲檢査所に依て組して之を檢査したるに次の如くである。

	一粒の繭長	一粒の繭量	平均纖度	切斷數	節數
白雪	四七七	二、八四	一、四	一、八	一、七
群馬縣產文吉	四七七	二、三二	一、八	一、四	一、七
長野縣產小石丸	四二七	一、八七	二、九七	〇、四	一、七
福島縣產赤熟	五六二	一、五八	二、八一	〇、三	一、七
山形縣產青熟	四八〇	二、七二	三、六四	〇、三	一、三
島取縣產伯陽	四七〇	一、八二	二、七三	〇、三	一、八
		一、四五	二、三四	〇、三	一、一

右の成績に據つて觀ると白雪は繭一顆の絲長は其最も長きものは八百六十回で、最も短いものでも五百二十回を下らない、故に耳平均絲長は有名なる在來種の熟れよりも優つて長いのである、又其給の桑量よりするも本邦種の蠶の解舒に至つては頗る容易なのである、生絲檢査所は本邦在來種に比して其成績良に住良にして殆と餘剩を得たり、と品評せられたのである、又纖度は中庸を得たが、併し其切斷に於て稍々在來種に比べ

東京廳下へ獻上して御覽納の榮を得たる新蠶種繭

白雪の繭及生絲

名稱	切斷	平均	纖度	節	節數	抱力	纖度
白雪	〇、三〇	一〇、七五	一、〇〇	一、二七	一、〇〇	三、七	三〇〇
支那種	一、一〇	一〇、七五	一、二五	一、四五	一、四〇	三、七	三〇〇

ある。

て多いやうであるけれども、之は單に繭に就て得た成績であるが、生絲に就て之を檢査したならば決してソーでないといふことが知らるゝのである、故に余は生絲に就ての檢査成蹟を左に示すとしやうう。

名稱	纖度	纖度	節	節數	抱力	纖度
白雪	一、二七	一、二七	一、四五	一、四〇	三、七	三〇〇
支那種	一、四五	一、四五	一、四五	一、四〇	三、七	三〇〇

右の成蹟に據つて觀ると白雪の特長とする解舒は極めて良好である、から、切斷數も少なく繭節も亦比較的少いといはねばならぬ、で其絲質は概して支那種に類似して居るといふことが出來るが、支那種の生絲を檢査したる生絲檢査所の品評と、普通本邦在來種に比し色澤佳良なり而して本所に於ける生絲檢査の總平均成蹟に比すれば纖度伸度强力に於て、何れも優るのみならず繭節の寡少なる殊に此種生絲の特長とする處なり云々」と云つてある如何に支那種の生絲が良質であるかは之に依て知らるゝであらう。

白雪の繭節に就て明治三十六年から同四十年に至る五ヶ年は下の如くである「本檢査の成蹟を案ずるに、普通本邦在來種に比し色澤佳良なり而して本所に於ける生絲檢査の總平均成蹟に比すれば纖度伸度强力に於て、何れも優るのみならず繭節の寡少なる殊に此種生絲の特長とする處なり云々」と云つてある如何に支那種の生絲が良質であるかは之に依て知らるゝであらう。

白雪の繭及蠶兒

明治維新検査所で中綱の生絲に就き検査せられた成蹟に較査してみると左の如くである。

	明治六年	明治七年	明治八年	明治九年	明治十年
大類	三個	三	二	二	二
小類	二七四個	二八二	二六一	二二七	一九五

右の成績に據って見れば白雪は大類一小類一二一七であつて、從來本邦種の平均額節よりも遙に少數であるといはねばならぬ。

次に白雪の强力及伸度を明治三十一年から同四十年に至る十ヶ年間同樣の纖度（十二デニール）を有する全國の生絲に就き、檢査したる成績に較査すれば左の如くである。

	明治三十一年	明治三十二年	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十年
强力	四〇・八	四〇・四	四〇・六	四〇・四	四〇・四	四〇・四	四〇・四	四〇・四	四〇・四	四〇・〇
伸度	三〇・八	三〇・四	三〇・六	三〇・四	三〇・四	三〇・四	三〇・四	三〇・四	三〇・四	三〇・一

右の表に據って視れば白雪は强力平均四十、グラムであって、在來種の明治年の平均よりも强く、度伸は平均二一・六であるから、在來種の平均數を占めて居ると云はねばならぬ。

次に練減に就き檢査した成蹟は左の如くである。

名柳	原量	無水量	練減後絲量	練減量	同百分比例
白雪	七四・二〇	六六・二〇	五三・〇	一三・一〇	一九・七九

之を明治三十一年から同四十年に至る十ヶ年間、全國生絲の練減量百分比例檢査成蹟に較査するときは左の如くである。

	明治三十一年	明治三十二年	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十年
練減量百分比例	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五	一七・四五

右の成蹟から觀ると白雪は百分比例一九、七九であつて、本邦生絲の特性を維持して、歐洲產生絲のやうに甚しい練減量を示さない。之を要するに新蠶種白雪は左の如き性質を以て居る。

一、蠶兒の體形斑紋は本邦種と異なることなく體軀は肥大して居る。

一、蠶兒は頗る强健で生育は一齊である

一、繭は長橢圓で縊目は極めて少い。

一、繭の網紋は粗くて密でなく支那種に類似して居る。

一、繭の繭綿は恰も支那種のやうである。

一、繭は稍大きく一升二百三四十粒内外である。

一、絲質は優良であって、經濟的飼育に適して居る。

一、解舒は特に容易であつて切斷するよりが悪く繊節も亦少なくない。

蠶絲の勁敵

人造組絲の如き比較的近時の發明なるに拘らず其用途多方面に亘り、年々需要の增加し今や世界の蠶絲國と目せらる我邦へ草子掛其の裝飾品等に至るまで、人造組絲の交織られざるものなく、又其の用途は益々擴張し、到底蠶絲の競爭品非置換くして實用に適せざる程迄に相成り、到底蠶絲の競爭品非ずと云ふ點も多くあるも、已に發明ある以上は其缺點改善の如きは後年取り易々たる事、人造絲國の發明に於て見るべし。

尾崎氏「蠶絲業者に與ふ」と題する論文を讀むに、之に關する論ずる必要あり、と、にしても案外こそ必要なれ

本篇は長野市に於ける本會第四回總會の席上に於て講演せられたものである。校閲を經るの暇なく速記のまゝ掲載したから誤りがないとも限らぬ故に博士及讀者に深く謝する處であります。

只今酒匂博士から御紹介下されましたのでありますが、されば私として別段珍らしい事をば御話致しまする覆案もありませぬ、又實は素養もありませぬのです、併し折角會期閣下からも、亦其他の方々からも是非陋居致して何か御話を致すやうにと云ふ御請求がありましたから故に、實は御厚意に甘えまして罷出致した次第であります。

御話致しまする問題は只今酒匂博士の紹介がございました通りであります、此問題は「蠶絲業と日本國民の經濟」と云ふ字でありますけれども、若し是を仮説切なる學問上の言葉で現はしますれば

蠶絲業と日本國民の經濟

法學博士　松崎藏之助

演壇

と題したいのです、「一寸」の字の居所が遙びましたのです、申すまでもない事ですが、諸君に於かれましても、彙々日本の國は心休成利害に密接の關係がありまする事柄に從事されて居りますからして、目下の世界の大勢に照して如何に國民經濟が大切であるかは、多少御感じあらうと事と存じます。其通りでありまして目下世界の强大國たらざるも衛國民經濟の發展且つは維持に焦心致して居るのであります、デ、此時に當りまして經濟政策が其宜しきを得ますれば、大にしては國民全體、又小にしては吾々一個人に至りまするが必ずや其利福を受けまするのであります、是に反して其宜しを誤りますれば大にして國民、小にしては個人に至る迄が必ずや其弊害を受けますることは喩然として火を睹るが如くであります、それで現今は、殆ど世界に歴史がありまして此方、經濟上でもつて各國民が、又各國に籍を有して居りまする個人が、困難にして而かも競爭の烈しい時代に遭遇致しました事とはあります迄いと考へます、如何にも世界は平和である、平和の光は西にも東にも通つて居ると言はれて居りますけれども、此平和なるものは、其實裡面に於て經濟上の戰爭をば一日としても亦一刻としてもない時はありませぬのです、

野蠻時代の戰爭は

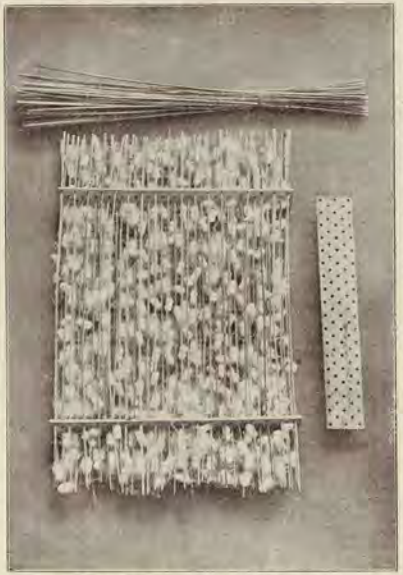
「ないてせうけれども、經濟上謂はゞ平和の戰爭は——少し矛盾な語ですけれども、平和の戰爭は時として又處として是なきは亡きませぬ、それでありますからして吾々も此點に

慮しては常に注意を怠つてはならぬのである、デ吾々日本國民は然らば如何なる主義、如何なる政策を採つて、さうして此難局に處すべきでありませうか、近頃殊に此日露戰爭後世の中は不景氣である、此時局に處してどうしたら宜からうと云ふやうなことは誰も人も常に言ふことであります けれども、併し其困難さ加減は、只今私の述べました世界各國民が、相競ふて居る、相實合つて居る此難局に處する方が尚私は困難であると考へるのです、こゝに於きましてか諸君の如き日本の國民の經濟に大關係のある職業、或は事業に御從事なされて居る方々に向つては尚更お話申上げたい次第であります、併し別段新らしい事もございませぬのです。

二月賣新綠五月糶新穀

諸君の中には已に業に御承知の方もあるに違ひありませぬが、昔支那の唐時代の詩人に蕭夷中と云ふ人がありまして此人が、彼の「農家」謂はゞ農家を傷むと云ふ題を以て當時の農家の、又農業者の狀態をば誠ひました名高い詩がございます、其句に「二月賣新綠、五月糶新穀、醫得眼前瘡、剜却心頭肉」と云ふことがある、二月に新らしい綠が出來る譯はありませぬ、舊歷であるからと言つた所が僅か一ヶ月か一ヶ月半の違であります から、支那人の事ですから何れ舊歷でございましたらう、併しそれにしても三月或は四月、中旬に未だ新らしい綠の出來る譯はない、それから六月或は七月の初頃に未だ新らしい米が出來る譯はございませぬのです、所がさう言ふて切り出して置きまして其後の句が面白い、面白いと云ふよりは寧ろ傷ましいのであります、即ち眼前の疵を醫して心頭の肉を剜却すと云ふのであります、此時に依つて見ますると云ふと、當時支那の農家の狀態は、誠に經濟は、まだ出來ない綠をば紙當にして金貸や何かに貸つたものと見えます、賣つたんおやないのですが、金を借りたと見えます、又夏の初頃になりまして最早食べまする食物が無いので秋になつて出來る米をば賣るなり抵當にするなりして金を融通したと見えます、果してさうであれば粒々辛苦したものが決して懷に入る譯には行かない、粒々辛苦した譯にも行かないのであります、只今の吾々の考を以て見ますれば誠に傷ましい、果して農家の狀態は斯かるものであるかと斯う思はれまするが併しそれも單り支那ばかりでもございますまい、日本に於ても或はさう云ふ時代もございました、其外他の國に於ても亦ありまするので、例へて見れば針塚農學士が言はれました獨逸などに於ても中にはやはり二月新綠を賣り――綠はありませぬから省いて――其爲に折角の骨折をば棄てしまうことが出來ないのです、併しそれは例外であります、當時の支那などでは殆んどなべての狀態が斯くあつたのであります、又數十年前日本に於てはなべての日本の狀態は斯くあつたらうと思はれます る地方もありまして、幸にして最早斯かることは殆んどございませぬ、二月に新綠を賣り或は五月に新穀を賣ると云ふやうな事もある者がなべて貧困狀態に處して居りまする農家は殆んどございますまいと思ふ

のです、私は昨日――昨日に限りませぬが――東京を發して（此方に參ります道すがら汽車から郊外を眺めまして同行の人々と話しましたことでありますが、伊太利地方に參りますと云ふと停車場などに於ては如何にも食などが徘徊して居ります、デ食事の時に神社佛閣に乞食が來ては如何にもどうしてがゴロ〳〵して居ることは是は怪しむに足らぬ、最も世界で富んで居る國の一つと稱へられて居る白耳義などでも彼の名高いワットルローの古戰場に行つて見ますると云ふとやはり體の良い乞食先づ別でありますが、停車場に於て彼の乞食がうろ付いて居るのは是は決して悅ぶべき現象ではないのである、然るに日本に於ては如何です、戰後誠に不景氣であるとか何とか言ふのは居りませんけれども、停車場などに於ては殆んど乞食一人をも見受けないのであります、そうして其附近の地方を見ますれば五穀が稔りとして實つて居るのであります 是は確かに日本全國を通じてある事であるとしたならば、日本國民の經濟の基礎は或はこゝにありはせぬかと思はれますのです、デ斯くあへまして御當地へ參りましたのであります が日本の輸出貿易上大關係のある諸君にお目に懸ぶ能にしてどこでも日本全國を通じてある事であるとしたならば、日本國民の經濟の基礎は或はこゝにありはせぬかと思はれますのです、デ斯くあへまして御當地へ參りましたのであります が日本の輸出貿易上大關係のある諸君にお目に懸ぶ能にして、さうして是等の事に就て所感を述べまするのは誠に光榮の至りであります、見た所が斯くの如く悅ばしくあります



伊太利羅馬多賀城村出土の武器類（藤村氏蒐集）

ますけれども、併しまだ〳〵決して安心は出來ますまいと思ひます、書の人は言ふて居るが、

十年一昔である

十年經ちますれば人も變はりますれば、又世の中も變はるものと見えます、のみならず俗の諺に來年の事を言ひますれば鬼が笑ふと云ふ事があります、シテ見ると云ふと一年でもなか〳〵大なる時機と思ひます、現んやす年に於てをやである、デ此十年の既往に於きまして、日本の蠶絲業がどの位の發達をなしましたでせうか、即ち明治三十年の輸出を見ますると云ふと、五千五百六十五萬圓餘でございます、それからして十年後の四十年目の輸出が一億二千三百二十九萬圓餘になつて居ります、先づ億以上の增加であります、唯一遍ばかりの總計的眼孔を以て見ますると十年の間に二倍の增加を致した、五千五百萬圓に對して一億二千萬圓になつたと見ると減に悅ぶべきやうでありますけれども、——大分多いやうに見えますけれども、十年はなか〳〵短い歲月ではありません、殊に此過去十年の歲月は實に切なる時でございます、デ日本に於ては生絲の輸出が一億以上に上りましたと云ふことは結構な事だが、併し他國を見ますると云ふと、やはり撫の如き大發展、或は大飛躍をば經濟上發展してなしました國民もさうあるまいぬ、併し唯單り日本ばかりではないのです、デ君は唯此數字を以て悅んで居ることは果して見て多いならば多い方であります、デ此數字は補ひがつけるやうであります、之に依りて見ますると、米も唯輸出する點からして見ますると、左まて日本の經濟には關係がありませぬけれども、輸出と云ふ事を離れまして、吾々五千萬の國民が寄つてたかつて所謂日本の國民經濟なるものを組織して居る點から見ると、米の生產なるものは非常な關係を以て持つて居ることが分ります、シテ見ると日本の經濟では米か或は生絲か、此二つ共にやはり農業には關係のありまする事であります、然らば之に續いて他に影響或は關係を持つて居ります產業はどざいますまいか、言ひ換れば外國貿易上大切なる關係を持つて居るものは無いのでせうか、無いのではない、必ずありまする、それは何でせうと云ふと先づ此絲の生產をば數をざるを得ないのであります。

らしい富が其年に於て日本に殖えます、今年は凡そ少なくとも八千萬圓の新らしき富が日本に於て生產されて——生產されたと云ふのはより多く生產されたと云ふ意味であります、そこで如何です、此春以來又昨年以來世の中は非常に不景氣である、困つたものだと今春以來の輸出を見ると、輸出は常に輸入に比して少ない、輸入超過が八千萬圓以上に達したと云つて頻りに憂へて居る者があるのであります、此一割强の米の增收の爲に是はテラス「マイナス」でどうにか補ひがつけるやうであります、之に依りて見ますると、米も唯輸出する點からして見ますると、左まて日本の經濟には關係がありませぬけれども、輸出と云ふ事を離れまして、吾々五千萬の國民が寄つてたかつて所謂日本の國民經濟なるものを組織して居る點から見ると、米の生產なるものは非常な關係を以て持つて居ることが分ります、シテ見ると日本の經濟では米か或は生絲か、此二つ共にやはり農業には關係のありまする事であります、然らば之に續いて他に影響或は關係を持つて居ります產業はどざいますまいか、言ひ換れば外國貿易上大切なる關係を持つて居るものは無いのでせうか、無いのではない、必ずありまする、それは何でせうと云ふと先づ此絲の生產をば數をざるを得ないのであります。

高山社の教育主義

高山社蠶業學校長　町田菊次郎

今日の實業教育

實業教育も近來益々盛になつて來まして到る處此聲を聞かぬはない樣になりましたが、商業にあれ、工業にあれ、どちらかといへば實業教育といふ樣なもの〳〵矢張り學理教育の方に傾いて居る樣に思はれるのであります、そこへ行きますと農業殊に蠶業の方では學理はやつぱりやはりまして他の實業教育に比して實際に偏するといふ弊は多少少ない樣に思ひます、一體實業教育といふものは學理と實技と相俟つて始めて其効きを掛るものであります、前御話した樣な今日の教育では遺憾ながら完全な教育といへなからうと思ふのであります、只今政府では此實業教育の補助として年々六十萬圓を支出して居るのでありまするが、どうも其卒業生に就て調べば有つて居るでせうか、是を見て一つ諸君と是から研究して見たいと思ひますが、明治四十年の總輸出額を見ますると云ふと、四億三千五百四十一萬圓餘でございます、さうすると此內で生絲が一億二千三百二十九萬圓餘を占めて居ります事から四分の一强三分の一强であります、日本の總輸出の三分の一弱は生絲に依つて占められて居ります、日本の總輸出の三分の一弱は生絲に依つて占められて居ります、して見ると最前から御話した通り數字の上では生絲業は減に日本の國民經濟上大切な關係がありまする、之に對して此すべき他の產業がございませうか、て海外貿易上で云ふ事は左たでは有りませぬけれども、前述の日本の國民の經濟上の關係から見ますると云ふと、それは矢張り諸君の御承知の通り御關係のある農業の主なる穀物の生產の事であります、今年は大分氣候が適順でありまして、豐年だと云ふ風聞であります、或は五千三百萬石の收穫があると云ふ報告もあります、兎も角五千萬石には上るでございませう、て是をば昨年の米の生產額に比較致して見ますると云ふと、約そ四百萬石の增加であります、平年に比較しましたならば二割の增加でございませう、只今一石の米價は日本の國民經濟上如何なる關係を以て居るでせう、此增加は日本の國始終變動しますけれども平六七圓でございます、一石は假に十六圓と致しました處で、四百萬石の米は六千四百萬圓であります、それから五百萬石の米であるならば七千五百萬圓であります、如何でせう、此四百萬石或は五百萬石は日本の米作上の一割腐でありまする、其一割腐は一割足らずである、但一割足らずの增しがありまするれば七千五百萬圓或は八千萬圓の新

て見ますと理論はよくいふが實際の腕がない、所謂片頭なものが多い、之は何故かといふと其受け來つた教育が片頭であるからであります、夫れは其等で……成程今日の實業學校の先生達は學問もあるオ能もある、教育者としては一點の申分はないが、惜しいことには、實際をやらせて見ると全く駄目である、殆ど物にならない……誠に憐れ此樣な有樣ですから其下に關陶された子弟は實技のあらう筈がない……誠に憐れかはしい次第です、今日の日本の實業教育といふものは大抵此の有樣です。

私の學校でもどうかさうしたくない、一方に學理を教へると同時に他方に實技をも教へ卒業して社會へ飛出しても直ぐ一人前の役に立つ樣にしたい……といふ樣な考へで常にやつて居ります、併し本科生の方は何分學科も多いことでありますし其の上十分實際的技術の練磨に努めて居りますが、別科生の方は單に實技を以て教育の主眼とし、之れに叢業教育上必要な大意を附け加へて教授して居ります、其の別科生となるものは毎年千四五百人はありますので一年生は毎年四月十五日から七月十五日迄實地に養蠶をさせ三年生に三月十五日から四月十五日迄蠶業に關する學理の大要を授け四月十六日迄實地を傳習する七月十六日迄實地教育は何分本校の設備が不十分で……ありますものですから、水校へ悉く集めて教へると……いふことが出來ないので飼育期になりますと別科生丈けは前述の人數を高山組の組員中和當資格を有する者六十餘戸を指定して分場として之に委托教授せしむる仕組みにしてあります、併し是等の分場に對する、實任は勿論私に在りますから私は順次に廻つて監督をして居ります。

高山菊次郎氏

一年生が五斗の繭を取る

飼育に也々順序がありまして、其順序を經ませんとどうもウマク行きません、處が之も最初の中は中々六ヶかしいので口で說明する樣な譯のものではありませぬ、飼育で一番六ヶかしいのは蚕室の使ひ方と蚕の乾燥と溫濕の調節とでありまして之さへ甘く出來ますれば一立派な養蠶家といつて宜しいのであります、處で私の學校では一人で何も彼もやつて一年生には五斗の繭を取らしめ二年生になりまして一石、三年生に成りまして二石五斗宛殺り上げて、結局一人一年平均一石の繭が獲れなければ一人前とはしませんことに極めてあります、最初の間は蚕の乾燥の調和や眠起の取扱等が中々言ふべくして行はれないのでありますが夫れでも三年やつて居ります内にはどうやら之を發えて一石五斗の繭は獲るやうになる計りでなく此三年の間には各人が文書に各種の仕事をやるので卒業迄には誰れでも一通りの仕事に就て修得することが出來るのであります、各クラスの生徒が年々受取る實業の割合は一年が二割二年になつて三割三年目に五割位で之で卒業するのであります。

私の學校を出た者も今日迄に既に六千人もあります、何れも實際的技術といふ點に就ては他に比して敢て遜色が無からうと思ふのであります、兎に角學理と實技とを調和させて學校を出る直ぐ世の中の役に立つといふ人物を造るのが高山組蠶業學校の教育主義とでもいひませうか。

獨逸の實業教育と日本の實業教育

獨逸に於ける國民教育と實業教育との關係は日本のとは大分違つて居る樣であります、即ち獨逸では一通りの國民教育を終へますと必ず先づ其向々の仕事に從事するのであります。例へば養蠶の如きものならば卒業後先づ以て實際に養蠶業に從ひ兩三年研究した後に蠶業學校に入つて勉强するといふ仕組です、是は彼の國の教育制度が然らしめるので、個性の發揮及實業教育の効果を全からしむる上に於いて最も良い策と思ふのであります、然るに日本の制度は甲乙兩種の實業學校を共に小學校を卒へて直ぐ入るといふことになつて居ますから、實地に就て研究して見ることも出來なければ又自己の嗜好が那邊にあるかといふことも知ることが出來難い、其結果實業教育を受けたといつても實際上の經驗が少ないから直ぐに役に立たず極端なものになると、全く自分の性格に反した事をやつて來たといふので、可惜半生の勉學を棒に振ることも少なくない、私の學校でも別科生の方は十六歲以上でなければ入學をさせないといふことに極めてありますから多少獨逸の制度に近いて居る譯で又實際から云ひますと別科生の方が別科生よりも確に研究が出來てゐる樣であります、なる所があります、なる程別科生の方が肚の據りがあるから入學前に於て研究の餘地を與へる樣に肚年者を取る組織にしたい考であります、なる程別科生の方は一層精確なる研究の餘地を與へる樣に肚年者を取る組織にしたい考であります、兎に角學理と實技とを調和させ

ますが、果して實行が出來る樣になりますれば幸ですが之がどうかは問題です。（文責編者）

原富岡製絲所は如何なる方針を以て工女に對するか

原富岡製絲所長　古郷時待

一ヶ年通じての繰絲は何故に不利なりや

私の製絲場は工女に對し之をといつて管理の方法を設けて只來る者は拒まず、去る者は追はずの方針で遣つて居るが併し一旦屋入れた工女は契約年限一ヶ年の間は何れも皆眞面目に働いて呉れるから、先づ安心なものである、デ一日中の勞働時間は午前六時から午後七時（此内昼食時に休憩を與ふ）までといたして居る他の製絲場と比較してみれば稍時間は短いやうだが「エキストラ」を製するのであるから、ソ一長く働かしても其成績は良くない、一日十二時間以内位は先づ適當なものであらう、夫れて一ヶ月間の休日は之迄盆と正月や大祭日の外に三回と致して参つたのであるが、此頃都合上二回に減じた、て本所一ヶ年の勤務日數は約三百十日間位のものである、併し段々考へて見ると一ヶ年を通じて仕事をさするといふことは餘り得策ではないから、釜數をモツと増して最も忙はしい八月の頃はウンと働かせ寒くて仕事も編足に出來ぬ一二月の頃は休業するやうにしたならば却て製絲能率も都合が良く工女の爲にも至極宜しからうと思つて居る、今の樣に一年中繊續して居ては中には疲れも覺えず御飯もたべすいふ危険な婦人が出來ぬとも限らぬ、故に一ヶ月位は休まして心を少しく他に轉ぜしめ且つ其間に疲たくことや疲れも覺えさするもよからうかと考へて居る。

宗教々育は何故に施さゞるか

澤山に工女を一個所に集めて置くのであるから、ソー纏つて良い者と計りといふ譯ではない、中には偶々不良の者も來る、夫れが伸間の折合を惡るくし、場合に依りては他に惡風を傳えさせぬとも限らぬ、夫れは兎に角一般の工女に美風を保たしめ其職に忠實ならしむるには、教育殊に精神教育が必要であるといつて居る人もあり、自分も亦ソ認めて居る故に常て宗教家を入れ道話をさせたこともあつたが、併しドーも其成績が良くない、此所の工女の大部分は越後である、越後は佛教盛昌の處だから先づ以て佛教信仰を入れた後の高い者のみならば宜しいが、ソーでない信仰になると精神教育の方針に悖るやうな說が出て來ることもあるから斷然之を止めることにした、トコロが今度は所員の内に熱心なる耶蘇信者があつて夫れが耶蘇の宗旨に基き精神教育をした併し之は亦佛教信者の者が反對をして別に團結するといふやうなことになり、遂には互に言葉も交へぬといふやうなことに

なつて酷く工女間の折合を惡くしたことがあつた、其實例は名古屋製絲の方にもあつたので私は斷然宗教に依る精神教育は止めにした勿論精神教育などと云ふことは普通の人では重み樣の次第で他から強いて精神的に遣つて見せて自ら感化して行くといふ風にして夜分の書き方や算盤を教へ、又は繊維を習はせ休日には希望に任せて茶の湯や生花を教へるといふやうにし工女の寄宿部屋には夫々部屋長なる者を置いて工女間相互の意思の疏通を圖らしめ、且つ風紀の神聖を保たしむるやうに勉めて居る。

貯蓄心は何故に乏しきか

本所は明治五年政府が製絲奬勵の爲に設けたので、當時は高貴の令嬢や奥さん方が工女となつて來たから一般に生活の程度が高く中には御年始週はりをするにも縮緬の三枚重ねで歩るくといふやうな始末でアノ人がアンナ風をするのに自分も……といふことになつて、總べて虚風が段々筆著に傾き、自然各自の經費が甘くいかぬやうな弊風があつたから、何とかして之を矯めねばならぬと云ふので、夫に貯蓄心の鼓吹に勉め、之を奬勵しつゝあるのであつて、近來は工女の貯金も大分増加して最も忙はしい九月の頃は休業するやうにしたならば却て製絲能率も覺えず御飯もたべすいふ危険も無く一ヶ月の休日は休まして心を少しく他に轉ぜしめ且つ其間に疲たくことや疲れも覺えさするもよからうかと考へて居る。

新潟縣東蒲原郡豪農邸林學校製絲技生女子實習教授之景

なつて酷く工女間の折合を惡くしたことがあつた、其實例は名古屋製絲の方にもあつたので私は斷然宗教に依る精神教育は止めにした勿論精神教育などと云ふことは普通の人では重み樣の次第で他から強いて精神的に遣つて見せて自ら感化して行くといふ風にして夜分の書き方や算盤を教へ、又は繊維を習はせ休日には希望に任せて茶の湯や生花を教へるといふやうにし工女の寄宿部屋には夫々部屋長なる者を置いて工女間相互の意思の疏通を圖らしめ、且つ風紀の神聖を保たしむるやうに勉めて居る。

貯蓄心は何故に乏しきか

本所は明治五年政府が製絲奬勵の爲に設けたので、當時は高貴の令嬢や奥さん方が工女となつて來たから一般に生活の程度が高く中には御年始週はりをするにも縮緬の三枚重ねで歩るくといふやうな始末でアノ人がアンナ風をするのに自分も……といふことになつて、總べて虚風が段々筆著に傾き、自然各自の經費が甘くいかぬやうな弊風があつたから、何とかして之を矯めねばならぬと云ふので、夫に貯蓄心の鼓吹に勉め、之を奬勵しつゝあるのであつて、近來は工女の貯金も大分増加して最も忙はしい九月の頃は休業するやうにしたならば却て製絲能率も覺えず御飯もたべすいふ危険も無く一ヶ月の休日は休まして心を少しく他に轉ぜしめ且つ其間に疲たくことや疲れも覺えさするもよからうかと考へて居る。

新潟縣東蒲原郡豪農邸林學校製絲技生女子實習教授之景

のではなかろうかとも考へて居る、尤も工女の中には親の手許へ返る者も尠くないやうだ、何れにしても貯蓄をせねといふことは人間の不幸此上もないことであるから繁風を認めた點はドシ〳〵改良させねばならぬと心得、細大となく注意を拂ひつゝあるのである。

工女の衛生は何故に佳良となりしか

何れの工場でも一番困るのは工女の衛生である、彼等は概して敢育の程度が低いから、衛生思想に乏しい、隨てイロンな病氣を起して始終頭の痛まされる、然し本所は遠頃此點に於て頗る好成蹟を收むるやうになつた、昨今の如き一人の病氣缺勤者もなく、何故に斯く衛生狀態が良くなつたのか、先づ第一に寄宿舍を崖際の高い空氣の流通の良い處へ移したのが良かつたのであらう、第二には年二回大掃除を遂つて所有汚物を捨てさせ朝夕の掃除に注意を拂はしむるやうにしたのも慥に良いのだ、第三には米飯を麥混飯にしたのが最も良いやうに思ふ、從來はコンナ高燥な處に居て毎日出て他へ轉地をさせるといふ、感きをやつたこともあり、又脚氣患者に次て腸胃病を起す者も尠くなかつた、夫れが麥を交ぜるやうになつてからは米飯の味を害するやうになり、副食物も注意するやうになつて所員は皆工場に食事にして注意するやうにして居る、以來最も困つた脚氣患者もなくなつて相互に幸福である。

秋蠶飼育上桑園を改良すべき要點

通常會員　千藤一策

近年秋蠶の發達は頗る迅速のものだが、將來は何なる程度にまで發達するであらう、又何如なる程度にまで發達するであらう、余は今日の農業狀態から將勞力の分配上から尤も有利の秋蠶は春蠶と同額若くは之れ以上發達させねばなるまいと思ふ、同一の桑園を以て兼用にも充てる秋蠶の發展上四亂採するならば、遂に其桑園を荒廢せしめ斯業の衰頽に陥る、秋蠶用に充てる桑園は蠶種の成績に變ふべきものとなるのである、然に之が改良策として、現今各縣に於ては切に桑實生の密植を疎植して數年の後收穫を得ると云ふ如き悠長の經濟時代では其間に於ては無益の費用を要し、速成桑園の奬勵に結構である、然し桑實生に付ては贊成を表することが出來ぬ。

桑實生は惡桑である

何となれば秋蠶は一夕桑園に於て其葉を摘採するものであから、勞力經濟上大業物を選ばねばならぬ、且數回飼育するは、勿論八月下旬若くは九月上旬に掃立べき晚秋蠶を飼育するのは最も得策とする處であるから晚生の桑種が良いのである、然るに得桑實生は小枝が多くて葉も赤黃だ小さい且早く硬化し易い樹命の短い收業の少い桑であるから到底實用すべきものではない、然らば如何なる桑種が最も夏秋蠶專用に適するかと云へば土地風土の相異に依りて一樣ではないが余は試驗の結果收穫二（一名八房）及九紋龍を以て良桑と認めるのである。

夏秋蠶專用桑園を設けねばならぬ

秋蠶飼育上桑種の良否には四個の要件がある即ち葉の大きい晚生桑であること、樹命の長いこと、收葉の多いこと此要件を具備するものは收穫一及九文龍である、而して世人は特に專用桑園を設くることが不經濟であるかのやうに思つて居られけれども、決して不經濟ではない、兼用桑園よりも寧ろ得策であらう、其故如何となれば肥料は七八割を施用すれば充分繁茂せしむることが出來る夏期の雜草が少いから、除草の手數を省くことが出來る、且其收業は兼用よりより以上である、五百貫以上を得らるゝといふやうに尤も經濟的のものである。植付は土地の肥瘠により異つて裁培ろしきを得ば、一尺乃至二尺五寸位に植付、一尺巾二尺五寸條間二尺乃至二尺五寸位の小枝を剪し數條の項肥料を施し例年八月上旬に一回行ふときは充分に伸長せしめ翌年秋蠶飼育上桑種の良否は四個の要件があるは收葉が多くある、次年は發芽前に採伐し其芽の二三寸に伸びたる一時に五人以上の紹介者は左の會報購讀券を差上げます

(一)五人以上の紹介者は半年分の會報購讀券

(二)十人以上の紹介者には一年分の會報購讀券

(三)五十人以上を奪て毎に半年分の會報購讀券

會報購讀者

上紹介せられた方には左

茂を圖るといふと、二年目には三百貫內外、三年目から五百貫內外の收業を得らるゝのである、ソーして數年後樹勢を衰へ收穫を得ると云ふ如き悠長の經濟時代では其間に於ては無益の費用を要し、速成桑園の奬勵に結構である、然し桑實生に付ては贊成を表することが出來ぬ。

鹿桑實生は惡桑である

近年秋蠶の發達は頗る迅速のものだが、將來は何なる程度にまで發達するであらう、又何如なる程度にまで發達するであらう、余は今日の農業狀態から將勞力の分配上から尤も有利の秋蠶は春蠶と同額若くは之れ以上發達させねばなるまいと思ふ、同一の桑園を以て兼用にも充てる秋蠶の發展上四亂採するならば、遂に其桑園を荒廢せしめ斯業の衰頽に陥る、秋蠶用に充てる桑園は蠶種の成績に變ふべきものとなるのである、然に之が改良策として、現今各縣に於ては切に桑實生の密植を疎植して數年の後收穫を得ると云ふ如き悠長の經濟時代では其間に於ては無益の費用を要し、速成桑園の奬勵に結構である、然し桑實生に付ては贊成を表することが出來ぬ。

桑實生は惡桑である

何となれば秋蠶は一夕桑園に於て其葉を摘採するものであから、勞力經濟上大業物を選ばねばならぬ、且數回飼育するは、勿論八月下旬若くは九月上旬に掃立べき晚秋蠶を飼育するのは最も得策とする處であるから晚生の桑種が良いの

三分の一內外に採伐し春蠶用に供し、殘りの三分の二內外を晚秋蠶等數回に全部を摘採し春蠶用の桑園を兼用するとしたならば、春秋同一の收穫を得て經濟上尤も得策である、次に尤も改良を要するものは經濟的肥料である。

經濟的肥料とは何てある

競爭場に立て販路の擴張を圖り勝を制しやうと尤も必要である、安い價に仕上ると云ふことは比較的安い肥料を使用するのである、最も安價にして有効なる肥料は何であるか、堆肥の經濟的肥料であることは誰も知る處であるけれども然れども實行困難にして大豆粕、油粕、魚肥

將來日本の蠶業を大發展せしめ世界蠶絲國と

其他の金肥を使用することは實に夥しきものである、余は堆肥製造の爲めに常に豚數頭を飼育し夏期は其糞便を蠶糞其他の材料に散布し冬は敷藁を用ひて堆肥を製し桑園肥料として居る、僅四頭の養豚で一町數反步の桑園は一厘半毛の金肥を用ずして充分に繁茂せしむることが出來るから頗る經濟的である尙一は綠肥の栽培である專用桑園は勿論兼用桑園にも四月下旬若くは五月上旬一反步に大豆七八斗を播種し凡六十日內外を經過したとき鋤込み之に燐酸及木灰を混用しつゝあるが、一反步三百貫內外の綠肥を得るから春期養豚より製したる堆肥夏期は綠肥を施用するのみで五百貫以上の收葉を得つゝあるのである、一昨年は繭價の高い爲めに蠶業界の人氣は一時に振興したけれど昨年は繭價が下落した爲に、不人氣となると云ふ樣では將來日本の蠶業に對して誠に患ふべきことである、要するに少費多獲の方法を講じて大發展を圖るのは尤も急務ではあるまいか。

未開墾地

我國現在の可耕地は總て五百餘萬町步であるが、傾斜十五度以內の未開墾地を開拓せば、優に四百七八十萬町步の可耕地を得べしと、卽我徒の乘ずべき範圍尠少からずと云ふべし、而して土地改良奬勵金は各府縣當局の手心にて未開墾地開拓に對し交附するも法律上支障なき由なれば昨今開墾に從事する時期亦好なりと云ふべし

基督聖書の絹と辨財天女品の靑色野蠶と云ふ文字の史的研究

（禁轉載）

通常會員　石田孫太郎

上　基督教聖書に見ゆる絹と云ふ文字の史的研究

基督紀元前六世紀の末年、巴比倫王「ネブカドネザル」の治世、羅馬では五世皇帝「タルクイニウスプリスクス」が君臨し、支那では定王周に帝となり、我日本では神武天皇在位の頃、豫言者「エジケル」といふ者頻りに豫言し、且民の墮落を嘆じたのであるが、其中に婦女子の美裝を說いた一節がある、則ち余が茲に主題としたる絹と云ふ文字は其記事に見ゆるものであつて、實に基督教の經典中には唯だ一箇あるばかりである、曰く「我れ衣の裾を以て汝を覆ひ、汝の羞づる處を隱したり、斯くて我水を以て汝を洗ひ、汝の血を濯ぎ落して汝に塗り、文繡あるものを衣せ、皮の靴を穿たしめ、細き布を被むらせ、絹を以て汝の身を罩めり、而して飾り物を以て汝をかざり、腕輪を汝の手にはめ、金の索を汝の首にかけしめ鼻には鼻環、耳には耳環、頭には華美なる冠冕を施こせり汝の美顏の爲に汝の名は國々に擴まれり、是れ我が汝に施こせし飾り物によりて、其美極まりなければ也」云々、桑華豪奢を極めたる「ソロモン」大王も、其一千の妃嬪も着たることなき絹布を、「エピケル」は市民の婦女子に如何して纏はしむることが出來たであらう、其文脈から察してみれば其着たる絹布は劣等の物にてきなかつたやうだ、則ち黄金製の裝飾と和等しきものであるといふことは知らるゝのである、そこで歐洲及び小亞細亞地方に蠶絲業のあるやうになつたのは基督紀元後第六世紀であつて、東羅馬帝國に君臨したる「チャスチニアン」一世の時であるとあるから、此年代より「エゼケル」豫言の時世に溯る時は、約一千二百年に上るであろう之で見る時は彼の絹布は其地方に於て產出したる物ではなくて、何れよりか輸入したものであることは論のない處である然らば此絹布は何れより輸入したものてあらう乎、之を決するには先づ支那の蠶絲業から見ねばならぬ、記錄によれば今から四千五六百年前黄帝の元妃西陵氏初めて蠶を養ひ、製織の業を創始したといふことである、然れども之れは信を置くことが出來ないとして、更に他の記錄を見れば禹の時桑土既蠶の文字が見え、古詩亦蠶のことを詠ふもの丶多い處から考へてみれば、支那の蠶業は世界最古のものであることが知られる、古事記の示す處によると蠶は保食神より出てたるが如く、天八千之媛命は栽桑養蠶の業に從事されたりと傳へて居るけれども我國に眞の蠶業史のあるは基督紀元後第二世紀の頃である、而して印度に蠶絲製絹業の勃興したる跡のない處からみれば、彼の「エゼケル」が云々したる絹布は支那產のものであることを論斷することが出來る、然らば如何にして巴比倫人は其絹布を支那より輸入したてあらう、之れ當然起るべき一問題であるけれども、上古商業史の示す處によりて之を窺ふことは出來ないこともない、則ち當時の巴比倫は全盛時代であつて其國民多く印度錫蘭島に來りて貿易したものであるが、隨つて當時の支那を見れば蠶業創始以來既に二千年を經過し、斯業は甚だ盛んであつたが、其國民の商業的素質は西隣の印度錫蘭島に來往するもの最も頻繁であつた、左れば彼の絹布貿易は印度の都邑に於て、巴比倫人と支那人又は印度商人との間に行はれたるものと推定せられる、則ち「エゼケル」が其國の婦人に與へたる絹布は巴比倫商人によりて、印度を介して支那より輸入せられたるものであるとは疑はざる處である、彼の「フェニシャ」人の如きは紀元前九百年の頃印度に入つて貿易したけれども、絹布を携へ歸りたること明

信州高井郡夜間瀬村坂口芋氏所有蠶種桑園は明治四十年に植付けたるものにして桑樹の丈け一丈二尺に及び一反步三千六百株に對する收葉量四百三十七貫目餘ありといふ

かでない、大王「ソロモン」の如きも之を着たることを記さゞるよりすれば、或は絹布貿易は未だ開けなかつたものであらうか、少しく疑ひを存じ置かねばならぬ、ソーして巴比倫市場に於ける絹布は如何なる織物なりしか、又其價格等は詳かでないけれども、「エゼケル」が其美を賞するより察してみれば、羽二重の如き薄物であつたと信ぜらるけれどもどうであらうか、其値段の高かりしことは「エゼケル」の語調にても推知することが出来る、兎に角此絹布は無論東洋產であつて而も支那絹であつたことは疑ふ餘地はない、二大商業國民が一は西より他は東より、印度に會して授受したるものである余は有力なる反證の出る迄て此說を固持するのである。

下　辨才天女品に見ゆる靑色野蠶と云ふ小文字の史的研究

金光明最勝王經辨才天女品第拾五の一、憍陳如波羅門に與へたる頌に、敬禮天女那羅延なる者が絹布を纏ふたことを記して居る、曰く常着靑色野蠶衣之也、靑色野蠶とは疑ひもなく所謂天蠶であつて、彼が着たる衣服は山繭織であると思はれる、是から其年代を討究してみやう。

辨才天女といふ者は吠陀によると、基督紀元以前三千年の昔に於て、「アリヤン」民族の水神であつて、流れ盡きざる河水を意味して居るのである、即ち「アリヤン」民族が自然崇拜物の一であつて、詮ずる處河流美に外ならぬてある、此河流美が世の推移と共に婆羅門宗徒によりて一神格と認められ其後所謂天女品の作製となりたるものであるが、今此年代を調ぶるには彼の憍陳如なる者の存在年紀を知るのが便利であつた、則ち佛遺敎經には「釋迦牟尼佛初めに法輪を轉じて阿憍陳如を度し最後の說敎に須跋陀羅を度し給ふとある之から見れば憍陳如は釋迦が佛法を唱へたる時、弟子となりし最初の一人であることを知られる、ソコで此人を釋迦生存時代の者とすれば、辨才天女品記載の事實も、亦同時代のものであるは、理の然らしむる處であるから、史實によりて釋迦の年代を調査すると共に、憍陳如のことも判然する次第であつたけれども、由來印度に歷史なく正確なる年代は到底知るに由ないことてある、西藏國にて言ふ處によると異說が十四ある最古のものは紀元前二十五世紀なりと云ひ、最近のものは紀元前五世紀とする、其間約二千年の差あるは驚くべきことである、其他は紀元前九世紀頃のもの多數を占めて居る、錫蘭島人は今より二千五百三十三年前に生れたりと云ひ、「カンニング」氏は二千四百六十五年前と云ひ、「マクスミュルレル」氏は二千四百六十四年に誕生したりと論じて居る、此外異說數ふるに遑がない、けれども支那人の印度に入りし者等の年代と照合して、今から二千八百餘年前に生れたりと云ふのが稍穩當であるとするは、多くの學者の一致する處であるから吾輩蠶業史家の分際として之を論議せない、又論議する丈の素養も無ければ、多數の說に從ふて釋迦は今より二千八百年前、則ち紀元前八世紀の末又は九世紀の始め頃に誕生したる者とする、然らば彼の憍陳如が釋迦より得度されたるも、釋迦存命中の或年なりしことが明かであるから、此事實によりて考ふれば印度に於ては二千七百五十年前の頃、野蠶絲の織物を有したりと言ふことが出来る、而して辨才天女品によれば此靑色野蠶衣を着た敬禮天女なるものは、其顏相甚だ獰猛であつて一見人を恐怖せしめたと云へば、其着たる野蠶衣なる者は、極めて粗雜なるものであつたてあらう、何となれば鬼の相を爲したる魔女が美艷なる絹布を着し居たことは思へない、又當時山繭絲の精巧なる術を知り居たれとも信ぜられないからである、ソーして此敬禮天女那羅延が着て居た絹布は、前に天蠶絲の織物なることを一言したが、諸君の既に知る如く野蠶には、靑色繭を結ぶ處のものと、黃褐色繭を結ぶ處のものとある、然るに其種類の何たるを問はず、黃褐色繭絲は靑藍色に染むることが困難なるに反して、靑色の野蠶絲は原絲既に帶靑色のものであるから、必ず天蠶の生絹であると解せらるゝ、而して印度に於ては今も尙數種の野蠶が存在する處から考へてみれば、此天蠶絲の原蟲は印度に存在せしものと言ふことが出来る、則ち二千七八百年の昔にありては印度人は極めて幼稚な方法で、天蠶繭から繰絲し、之を織物となしつゝあつたものである、彼の釋迦が着て阿羅々仙人に叱責された絹布は、恐らく支那絹であつたてあらう、之に就ては彼の「エゼケル」が絹布を其商婦人に着せたる年代の紀元前六世紀の末年なるに比べて、僅かに百五十年乃至二百年前で、而かも多くの支那人は印度に入りたれば、支那絹が印度に入つて居たことは論のないことゝて、殊に皇族釋迦のことなれば、其絹布も美麗なるものであつたてあらう、若しソーでなければ阿羅々仙人が之を叱責する理由がない、否殺生の故もあつたてあらうが、主因は華美を以て難行苦行の害としたるにあつたてあらう、少くとも此二大原因に據りしことは疑ひない。

事蹟に受賞したる大成社

加藤知正

曩に長野縣主催一府十縣聯合共進會に於て受賞したる新潟縣大成社の事蹟は眞に蠶界稀に見るの事にして、吾人の詳に知らんと欲するところなり、同社は全く現社長伊藤九郎太氏及技術員宅島林四氏の誠に依り經營せらるゝものにして同縣の素封家伊藤文吉氏の絕大なる保護の下に活動し着々實蹟を擧けつゝあるものなり、今其內容を摘記して諸君の一讀を乞はんとす。

一村の危急

澤海村といふのは阿賀川の分流に三方を圍まれた半島形の一小村落で、土地も平で地味も亦極めて肥沃である……といふと如何にも五穀が稔つて平和の光が村に溢れるだらうと思はれるが、それが丸て反對だから自然は不思議である、元來同村の耕地は水を有して水利を有せぬのだ、從つて灌漑に不便で、洪水が汎濫する、野に稻田なく、畑に黃綠の美を點ぜないのは實に之が爲である、加ふるに同縣特有の恙蟲は夏期に於て其害を逞ふし畑地の耕耘を甚しく妨げる、此樣な理由で土地が平坦で、肥沃な澤海村に稻も出來なければ滿足な農作物も出來ぬ、果樹の栽培も失敗に歸した、同村唯一の生業と呼ばれた藥藍も不成功に終つた、漸く盛になりかけた煙

草も亦荒れな有樣に陷つてゐる、麥禾豆菽の類は最も多く作られて居るけれども之で一村の經濟を維持するに足らぬ、蔬菜に至つては却て農民が市に需めるといふ有樣で、殆どお話しにならぬ、畢竟するに同村の凡べての農耕は自然の經營難に甚しく其生力を失つて居るのである。

二百五十餘戸の村民は皆首を傾ける、妻と夫とは吐息を漏す、同村の危急は年一年を刻んで迫るのである、俄然！俄然！同村數百の住民は生計上一縷の光明を認めた、曰く何？何々夫れは蠶業の經營である。

天與の蠶業地

古から利のある處害も必ず之に伴ふといふことを言ふが害のあるところ利も之に伴ふことも亦世事の常である、澤海村の農業を荒廢に歸せしむる最大原因なる阿賀川の汎濫は其半面に於て叉利益を與へぬでもなかつた、夫れは汎濫によつて沃土を運び來つては置いて行くので、同村は勞せずして多大の肥料を得るといふことである、加ふるに高刈仕立の桑園を仕立てるときは假令汎濫しても水害を受けることは至つて少ない、葉も一般に優良である、蠁蛆の如きも空氣の流通が善いので殆どなく、恙蟲の螫毒も春蠶終了後より十月上旬迄の間なので、收繭及秋末には甚しい不便がない、又一方勞力の點に於いても稻作が皆無なので勞力の供給は極めて潤澤である、實に澤海村二百五十餘戸の農民は蠶絲業經營に於いて纔に一縷の光明を得たのである、從つて同村の蠶業は副業といふ蠶業本來の性質を脫して本業となつて來つゝあるのである同村こそ眞に天與の養蠶地ではあるまいか。

新潟縣中蒲原郡横越村大字澤海伊藤文吉氏門前の景

以前は有名なる違蠶地

以上の說明に依つて澤海村は全く天與の蠶業地であると首肯せらるゝことゝ思ふが、併し何程天與の養蠶地と雖も之を自然に放任して置いたのでは蠶業地たる實は擧らぬ、よし假令此地を利用して蠶業を營むとも、經營施設にして其宜しきを得ざれば天與の利益を思ふまゝに收めることは出來ぬ、今でこそ澤海村の蠶業は漸く世人の認むるところとなつたれ、以前は有名なる違蠶地として知られ其產繭の如きも、他地方のものに比して一割以上も安いといふ有樣で、天與の蠶業地は是迄違蠶の地として永く慘憺たる經過を見て來たのである之は抑々何の理由に由るのであらうか、此理由が闡明されて除却若しくは改善せられたれば澤海村は實に天與の蠶業地として其名實を發揚することが出來るのであるいふ迄もなく其主たる原因は飼育法の幼稚にして區々なることゝ養蠶者の共同的經營を缺いてゐるといふことである、一寸した例が飼育法には一小村內に、天然育あり、折衷育あり高溫育あり、養蠶者は他の豐作を羨んで或は之を害すといふ樣な具合で隣保相勵み相扶けて共同の利益を進めるなどゝいふことは更に無かつた、此の如き有樣では迚ても好い繭の取れやう筈がない天與の蠶業地が違蠶の地として名高かつたのは蓋し故なきにあらずである、此點に氣が注いたのが同村が根底より改善さるゝ端緒なので、澤海生產販賣組合は實に之が救濟の爲に設けらるゝに至つたのである。

組合の設立

かう氣が付いたので同村では五十嵐平太郎氏の主唱により三十八年二月村內の青年子弟四十八名を會して約一ヶ月間に亘つて養蠶及蠶病に關する講習を開催した、其時の講師は自分と知友宅島林造君とであつた、開會中今の組合長伊藤九郎太氏は屢々臨席して村內蠶業の改善せざるべからざる所以を說き且つ講習に必要の筆、紙、墨を分與せられ以て講習生一同の奮勵を促された、兎角して此會は非常の好成績を收めて其終を告ぐるに至つた、終了後伊藤氏外數名の熱議に依つて前講習履修生を中心として、澤海生產販賣組合を設立するに決し、一方設立認可の申請を其筋に爲すと共に一方事務所を設けて着々其事務に取りかゝつた、幸に認可があつたので同年七月半ばに全く成立した。澤海生產販賣組合は同村蠶業の改善發達を促し以て同村の危急を救ふべく茲に生れたのである。

新潟縣中蒲原郡横越村大字澤海生產販賣組合事務所一部の景

組合で從來行ひ來つた改善策は（一）蠶室、蠶具と模範的に設備して組合員の參考又は使用に供すると（二）組合に附屬蠶業傳習所を設けて智識技藝を授け又合理的飼育法を實行して其成績を具體に組合員に示すと（三）傳習所に於て善良なる蠶種を製造し組合員に供すると（四）右の蠶種は凡べて翌春發生迄同所に保管すること（五）共同飼育を勵行すると（六）蠶繭は之を高價に共同販賣し、其聲價を擧ぐると（七）病蠶容器を設けて其散逸を防ぐことと（八）殺繭の殺蛹を行ふと（九）蠶室は「フオルマリン」液體消毒、蠶具は瓦斯消毒に依るべきことと（十）組合は可成品評會博覽會等へ出品すること等である。

組合施設事業の大要

上に述べた組合施設事業の大要を述べて見ると大凡そ左の通りである。

一蠶室蠶具の改善　蠶室、貯桑室、物置、殺蛹乾繭兼用消毒室、蠶種貯藏器等其他一般の蠶具は先進國の完全なるものに則りて之を同村の狀況に適する樣構造に注意してゐるところから、今日に於いては組合員たると否とを問はず、蠶室蠶具に就いては、他村に類のない迄改善されてゐる、從つて養蠶を主業として完全に經營されるばかりでなく、勞力の節減といふ點に至つては殆ど理想に近いといふも差支ない。

二蠶業傳習所　同組合の事業として傳習所の設立されたのは組合設立の翌年(明治三十九年)で、其目的とする所は(い)組合員及其子弟に農蠶業に關する智識、技藝を授け組合員の範たらしむること(ろ)良蠶種を造つて豐作の根底を固くすること(は)同主義者の技術者又は理事者たるべき人物を養成して之を地方に配置し以て其先覺者たらしめ同主義の組織を擴張すること等である、講習科目中に蠶業組合法　蠶種共同飼育管理等を加へて居るのを見ても其組織の他と異つて居る點が分る。

三蠶種の製造配布　前項の傳習所では以上の外更に製造蠶種の配布をやつて居る、大抵は組合員に分與するのであるが殘餘があれば其他の希望者にも無論分與する、之は掃立前の豫約によるのであるが、同所製の蠶種は貯藏催青等凡てを同所で周密なる注意を以て扱ひ、發生してから、各飼育者に送るといふ仕掛て、其上其蠶種を飼育した者に是迄違作をした者が一人もないばかりでなく、成繭の品質も亦頗る上等といふのであるから、年々蠶種の配布希望者の數は增す斗りで同所では遺憾乍ら今其需要の全部を充し兼て居るのである

野菜の爲惜むべきことである、此樣な理由で、從來違蠶地として知られて居た同村は、全く無二の豊蠶地に豹變して了つたのである、之は一は蠶種の精選と、一は從來の冬閑の不合理とを看破して、よく處すべきに處して其宜しきを得た爲であらう。

四稚蠶共同飼育　澤海村の違蠶が其原因全く蠶種の不良繼續に胚胎して居るとは上述の通りであるが、從來はそれ〳〵に加へて稚蠶期の飼育法極めて拙劣であつたので不作は愈々不作とならざるを得ない譯である、同組合に於ても傳習所を設立すると共に此研究に腐心した結果未だ理想的と迄は行かぬが兎に角昨今豫期以上の好成績を收てゐる、即ち收繭量、品質價格等に於ては縣下第一位で、他の產繭に比して約二割強の增收をするし、四十年度の如き繭絲不況の年でも尙一貫目四圓前後の高價を保ち卅九年度の如は他よりも一貫目に就き實に一圓乃至八十錢の高値を以て取引せられたといふとてある。

五收繭の共同販賣　同じ繭でも其販賣法の適否によつて價格に差を生じて來るのは爭はれぬ事實である、澤海村の產繭が從來隣村の產繭に比し一、二割安く時に蠶蛆の脫出其他の原因より非常の廉價で取引せられたといふのも、一は之が與つて力あるのであらう、同組合は此點に向つて最善の矯正策を採り、蠶繭の共同販賣を盛に斷行して居る、其方法としては、每年其時期に集會を催し、其決議を實行するので、先づ需要者を招集して一貫目の平均價の限度を聞き取り、更に組合員に協つて之を可否し、其後は專任者に一任するといふのである、今同規約の大略を左に摘むことゝしやう。(未完)

四十二年度に於ける日米蠶絲貿易

法學博士　男爵　阪谷芳郎

編者一日車を驅つて男を小石川の邸に訪ひ左の談話を聞き得たり、四十一年四月十五日横濱を解纜して歐米を漫遊せらるゝこと六ヶ月客歳十一月二十四日を以て歸朝せられたる男が鋭敏なる眼識と該博なる智識とを以て我が養蠶業の爲にせられたる談話は該業が將來の好指針たるを信じ特に男爵の閲を經て茲に錄することゝせり。

四十二年度に於ける日米蠶絲貿易ですか……左樣私は今迄蠶絲業といふことに就て特別に深く研究して居りませんものですから、只今一寸纏つたお話を申上ることはむづかしいです、昨年私が米國へ參りますときには横濱に於ける生絲は頗る不況で、荷も隨分と澁滯して居つた樣でしたが、米國へ行つて見ますと一は紐育恐慌の餘波が漸く、平穩に歸したのと、一は大統領の豫選も略タフト氏に決定したのと此二つの原因からして、商工業一般の不景氣も漸く回復に向はんとするの兆候が見へかゝつて居りまして其後日本蠶絲の輸出も豫想外に進みたることを倫敦て承知致しましたのです、此分て推して行つたならば他に甚しい異變の生じない限り米國に於ける蠶絲の需要は益々進むであろうと思ひます。

米國に於ける經濟界はいつも大統領の選擧前に惡くなるので昨年日米蠶絲貿易が一時非常に不振となつたのも一は紐育の恐慌の餘波もありますが、又此大統領選擧といふことが非常に關係して居たことゝ思ひます、何故大統領の撰擧が此樣に同國商工業に影響するかといふと、結局大統領に當選する人に依つて米國の政治的方針も違へば經濟的計畫も自然變つて來るといふので、自然商業にあれ工業にあれ安心して各種の企業に從へないといふことになつて來る從つて其結果商業は一般に沈んで來るので、啻に實業界ばかりでなく官海にしてもさうで、もし現大統領系の人でない即ち反對系の人が假に大統領に成つたとする、すると今迄の官吏は更迭の悲運に接せねばならぬので、凡ての事務も動搖する譯でありまず、此度は幸に「ルーズヴエルト」氏系の「タフト」氏が略當選に極つたので幸に從來の施政に大した激變を見ずに濟んだ斗りでなくル氏が大統領たりし時分に非難せられた問題は、定めしタ氏によりて矯正せらるゝことであらうと思ふ故に米國上下の人心は今や戰々兢々の境を脫して安心の域に入り、商工業も漸く活氣を加へ株式市場も中々盛になつて來たやうであります、共和黨が敗れて「ブライアン」氏でも當選すれば一般の人心が落付までには多少尙ほ時日を要するのてあ

りましようが、大勢既に此の如く定まつた以上日米蠶絲貿易は今後益々好況多望といはねばなりません。

蠶絲に對する米國の嗜好は確實なり

左樣……私には專門外で少し分り兼ねますが、チヨイ〳〵夜會其他の宴會に招かれましたた折に、觀察したところに據ると、米國に於ける蠶絲の嗜好は減退するどころでなく、却つて益々進んで居る樣です。

尤も近頃人造絹絲といふものが大分盛價を博して居る樣でありますが、何にしても各種の點に於いて、天然絹絲に比べて數等の遜色のあるといふことは、爭はれぬ事實でありますから此點に於いて人造絹絲は戮て驚くには足らぬことであらうと思ひます。

恐慌の防備……貨幣法の發布

先刻も一寸お話し申しました通り、日米生絲貿易が一時非常の不振に陷つたのは紐育の恐慌が其一因を爲して居るのであります、米國では今後斯る恐慌の防備策として一の特別貨幣法を發布致しました、此貨幣法の効用といふのは或る條件の下に丁度日本に於いて日本銀行が國外に發行をして金融を調和すると同じく各州限り銀行に於て組合を作り時機に應じて紙幣の發行が出來るといふことに規定したものであります。米國では日本銀行といふ中央銀行でやはりやはり米國では中央銀行がないから之れを各州銀行組合でやるのであります、此法律は丁度私が米國に居りました時即ち昨年の五月に議會で討議中でありまして、其時分には上下兩院に意見が相違して互に相讓らず中々決定しませんでしたが結局閉會の間際に兩院を通過して現はれ、直ちに施行されました、此法律實地の効能はまだ經驗しないのであるから、分りませんが、兎に角、今後、金融界の恐慌に處するの手段が具はつたのであります。

てありますから、分りませんが、兎に角、今後、金融界の恐慌に處するの手段が具はつたのであります。之れで米國の財界人心は頗る安心をしたのであります。

四十二年度の日米生絲貿易

此頃の世界の狀態を大觀して見ますと、何れの邊に於いても世界の經濟界を攪亂すべき程の事件はマアない樣です、バルカン問題や、清國皇帝及西太后の崩御に伴ふ問題などもないではありますが、之とても世界の平和を紊るなる者にはなりませぬ、他列强の態度を見ますると、平和を希望することあれ、自ら進んで世界の平和を破つて何か利益を得ようとしてゐるものは先づない、マアお國共に平和維持といふことに力めて居やうである、以上述べた如く先づ恐慌が敗つた大統領の選擧も略々決定して人心が落付き商業に關する方針も定まつた、恐慌の豫防策が設けられた、絹絲に對する嗜好は益々好潮に乘じてゐる、他に意外の故障の生じない限り風に段段考へて來て見ると、四十二年度の日米蠶絲貿易は先づ平年以下といふことはありませぬ、之て本年の米國農作物の景況が、どうてありませうか、不作なれば多少の減擧は免れぬてありませうが、若し豐作でもあらうものならば蠶絲貿易は平年どころではないもつと進んで恐らくは平年以上數等の好況を齎すことてありませう、どうかとうありたいものてあります。

舶來品を凌ぐ田中式顯微鏡は如何にして發明せられしか

田中合名會社長　田中圭次郎

編者一日田中式顯微鏡の發明者田中圭次郎氏な其師に訪ひ其發明談を聞き得たり、君は元大阪の人文久二年八月を以て鳴里に生る風に英語を修め大阪獄舍所に入り居ること十年に亦く思勤力勵みて遂に獄舍を脱し自ら店舗を開き理化學器械及藥品を製造、塾漸く盛となるや會名會社となし居ながら金門前に移し益々其名を高め且て君今數百の財を投じ莫多の勞苦を積んて顯微鏡の發明を完成したる以賞に本邦技術の進歩を世界に發揮するものなるのみならず、よく舶來の輸入を防遏して國家經濟上に多大の利を與ふるものといはざるべからず、乃ち君が直話を寫して社に掲ぐ

製作の動機

私が此顯微鏡の製作に着手するやうになつた動機は、一は顯微鏡は今日の科學を窮し又將來の學界に必須なものであるに係らず、日本で製作の出來ぬと、今一は毎年澤山の顯微鏡を輸入して之が爲に莫大の金を海外へ出すといふことは如何にしても殘念だ一つ製作して見やうと思つてゐたことゝ此の二つであります、御承知の通り、今日の醫學とか、細菌學とか、其他一般の科學とが長足の進歩を遂げたのは、直接、間接に此顯微鏡が與つて力あることは今

更に私の眼ゝ為るを要しませぬが、今後と雖も此等の方面は勿論其他の方面に多々益々人造に為ることは明であります、然るに悲しいことには、此顕微鏡は從來貴輪入りますので、就中獨逸の「ライツ」會社製の者が主として日本に輸入されて居ります、明治二十年頃と今日に於る其輸入高とを比較して見ますと優に十倍になつて居ります、明治三十九年度の統計に據りますと、實に數十餘萬圓の多きに達して居ります、此勢で進んで行きますと、年一年其輸入額を増加して來ることは明なる事實であります、そこで之は國家經濟上容易ならぬ問題である、どうかして日本で此顕微鏡を造つて此輸入を防ぎたいものだと考へ付きました、前お話しました動機と作つたので……其當時は何に顕微鏡位のものが用來ることがあるものかといふ樣な調子で始めましたのですが、サーやつて見ますと中々思つたよりもむづかしいので、殆ど困難致しました。

製作に着手す

私が此顕微鏡の製作に從事しましたのは、恰度明治二十八年即ちまだ日清戰爭の未だ酣な時分でありました、先づ麻布下北澤島津邸の裏、野川村字谷津といふ所に工場を立て、究にとりかゝりました、處が第一に來まして困つたのは、最初十分と、思つた場所が狹隘であり、且つ動力が不使であつたといふことです、そこで今少し廣い場所を得て水力を利用してやつて見ようといふ樣に、今度は下十條に進へ地所と家屋とを買ひ入れまして假工場を新設することにしたのです、ところが不幸なことには其場所が又水力が思はしくないのと、今一つは湿潤な土地で硝子の性質を毀損するといふことを發見しましたから、己むを得ず復た元の場所を機張して再轉するやうになつて爾來引續き今日迄やつて來ました訳です、此の如く顕微鏡の製作するには大に其土地の風土が關係しますから、顕微鏡の製作には先つ第一に製造地から吟味してかゝらねばなりません。

製作上の經過

土地の選擇にも餘程の注意を拂はねばなりませぬが、更に又「レンズ」の製作になりますと夫れは〳〵至難至極のもので到底筆紙に盡せないのであります、私は最初ナニ硝子を研製して相當の大さとし、之を組合せて金屬製の筒中に固定すればそれでよいといふ樣な積りで始めたのでしたが、どうして實際にやつて見ると中々さうは行かなかつたのです。

顕微鏡の組織中最も至難の點は接眼及接物の「レンズ」の製作であります、凡て一事一物を發明し又は成功するには夫々いふに云はれぬ辛酸を嘗めるものですが、殊に此顕微鏡の如きは極めて精巧なる機械であるだけに、又其製作にも精巧な機械を要しますので不便と困難とを感じました。

今其一例を擧げて其一斑を お話しますと、第一に硝子の選擇であります、「レンズ」に適する硝子は普通一つ〳〵に違ひますものですが、硝子の係數といふものは普通一つ〳〵に違ひますから、適確な硝子を得ますには勢ひ數百千の硝子の中から試驗に試驗を重ねて漸くに撰び出すので初の中は殆ど霧中に彷徨して居る想ひでした、第二には「レンズ」の角度と其組合せとです、選擇された硝子は更に之を研磨して角度を合ませねばなりません、接物「レンズ」になりますと、直徑七厘とか五厘とかいふ極めて小球であります、之を取扱ふ上に於て容易なかなか出來ません、殊に角度を合せるといふ段になりますと其苦みは、殆ど想像の外であります、そこで今少し廣い場所を得て水力を利用してやつて見ようといふ樣に、今度は下十條に進へ地所と家屋とを買ひ入れまして假工場を新設することにしたのです、ところが不幸なことには其場所が又水力が思はしくないのと、今一つは湿潤な土地で硝子の性質を毀損するといふことを發見しましたから、己むを得ず復た元の場所を機張して再轉するやうになつて爾來引續き今日迄やつて來ました訳です、此の如く顕微鏡の製作するには大に其土地の風土が關係しますから、顕微鏡の製作には先つ第一に製造地から吟味してかゝらねばなりません。

工學博士 永井久一郎

度に於て百分一は愚か千分の一の誤差でもあれば其レンズは廢棄して終ふより外はありません、それですから、一箇のレンズを優るには實に非常な苦心です、其次に來た事は此「レンズ」の組合です、前にも申しました通り硝子には係數がありますから、此關係數のものを組合せて一箇の「レンズ」とするので、角度を合せるのと殆ど同樣の難事でありました、第三には研磨法でした、之は「レンズ」の製作上主要なる仕事でありまして、其方法宜しきを得ねば前述の角度の如きも到底適當のものを得られぬのであります、今日でこそ容易なる研磨法も得られましたけれども、夫れ以前の苦心といふものは一通や二通ではありませんでした、第四には「レンズ」間の距離の調節です、以上の三件が其當を得た處で、今は之を金屬製の筒内に嵌入するのですが、之が又非常の難事で焦點距離の如きは最も困難を感ずるのでした、最初は一と三位しか出來ませんでしたが今では六百倍位のものが出來て居ります、併し實際に通んで八百倍千二百倍の物を作る際で望遠鏡も目下、苦心中であります。

以上製作上の苦心に就ては丸で局外者が聞くと嘘の樣な話が多いのです、殆ど顕微鏡ばかり幾個壞したでしたか、硝子の如きものも、ありとあらゆる會社から取寄せて未だ思ふ樣なのが無く頻りに長大息を發して居るときです、或る會社のが宜しいといふことを發見して光明を認めましたのですが、其間家内は穏々其無謀を忠告しますし、知人は嘆斥嘲笑するといふ有樣でしたが、私は男子の一度思ひつた事であるから何でもかんとか成功したい不撓不屈、如何なる辛苦に遭ふとも、決して煩悶もせず假令幾千度の失敗を重ねても、必ず大成したいといふ考から日夜寢食を忘れて繼續しましてそれが爲既に數萬圓を抛つて了ひました、今迄日本にも二三人此發明に苦心せられましたが或は途中血を吐き或は財を傾盡して空しく宇途に終つたのでしたが、私には此事がなかつたのは何よりの幸です。

苦心の効果漸く現る

ところが色々苦心の結果明治三十五年の内國勸業博覽會に出品するだけの品物が出來ました、幸に三等賞牌を受けました

た、當時の作品は極めて幼稚でありましたが學質したときは實に愉快でした、それから引續き研究に研究を重ね、改良に改良を加へ遂に五ヶ年の後即ち明治四十年の、東京勸業博覽會に出品した物には自分乍ら、其効果の顯著なのに驚き位で之を獨逸の「ライツ」會社の製品に比べても決して遜色がないばかりでなく却つて本邦の製品に居る位でした、果せる哉四十年の博覽會では一等賞牌を授與さるゝの光榮を得たのでありました。

如何なる人々が援助せしか

此顯微鏡も前後十二年で完成したのですが之につき私の著心は前述の通りでお話に出來ぬ程頭を痛めたのでありますが又私の順問となつて機械及精子の係數を計ることや其他の事について非常に働いて下さつた方があるのです、それは鈴木理學士此顯微鏡が幾期の如く出來上つたのも全く同理學士の賜であります、之は私が常に感謝して居る次第であります。終りに臨んで一言申上げたいのは既に歐米の製品を凌駕する品物が出來ました以上は成るべく輸入品を避けて本邦品を使用せば我田引水の樣ですが粗惡なものでもなく知らぬことの勝るとも劣らぬ品物が出來ました以上無理に莫大な金額を外國に渡さんでも濟むことであります、又清國上海から見ましても廣の事たるものと思ふのであります、殊に本多東京蠶業講習所長林同所技師の御兩名が此顯微鏡を師範になる明瞭なるを嘆賞せられまして證明書を下されて又京都の蠶業講習所では四十盞を賞上になりました、之は實に私一家の事ばかりではありませぬ又國家の慶事であらうと思ひます。

世人の知らんとする甘樂社は如何なる歷史を有するか

甘樂社 坂部綿役 岩瀨麗策

粗製濫造の救濟

社の歷史について一通り話せと仰有るのですが、社の歷史といひましたところで改まつてお話する樣なこともありませぬが、一體此地方は昔から製絲が盛んでしたが、併し當處であります、虛繊といひましても今のとは違つて極めて簡單なもので車が箱の外にあつて、マア大體今の繊器械と大差がありませんが只今の者の樣に澤山な歯車を組合せず大小二つの車へベルト即ち約束を掛けてやつたので、今日のも不完全な器械でとつた絲は之を揚返へすのであります、此樣な一個の揚籠に二つの小籠が付いて居りました、之は揚返器械の先が丁字形になつてる其一邊に繩を付けてグル〜廻はすので今から見ると隨分滑稽なものであつたのです、處が揚返に付ても「デニール」などといふことは毛頭念頭に置いてない、從つて途中で絲繊が屢〻切斷しても夫を決して下等に繼ぐ譯でもない、只ブツ付けて揚げて置くのです、でありますから、之を獲から外して結絲にして見ると絲屑見た樣なものが下手な岡波鳥樣見た樣に一杯にブラ下つてゐる、仕方がないから唾か何かで一時的にコスクつて賣飛ばすので、謂分其時分の粗製濫造といふものはお話にならなかつたのであります。

「デニール」にも何もかまはず四十繊を一撮として之を仲買人に賣り、仲買人は又之を濱師に賣り濱師が横濱の問屋へ出荷し之を外國商館に賣り返すといふ順序になつて居りました、こんな變梅なので當時は非常に絲が安かつた、ソコデ之れはどうしても揚返場を設けて絲質の一定を計る必要があるといふことの說が大分起つて來ました、中にも管て本社社長であります雨氏が此間に非邦、三井物產會社高崎出張所員磯清五郎の雨氏が常に骨折せられまして遂に明治十三年に北甘樂製絲會社といふものが出來ました、磯氏は其當時此地方へ濱師の金庫の樣なものを出張して居られた人で早く人へ資金を供給する爲に毎年當地へ出張されるのでした、此地方の小さい產繊をする人々が集まつて一の團體を作るといふことは既に明治十一年頃からやつて居ましたが、其具體的となつて今日の甘樂社の前身を爲すに至つたのは、全く此明治十三年の北甘樂製絲會社なので、マヤリ此地方に於ける生絲の粗製濫造を救濟する爲に起つた樣なものです、こゝで今迄區々であつたものを同一の揚返して品位を一定にし大に販路の擴張を計つたのであります。

初代の社長は石澤氏で其時の組合は富岡町、宮崎村、丹生村、三鄕村、宮原村、磐戸村、底澤村、下仁田町、小澤村、野上村、馬山村、小幡村、尾上村の十三組で、社員は六百廿人でありました。

海外直輸出

此時分の販路も矢張り米國でしたが何とかして直輸出をして見たいと話が起りまして、とう〜十三年横濱同伸會社に依託せることに致しました、之が本社で直輸出をしました一番初めであります。

翌年黨治邦氏が社長となられましたが、此時生絲の品等鑒査に就いて少しゴタ〜が起りまして社も分裂しかけましたが幸にも星野長太郎氏の周旋で無事に治まりました、それから色々の事があります、二十六年迄には五十六組になりました、二十七年には此以前の米國恐慌に鑑みまして、製絲を折半して半分を海外へ半分を內地へ賣るといふことにしました。

下仁田社の分離

二十八年に名を甘樂社と改めましたが此時は今の下仁田社の各組は矢張り甘樂社へ加盟して居りました、處が御承知の通り下仁田から富岡迄來ますには、どうしても小坂峠を越えねばならぬので、それが非常に其地方の組の人に苦痛を與へたと見えて二十六年に下仁田分離説が起りまして、其結果五十七組の中二十一組が分離することになりました、之が今の下仁田社であります、で本社の組數は非常に減りました、其後段々増して今日では百十一組になつて居ります。

或は入り或は脱す

前御話しました通り明治十三年に社が成立ちましてから、追々組數は殖えて來ましたが、二十年頃迄といふものは組合の中にも加盟したり脱けたりして實に困つたものでした、之は當時濱師に生絲を仲繼をした者が此地方に澤山ありました處が社が出來た爲にスッカリ其業を失つて終ひました、ソコデ彼等はどうかして此社を潰さうといふ考から組合員の愚直に附込んで盛に社へ出絲するの不可を說いたものですから、之が爲に又提絲を製造するものも澤山ありました、併し永い中には矢張り出絲する方が得策であると氣が付いて來まして追々加盟する樣な始末で殆どお話にならないのであります。

社長と社の發展

最初の社長は前述の通り古澤小三郎氏十四年には黛治邦氏が後を襲はれまして、十七年迄勤續せられました、十八年齋藤正次郎氏が之れに代られましたが今の社長山口太三郎氏は二十五年副社長でした、齋藤氏は二十八年に其職を辭されまして二十九年は缺員、三十年に山口氏が社長となられて、今日迄來て居る譯です、創立以來隨分大小の紛紜も出まして社命旦夕に迫つたこともありましたが、社長其人を得て無事今日に至つたのは誠に嘆しい次第であります。

明治十三年に受付ました生絲は二千三百四十九貫（賣價十一萬五百餘圓）でありましたのが、二十三年には一萬三千四百四十三貫（賣價四十七萬八千三百餘圓）となり、三十三年には四萬二千九十九貫（賣價二百五萬七千八百餘圓）になり、本年はまだしつかりしたことは分りませぬが、約五萬四千貫（賣價約三百萬圓）位はあらうと思ひます。

今日に爲つて見ますと何んでもない樣でありますが、其間の苦心といふものは一通りではありませんでした。

我國に於ける清人の蠶業教育

群馬縣多野郡長
東亞蠶業學校長　關　鉦　三　郎

編者一日關郡長を藤岡町の私邸に訪ひ東亞蠶業學校の事を聽く、氏や熱誠頗る力あり火を擁して喋々として語らる、公務の疲勞を厭はずして編者の爲に數時間を割愛せられたるは感謝に堪へざるところなり、左の一編は則ち氏の談話にして又蠶業者諸君の好資料たるべきを信ず、乃ち氏の閲を經て玆に揭ぐ。

日清蠶業學校は如何にして設立せられしか

日清蠶業學校てずか……イヤあれに付きましては色々苦心もしたのでありましたが、今日では漸く基礎も出來ました樣な譯で……さうです一體其の始といふのが、丁度一昨年の四五月頃の事です、清國人が大分蠶絲業視察として當地方へ參りました、其内三四名の人々がどうか實際に蠶業教育を受けて又自分等も研究をして見たいといふことになつて、高山社蠶業學校へ入學の事を骨を折つた樣でしたが、同校でも未だ外國人を收容する迄の設備もありませず、といふて態々四五名の希望者の爲に新に應急の設備をするといふことが出來ませんので、之は斷られたのでありました、處が同年七八月の頃私の處に上海の東亞同文書院の學生が暑中休暇にて參て居りました彼れは支那語の出來る處から何時か其支那人と懇意になりまして、彼等も度々私宅へ來訪する樣になつた、處が段々聞いて見ると以上の樣な話……夫ては何んとか方法を設けてやりたいと思ふて居ります内に彼の清國人も山口正太郎君に謀つた處がこれは好かろうといふ譯で同氏及悴の猿三とが東奔西走してとう〳〵日清蠶業學校を設くる事になつたのであります、順氣社は御承知の通り高山社とは多少其飼育法も異にして居りますので或は高山社の向を張るといふ結果に陷つた樣な嫌がないでもありませんが、兎に角山口君が非常な熱心に依つて夫々相當手續を盡し其筋の認可も受け同年十月愈々有田知事の臨場を得て盛なる開校式を擧ぐることに成つたのであります、其頃の生徒數は約七十八名ありました。

生徒離散す

十月無事開校して生徒は漸次增加し百名以上を數ふるに至り着々豫定の授業をやつて行きましたけれども、何にしても清國各省の生徒で日本語の分らない者もあり、素養の深い者があり淺い者があるといふ風で學力が非常に不平均であつたそればかりでなく彼等の性行、氣質も分らぬ爲め如何に之を教育すべきかといふことに就て常に山口氏及職員諸君方を苦めたのでありました、教授には通辯を用ひたのでありますが何分前述の事情と學校の設備が不完全だといふと其他色々の原因から五六月頃になつて漸く生徒と山口氏との間に面白からぬ葛藤が起る樣になつた、學校は之に對してあらゆる最善の方法を盡くしたけれども、水の決する處大山も防ぐべからずて、とう〳〵生徒も一人減り二人去り百名以上からあつた生徒が僅に二三十名程になつて了つた、此中には東京へ出た者故國へ歸つた者等もありましたが、又信州の上田へ行つた者も澤山ありました、之は日清蠶業學校に通辯をしてゐた男が丁度上田の方の者て、夫が國へ歸つて頻りに清人に對する蠶業教育の希望を說いたので、上田町の有志者が夫ては始めやうといふことに成りましたものと見へ、そこで其男は同學校の生徒三十余人かを連れて上田へ新に清人の蠶業教育を開始し講師には同町の蠶業學校の先生達を頼んだそうでした、そんなことで此學校も生徒は離散する、經營維持は愈々以て困

雜報といふことに成つて來たので、結局閉校といふ悲運に會するの止むを得ざるに立ち至つたのであります。

遂に大勢を挽回す

生徒が動搖し始めたのは一昨年の五月下旬即ち養蠶實習期でありました、生徒が繼續して閉校と決したのは同年の七八月の頃でした、處が又生徒の中に地力に此種學校が興かるへならば倒潰み止つて研究がして見たいといふ希望者が少からずあつたので、當地方有志の人々も心大に動いた譯である、殊に規模は小さい事、況んや國家的である、多少有志の義捐を仰いでも今日迄に仕上げた學校も一朝にして閉校して了ふのは如何にも意氣地をないし、又土地繁榮策といふ點から考へて見ても惜しいことではない、之は根本から改革して更に大勢を挽回せねばならぬ……といふので又々施設者が非常に奔走し自分もこれに盡力致しました、其結果漸く開校といふことに決しましたが、困つたことには自分に校長になつて欲しいといふことでした、自分には何分經驗もありませんし、且つ公職のある身ですから一應斷つたのでありましたが、他に適任者も見し絶つてといふことで、自分が校長といふことで東亞蠶業學校として昨年十月再び開校式を擧げました、日清學校紛擾の項學生の風紀が稍々弛廢した模様な傾がありましたので、專ら嚴肅を旨とし、半官立學校的にやりました、專任の教員貳人、通譯貳人を置き、貴族院議員高山仲辰氏を蠶業學校、藤岡中學校、蠶業病豫防事務所の職員諸氏を講師に囑託しまして「入る者は拒まず去る者は追はず」といふ主義で專ら其面目を教育する其後生徒の去就も種々ありましたが、漸次殖えて參りまして、とうく今年十月第一期の卒業生を出しました、修業年限は二ヶ年でアー通りの學理及實技は二十八名程出しました、諸君が其面目に修業をせぬだけは與へるのでありますが、不規律な生徒ですから其指導の困難なことは一通でありません、何日でやも私が一同を集めまして「諸君が其面目に修業をせぬといふことならさういふ人選は去つて貰いたい」と訓示したことがありましたが、實に御しし難いには難らなかつた日本で只一校

大勢を挽回して二十八名の卒業生を出す迄には一通の骨折ではありませんでした、生徒の間題上の問題、生徒の御の問題に顧る若しも非常に困難し増し外の好結果を得るに至りました、卒業生も非常に困難足して居るらしく故國へ歸つて又新しい學生を斡旋して送るといふて與れました、中には碓氷紅一、傘組一、原製絲所等に製絲視察として止つてゐる者もあり又西ヶ原の講習生として居るものもあります、其他の者は國へ歸つた樣です、彼等の內には國へ歸へると直ぐ拔師とか何とか同國樞要の地位を占むる樣既に極つてゐるものもあるさうですが、假令些少なりとも上州の養蠶法を滿國へ傳へる得に至つたのは喜ばしい次第であります、聞けば上田の清人蠶業教育事業もどうしてはしくなかつたが、でとう〳〵閉校するさうです、此外目黑にも清人の蠶學校がありましたが、之もなくなりました、兎に角日本に於て專門に清國人に蠶業教育を施すところは此東亞蠶學校一校となる譯であります、學校繼持に就て今日迄の經過を改めだらうと確信して居ります、何しても清國に日本の養蠶法を傳へ得たといふことは普に日清の國際的關係ばかりでなく、國家經濟上有形無形の利益を收めるといふ點に於て喜べきことであらうと思ります、家同國公使館、本縣廳始め社會の賛助もありますとして遺々感になつて行くと思ひます、去る十月神山本縣知事當地方へ御巡視の際學校に來られて生徒同に懇切なる訓示を與へられましたが、私は大に之に向つて努むる積りであります

實務

愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎
馬場由

緒言

此世か始まつて以來、春秋の移り變り、風雨の順不順、幾千萬年の跡を顧みれば、世上の萬物皆其間に生成化して或は盛り或は衰へ、來るものは去り、居るものは去り絶えず、相交代して其間自ら天然の支配に動いて居るのであります、桑も亦山々の雪いつか消え田畦に下萌の色も仄見えて吹き切る樣な風にもどこか春の暖さを宿して來ると、やがて一芽が二芽となり、小さいのが大きくなつて何れの枝も春の和面影を宿して暖かさの加はると共に成長して參ります、併し乍ら自然に任せた間は物の役に立たぬと同じ樣に桑だとても遽に當た耕耘、肥培をせなくては迚も蠶兒の飼料とする譯にはいきませぬ、そればかりでなくもやはり其用途に從つて大々適當な耕耘、肥培をせなくては

其耕耘、肥培が當を得ると得ぬとでは大變な差が生じて來ます、普通でも冬に單物を着たら寒くて堪らぬが夏着れば涼しくて眞に宜い心地でせう、それと同じ樣に桑にも一月は一月、二月は二月に適して手入や施肥をしなくてはなりませぬ、之れ私共が今から年中行事として述べ樣としたわけであります。けれども御承知の通り同じ月でも土地により年によつて何時も同じといふ譯には參りませぬ、從つてこゝに述べますことも其年其時に應じ多少斟酌してやつて戴かねばなりませぬが、今は假に東京附近の氣候を標準として述べることに致しました。

一月（小寒 大寒 除暦十二月節）

元旦には宮中で四方拜の大禮を行はせられます、下々では松竹立て蔵首の一日を居屠の機嫌で祖禮をする、男女若若こゝ松の内は一年の樂境であります。

三椀の雑煮かゆるゆる長者振　　蕪村

うしろから寒に入るなり壁の穴　　一茶

十六日は歯入で下女男には忘れられぬ一日、閻魔詣も此日であります、三十日は孝明天皇祭で四民は一日を休む。一月は春とはいはれるが實は冬も寒い眞盛り野も山も見る限り、赫色で抹いた樣で鹿の氣が飛んで居るので、打ち續く桑園には、サロツと去年の落葉が夕風に寂しい音を聞かすばかり、枯枝に鳥の止る秋もさながらの面影であります、此寂しい桑園に對して春々は何をしたものでせうか？

冬期耕耘

深さ三寸乃至五寸位に株間を一鍬起しとし、成るべく土地をデコボコにしたが よい、此目的は凍結によつて第一土地の理學的性質を改良し、第二に雑草の種根、害蟲及其卵を殺さうといふのであります。

害蟲驅除

此頃に害蟲を驅り除くには椶や蕁の皮の間、又は結束の間に潜くれて居る害蟲を見出したり、又樹の皮に産み付けてある卵を清殺するのであります、高木の皮の間に隠れて居るものを驅除するには此頃が一番都合がよい、高木造に注意深い人は一寸浮ついて居る樹皮が目に付くと直ぐに外皮を磨擦して後石鹸水で幹をさへ洗ふことであります、又害蟲の澤山發生したのには落葉を集めて燒き藥でるか、又は堆肥に積み込んで醗酵をさせるが宜しい。

園中即事

正月上甲風、信香吉利、東、發日又蠶日、姉工巻、化工、豆舂春酒後、枯社影斜中、燈火之背厠、神鋼報、賽功。

打ちなびき春くる風の色なれや
日をへてそむる青柳の糸

家庭

衣服と夜具

醫學士　貴家學而

衣服の健康上趣なから以、影響のあることは明てある。など植物や動物なども自然に外氣に對する保護機關を具備して居るが高等の人類では自ら製し自ら着用する必要がある其昔は單に體を蔽ひ隠すと云ふに過きなかつた衣服も世の文明と共に便不便を考へ、此に裝飾を加味して遂に現今の如き美術的のものに化したのである。で衣服を着ける目的を大體左の四つに分つのである。

（一）體温の調節　空氣の温度は四季を異にし又日々不絶變換して居るが一體に吾人の體温より低温である故に假令裸體ならずとも體温は不斷消散奪却しつゝある此を防ぎて常に一定の體温（三十七七度内外）を保たしむるといふ意味で衣服を着けるのであるゝ保温性）即ち衣服と衣服又は皮膚との間に在る空氣が體温の爲めに自然に温となり換言れば人工的に適當なる氣候を造る——外氣寒冷を直接皮膚に接觸させ以といふ理である此の關係から厚き一枚の綿入より却つて重ね着をすれば遙かに多量の空氣が包まれ又此が適當なる温度に迄温められる即ち除計温度を威ずるのである。

斯の如く衣服は保温性を有するが能力には體温を導き奪ふと云ふ性質（體温傳導性）が有る此性は衣服の材料種類に依り一樣でない概して空氣の多量に含まれてをる樣な毛織物は保温性は大であるが傳導性は少い即ち温かく感ずる空氣を合むことの少ない絹布麻布の類は保温力は甚だ少いが體温を傳導奪却することが多い即ち着て寒涼に感ずる帳は盛夏に用ひ、嚴冬には毛織物綿入等を喜ぶのも此の理に外ならない。

（二）衣服は外氣の温熱を吸收する性、外温吸收性）がある此の性質は衣服の材料に除り關係せずして寧ろ其の色合ひに影響するものである、今白色を基として諸種の色の布に就て外温吸收性を調べて比較すると。

白色	一〇〇
濃黄色	一四〇
紅色	一六八
黒色	二〇四

此表で示すが如く色合の異なるにより外温吸收の割合が違ふことが判るであろう。即ち盛夏の帳には外温を吸收することの最も少ない白地の浴衣を好み、冬季には成る可く除計吸收する黒地の厚衣を欲する譯である。

以上の黒地の厚衣を欲する譯は適當に配合したならば四季寒暖に應じ最も理想の衣服を作ることが出來るであらうと思

黄色	一〇二
緑色	一五二
鼠色	一九八

ふのである。

（二）皮膚を清潔にす　皮膚に生ずる汗、垢、脂等は不識不知の間に衣服に附着して自然に取去らるゝものである。故に成る可く能く拭去る性質の衣地を撰ばねばならぬ。木綿、絹、麻等は遙かに毛織物に優つて餘計皮膚を清潔にするものである。言ふまでもなく衣服は度々洗濯する必要がある、汚れ易きからといつて白地を忌み他の色合を撰ぶ人は頗る無性者と云はざるを得ない肌着丈けは白晒木綿の莫大小にして欲しいものである。

（三）諸種の危險を避け、外傷を防禦し又（四）醜態を隱蔽して人に厭惡の念を起させないといふ、目的のあることは余の喋々を要さぬのである。

（古衣）尚、古衣は病毒傳染の媒介をなす危險の物であることを承知して戴き度い皮膚病、傳染病殊に肺結核や又從來遺傳病とせられた癩病等も今日では黴菌に因る傳染病と見做されてある此等の患者の着衣が碌に消毒もされずに市場より買客に轉賣せられ到處に病毒を傳播する實に思ふだに慄然とするではないか、故に古衣は成る可く百度の熱湯で煮沸して後に用ひて欲しい一寸した注意を怠つたが爲めに後に臍を噬むとも及ばないことが往々ある。

（夜具）一體吾々が直立又は座位に在る時は衣服の間に包まれて居る暖い空氣は上昇して唯襟元や胸先きから外に流れ去るに過ぎないが若し臥位に在る時は暖かき空氣は直樣衣服の織り目から外に出て其の逸散する面が坐位の時より廣くなる。從て日中でも一寸横になれば後で餘計涼しく感ずるのは全く體温逸散の多い爲である。

又總て睡眠時には生活機能が頗る緩慢となるから體温の發生も覺醒時に比して遙かに少ないもので寢醒めの後は餘計寒く感ずるのは此の理に外ならぬてある。故に夜間八時—十時間も長く身を横へて睡眠する時には温の發生は少なく而かも逸散する面が廣い丈けに温の放却を防ぐ夜具は特に注意を要す可きことが解かる、夜具の目的も大體に於て衣服と異ならぬが寧ろ保温性の少しても多いものを撰ぶべきである。

甘樂社長 山口太三郎君

上州の三山を展望して邦國唯一の財源たる生絲を一呼の下に集散して地方蠶業の改良を旨とせる甘樂社は上州南三社の一として夙に世の知るところなり社長山口氏亦德望を以て郷黨に鳴り客歳勅定の緑綬褒章を賜ひて其善行を表彰せらる君が言論性行に接せんとするもの亦多かるべし、禿筆を呵して君が風采を傳へんかな

夙に教育に志す

君は群馬縣北甘樂郡吉田村字南蛇井の人にして嘉永元年四月を以て其字に生る、資性温厚にして篤實、又よく學を好み農桑の餘暇或は書に親しみ、或は説を草し傍ら濟民の法を究めて自ら其道に通ぜり。明治の初年小學校設置のことあるや、君卒先して村内を斡旋し、從來の寺子屋を廢して小學校を創設し續いて馬山、南牧の二村にも其必要を説きて之を設置せしめ明治八年以降教師を拜して鞭を三校に執り熱誠以て育英の衛に當り、頗る治蹟あり、十四年教師を辭するに至りきと雖も、尚十八年に至る迄學務委員として陰に陽に縣下の教育に盡すところあり、當時改元を距り未だ僅に數年、人は新政の如何に心を勞して又暇あらざる時に當り卒先此事を敢てしたるは眞に絶大の烱眼見といふべし。

製絲の改良を唱導す

●福井縣三ノ丸製絲所教師　第三回總會に於て功績を表彰せられたる　仲はる子

明治十三年北甘樂精絲會社の組織せらるるや君も亦其馬山組の社員となり、爾來自家の製品を出て其の賣却を同社に托し之を試むるに北甘樂製絲會社の米國直輸出賣上精算と製品提絲造を時の商人に賣れる精算高とは五ヶ年比較平均一駄（三十六メ匁）に對し優に百圓以上の直開なりしを以て、如斯改良に有利なる事業を自己のみ得るは本意に非となし、爾來提絲造りの漸々前途に見込なきことを村内實業家に示し茲に始めて組合を組織して共同以つて其製品を統一すべきを唱導し畫策遂に效を奏して十七年南蛇井組を組織し推されて其組長となり、衆を率ゐて北甘樂精絲會社に投ず、之れより村内の生絲額に其舊觀を脱し、販路漸次に擴張すると同時に其價格も亦次第に昇騰するに至れり、維新後未だ幾干ならざる時に當り、時弊を看破して極力百

●宮城縣旭製絲株式會社工女　第三回總會に於て功績を表彰せられたる　佐々木しけよ子

難を排し、衆をして其一途に向はしめたる君が至誠、焉ぞよく人を動かさずして止まんや。

衆望遂に甘樂社長に推す

●長野縣矢島社工男 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
小口眞市君

明治十七年君の南蛇井組長となり德義を専らとしてよく下を統率し、専心斯業の隆昌と地方經濟の圓滑とを期せしより衆望忽ち一身に蝟集し翌年北甘樂精絲會社相談役に進み、爾來勤儉して二十三年に至り、更に取締役に推され越えて二十五年副社長となり、よく社長を扶けて會社事業の發展に意を致せり。二十九年出でゝ社長となるやよく上を正し下を愛撫し行住其宜しきを得て社運日に隆に組員亦其風を慕ひて子來するに至れり。

奇策紛擾を治む

●埼玉縣富岡館製絲場工男組長 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
山崎彦作君

君の推されて社長となるや社業の大發展蠶絲の改良を以て經とし、德義を以て緯となし、異贄以つて事に當れるより各組よく融和して社運漸く進み、製絲は着々其質を進むると共に其量を増加し、甘樂社の名亦倍加の勢を以つて喧傳せらるゝに至たり、然れども之れ又人生の一局事多少の紛擾を免れざりきと雖も皆固より蝸牛角上の小紛のみよく一夜にして解け一朝にして和し社運愈々砥の如かりき。

●福井縣三ノ丸製絲所教師 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
長谷川いさ子

然るに會々社務の擴張に從ひ事務所の狹隘を告げ來りしより、明治二十八年事務所新築の議を起し其の案成れり、富岡町の町民之を聞いて其建設地を或は上にせられたしと乞ひ、或は下にせられたしと請願し殆ど適く所を知らざりしが、此競爭は漸次劇烈となり來りて町民遂に上下の二部に分離し以て其の建設地を自己の域内に定めんとし日夜或は號呼し或は威を示し親戚知己と雖も、尙上下の民交を絶ちて相鬩ぐの慘狀を演出するに至れり、外間の事態己に此の如し從つて社議容易に決せず、荏苒年を越ゆるに至れり君此間に處して日夜憂慮措く能はず、居座常に之を思ふと雖も、亦遂に如何ともすべからす君時に私に謂へらく『町の上に建築せんか、下の民を如何せん、町の下に建築せんか上の民を如何せん、町民の之に至れるもの亦斯業の爲なり我豈よく此意を諒せざらんや、然れども我此岐路に迷いなき能はず、如かず一時之を罷めて隨時に斷行せんには』と仍りて急遽新築の議を撤し復た之を議せず衆啞然と

●岐阜縣武儀製絲場現業掛 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
森川貞之助君

して自失し幸に事なきを得たり、而かも君其間に於いて今の地を相し着々計圖を進め三十二年突如として宏壯たる今日の事務所を建築し了れり君が時に當り、事に處して措置常に宜しきを得るは只此一事を以て之を推知するを得べし、甘樂社今日の隆昌を致せるも豈故なしとせんや。

●山梨縣多勢丸多製絲場工女 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
高橋みつ子

憂を推して開業式に臨む

明治三十二年の三月人は花に狂し酒に謳ひ上毛の野赤緑に萌えて炎陽正に豐なるとき悲しむべし、君が令閨の病を得て逝かるゝに遭ふ、而かも之れ甘樂社新築開業式日の前四日なり十五才と十三才の女兒とは母君を悼みて哭し社務亦開業式日に迫りて捨つべからざるものあり、君が一身の痛苦偲ぶに堪へざるなり天何すれぞ此の誠意の人に報ゆるに悲慘の鞭を以つてしたる、憾みても尙餘りあるを奈何、然れども君の赤誠なる公務措くべからずとなし、挽歌の聲も幽に之を葬り、四月三日開業式に臨みよく其致すべきを完うせり之を看、之を聞いて皆其德を稱せりといふ、嗚呼昨の憂を祕して此の賀席に臨む、君ならずして誰れか能はんや。

●甲府市草蓮社工女 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
石寺はる子

八年間通勤す

君明治二十三年取締役となりてより、明治二十九年上野鐵道の分設せらるゝ迄前後七年間二里半の山路を遠しとせず、雨の晨風の夕單身徒歩して社務に鞅掌し、未だ曾て俥を藉りしことなかりきといふ、此の如きは會々以つて君が資性の一端を示すものにして吾人の敬服するところなり。

●原富岡製絲所現業係 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
島津國太郎君

二本揚の弊を一掃す

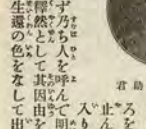
君が畢生の經營其宜しきを得て製品精一に歸し、海外の販路日に其多きを加ふるに至れり、然るに明治四十年に至り製品中二本揚三本揚等あるの故を以て海外より嚴談屢到るに遭ひ、君大に心を痛む、之より先碓氷社も亦此弊に陷り一時大に困難せしが幸に二本揚防止器を用ひて之を免るゝことを得たりきと雖も君更に其轍を踏みて之を矯正するを快しとせず、之を衆に圖り君も亦寢食を忘れて日夜之が矯正に腐心せり、時に策を獻して下振を勸むる者あり、此式は嘗て農商務省勤務たりし高橋信貞氏其他二三の人の發明による處にして夙に成蹟佳良なりと唱せ

●山梨縣武井製絲場現業係 第三回總會に於て功績を表彰せられたる
増田安太郎君

らるものなり、恰も組合中現に之を採用せる者あるを知り、殺く之を稼して其佳良なるを認め、斯然採用するに決し先づ試驗的に之を設けたるに成績愈々佳良なるを以て會社は場所の全部を挙げて之を採用し、遂に全く二本揚の際を一掃し得たりといふ、之れ實に君が機に臨むで適材を適度に用ふるの明あるを表するものにして、よく二十年間磐梯鉛節を排しして今日あるに至りしものの實に之れが爲なり。

倉皇布團蒸となる

君に奇偉あり自ら之を知ると雖も突嗟其事に會せば復他を省みる能はざるなり、客あり君を迫る……君色を失ひ眼を閉ぢ耳を藏し倉皇車中に走る客呆然として爲すところを知らず、雷の如き閃電に入りて私に窺へば、君機に生還の色をなして出て來れば頃刻にして四顧に人を辨ぜず乃ち人を呼んで明を得君を呼べば「雷なきか」と答ふ、客釋然として其因由を知り共に笑を以つて、君機に生還の色をなして出て來れば頃刻にして四顧に人を辨ぜず乃ち人を呼んで明を得君を呼べば「雷なきか」と答ふ、客釋然として其因由を知り共に笑を以つて、君機に生還の色をなして出て來れば頃刻に用ふるの明

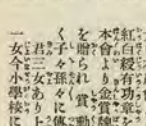


●山形縣三由村横山製絲場主 佐藤甚之助君

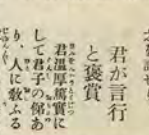
●第三回總會於て表彰せられたる 山梨縣米問製絲所工女 島津つれい子

君が言行と褒賞

君温厚篤實にして君子の儀あり、人に敎ふるに赤誠を以つてを率ゐ頗る見るべきものあり、其甘樂を捨て能く勤苦して製絲改良の實を挙げ海外貿易をして旺ならしめしは特に君の推賞して止まざるところなり、明治二十八年群馬縣農會より其功績を表彰せられし大日本農會より有功章を本會より金賞牌を贈られ賞勵を受くること一大美事なりと云はざるべからず。



●第三回總會於て表彰せられたる 群馬縣原富岡製絲所現場掌理 君 吉 萬 吉



●第三回總會於て表彰せられたる 鳥取縣米子製絲合資社機織長 君 井 松 れい子

君幼にして父の跡を襲ひ、名主として村政を統ぶるに至りしより漸く農産の忽にすべからざるを感じ、殊に蠶絲が將來我國經濟の大本を爲すものなるを覺りて意を夙に其改良に志せり、當時同地は普提絲を產出せしが、只舊慣を墨守して各戸各用に製出せしより、管に品質劣等なるのみならず、品位不齊一にして殆ど見るに足るもの無かりしを以て、區々之を行ふが故に徒に荷口少く且つ品質齊一を缺くの缺點あり爲に横濱に出荷するも時に三四十日を經て荷賣却せられざるものあり、農家の困苦將に甚しからんとせしより、明治十二年自ら率先して座繰製絲練返の製法を講じ、最寄便宜の組合を以て之が製絲を合同せしめ、之を横濱市場に販賣するに其利益頗る多く從來の拙絲に比し數等を增せり、明治十四年上毛繭絲改良會社の設立せらるゝや、桑を率ゐて之に加盟し、初めて海外直輸出を開けり。

下仁田社長となる

明治二十六年下仁田用近八ケ町村の有志と團結して二十七

下仁田社々長

佐藤量平君

上野國道の際くところ元、大石を奇峰の間に存して地方生絲改良の未葬とあり、模範となり、數千の社員を有して名を海外に知られたる下仁田社々長佐藤氏幹腕傑大にして自祀若子の風あり、其地方産業の事に業を用ひて今や鑑たる以て嘱に間ゆ、從時絲授賞章を其賞行を表彰せらる、賞すべきなり、いでや君が小史を提へ來りて識者の鑑となさん。

九才にして名主となる

妙義の秀峯突兀として上毛の南野を俯瞰するところ、一水深溪を穿ちて鶏犬の聲を爲さしむる一村あり、碓戸村といふ君は安政五年七月を以て同村字碓戸の地に生る、世々名主を勤め兼て殖林、酒造の業を營み頗る名望あり、君亦早くより才氣に富み溪間の嬉戲の間にも倘よく之が發露を見たり、不幸八才にして父を亡ひ、次で同じ年に又母を亡へり、僅に一日相見るべき尚旦つ父母は露はるべきを君の嘶聲なる敢て戀々の涙を爲さず、翌歳岩鼻縣の命によりて名主を拜するに及びては九歳の乳臭兒と雖も直截果斷よく其行ふべきを行ひ爲すところ人民を服し、又非凡ならずや、後五日市なる親戚に寄寓して前橋藩の教養に漢籍を學ぶこと前後六年、頗る學事に邁ずるに至れり、後更に推されて縣會議員に當選せること六回、又群馬縣蠶絲業調査委員に推されたり。

卒先して蠶絲の改良を唱導す

君故郷に帰るや、名主として村政を統ぶるに至りしより漸く農産の忽にすべからざるを感じ、殊に蠶絲が將來我國經濟の大本を爲すものなるを覺りて意を夙に其改良に志せり、當時同地は普提絲を產出せしが、只舊慣を墨守して各戸各用に製出せしより、管に品質劣等なるのみならず、品位不齊一にして殆ど見るに足るもの無かりしを以て、區々之を行ふが故に倘荷口少く且つ品質齊一を缺くの缺點あり爲に横濱に出荷するも時に三四十日を經て荷賣却せられざるものあり、農家の困苦將に甚しからんとせしより、明治十二年自ら率先して座繰製絲練返の製法を講じ、最寄便宜の組合を以て之が製絲を合同せしめ、之を横濱市場に販賣するに其利益頗る多く從來の拙絲に比し數等を增せり、明治十四年上毛繭絲改良會社の設立せらるゝや、桑を率ゐて之に加盟し、初めて海外直輸出を開けり。

組を合同し、下仁田製絲社を設立し、桑園を擴ひて社長となり爾來拮据電勉晝夜を措かず、よく郷業の改良と社員の教養とに意を用ひ、遂に上州一等産繭の名聲を海外に發揚し益々國家其輸出額を増加するに至れり。

二十六年以來、組合社員の數漸次増加し、今や甘樂郡を基礎として同郡を始め、碓氷、利根の二郡、下野、希望し來るの盛況に達し三十二年遂に宏壮なる今の社屋を新築するに至れり。

此の如きは之れ君が絶大の奮闘と巧妙なる經營の致すところにあらずんばあらず、殊に如きは又以つて君が手腕を表するものといふべし。而して四十三年七年岩手縣農商務省及び同縣の依囑により米國に航し絹業を神益せしが、三年の間、君は又群馬縣農工銀行の設置せらるゝや之が株主となり、監査役より入りて今取締役の要位を占めたり。

●群馬縣碓氷郡大久保村大字下小坂字下仁田製絲社長大久保銀太郎君

●群馬縣碓氷郡下仁田製絲社の創業者大久保銀太郎君

始めて器械製絲場を立つ

●宮城縣絹製絲株式會社工女

製表を競功で於に會總國三第

子わと邊

●群馬縣碓氷郡下仁田製絲社の工女

製表を競功で於に會總國三第

君が蠶業の改良を唱道してより既に旬年、其間遂戰苦闘以て業に對せし效空しからず、製絲は、着々改良せられ、上州絲の聲價又漸く高からんとせしが、君當時の産繭の勢多くして品質の劣るを慨し鋭意其改良に力むるところあり、遂に明治二十二年、意を決し、君が國家の隆否を常に念頭に置き一意是に向つて其精力を傾注しつゝあるは吾人の敬服措かざるところにして、君が明治十四年自ら高山社に入りて其さに其道奥を究め、帰來自雪を投じて養蠶傳習所を設立し、遂に近の子弟を養成し、益々飼育の改良に努めて、よく地方養蠶家の模範となれり、同地方の養蠶之より忽ち其面目を改め遂に今日の盛況を致すに至れり。

地方金融の調和を計る

君が蠶業の改良を唱道してより既に旬年、其間遂戰苦闘以て業に對せし效空しからず、製絲は、着々改良せられ、上州絲の聲價又漸く高からんとせしが、君當時の産繭の勢多くして品質の劣るを慨し鋭意其改良に力むるところあり、遂に明治二十二年、意を決し、君が國家の隆否を常に念頭に置き一意是に向つて其精力を傾注しつゝあるは吾人の敬服措かざるところにして、君が明治十四年自ら高山社に入りて其さに其道奥を究め、帰來自雪を投じて養蠶傳習所を設立し、遂に近の子弟を養成し、益々飼育の改良に努めて、よく地方養蠶家の模範となれり、同地方の養蠶之より忽ち其面目を改め遂に今日の盛況を致すに至れり。

●長野縣六女合資會社工場頭長

製表を競功で於に會總國三第

君田重太郎君

●福井縣三ノ丸製絲所設師

製表を競功で於に會總國三第

松村つば子

一年維新後未だ幾何ならず從つて一般財政經濟の念に乏しかり、君が明治十年の不振を憂ひ卒先して有志を誘ひて蠶業の改良に當り、其産繭の調和を計りよく殖産興業を振作し、二十九年更に蠶戸生産會社を創立し、撰されて其頭取となり、其飼育の改良に努め、其産繭の増加と共に其産繭の増加と共に自ら其社長となりて之が經營に重任じ、漸次近郡に及して今工場を九個所に擴張し、三百五人の大規模となれり、君の生産も亦多數なる哉。

養蠶傳習所を設く

下仁田地方は古來水田無きを以つて飯米は之を他より移入し、只養蠶を以つて一家の業とするもの多しと雖も、其飼育舊法を脱せず迚蠶するもの少からざるを憂ひ、養蠶改良の念を感じ、一日自ら高山社に入りて其さに其道奥を究め、帰來自雪を投じて養蠶傳習所を設立し、遂に近の子弟を養成し、益々飼育の改良に努めて、よく地方養蠶家の模範となれり、同地方の養蠶之より忽ち其面目を改め遂に今日の盛況を致すに至れり。

殖林を奨勵す

妙義の群園數十里、森林連亘して頗る偉觀を呈すと雖も曾て之れ天然の樹林にして造林の見るべきものなく、纔に君が祖先の植付に係る杉、松の大樹あるのみなりしが、君亦其利源を開發して地方富力涵養に資せんと欲し、明治九年植林、改良造林の大計畫を爲し、奈良、和歌山の各藩を歴遊して造林の視察を遂げ、大に得るところあり、帰來之を其地に應用して先づ有志に奬勵し其利益を説き、自費を投じて産地より良種を購入し、之を分與して大に地方林業の改良を圖り、遂に舊蓄を捨てて其面目を一新し地方殖林の氣風を振興するに至れり、今君が有する檜、松、杉等の殖林約一百餘町歩に渡し其立木の數二十餘萬本の鬱蒼として上毛の天を摩せり、其立木の價格三十餘萬圓に達せり。

群馬の地は所謂上毛の三山を控ふるが故に縣下の大半は山脈透迤として相連り、特産の蠶絲業地多くは此間に點在せり故に交通極めて不便にして只僅に狹隘なる山路によりて彼此相通ずるを得るのみ、君又意をこゝに注き、卒先自ら地方有志を勸誘して巨資を得之を縣費へ寄附して二十三年小坂峠の新道、縣道の開鑿を始めとし下仁田松井田間、下仁田鹿沼地道の改繕、盤戸乙母道の開鑿及道分街道本界より信州國境間の改繕等僅に數年間にして悉く竣工せしめたるは之全く君の努力經營の結果に外ならず、又明治二十七年に至り地方交通機關の不備を感じ、上野鐵道株式會社を創設し、之が創立委員となり、高崎下仁田間に鐵道を布き慘憺たる經過を凌ぎて遂に之を貫通し、監査役より取締役となり今社長として其衝に當れり、今日高崎より數時を出でゝして富岡、下仁田に至り得るものは是れ實に君が餘惠といはざるべからず。

交通の便を開く

多きに達せるもの又故なきにあらざるなり。

沒すべからざる偉績

君夙に社會の進運を企圖し百方に奮闘してよく、勝を博し鄉黨を率ゐて着々進善の功を奏し、或は養蠶を改良し、殖林を奬勵し、或は道路を開き鐵道を布き公益の爲め眞に一身を賭せんとす、殊に下仁田社を組織して今日の隆運に至らしめ製品を統一改良して日本生絲の名聲を大にせしは眞に沒すべからざる偉績にして吾人の永く史上に止めんと欲するところなり、君は明治三十八年郡馬縣農會より功勞賞牌を同三十九年大日本農會より紅白綬有功章を贈られ本年夏に勅定の綸授褒賞を賜ひて其善行を表彰せられたるもの亦故なきにあらざるなり。

君が性行と家庭

君資性英敏にして頗る剛氣あり、人を遇すること厚く事を處すること極めて公平なり、而かも恢忍不拔よく難に堪えて貫徹せずんば止まざるの風あり、又博愛心に富み一村の德望を擔へり、君又書畫を愛し居室常に珍什を列ねといふ。

家に四男五女あり、曾健にして長男今農科大學にあり勤勉の名高く、二男亦中學に在り、長女麻布高等女學校を卒へて家に在りて君を扶け、二女今尙三輪田高等女學校にありて淑德の聞あり、余の二男三女は尙小學校に通學せらる、而して君益々健にして驛時と雖も其活動を止めず、極力斯業の爲に盡さる、吾人は斯業發展の一大偉人として益々其健ならんことを祈るものなり。

柳外

氣鑑瑞氣滿乾坤正値今朝是歲元旅
伯和藏諸邸閥兒綠毒酒萬家喧鼓聲
生動東西陌鳥語曉雞雖梅開鄉信殺
終裝典舍謝門賀了又明門

横濱市場

十一月中の横濱市場では生絲の賣行きが如何なる狀態であつたてせう、過ぎ去つた事を繰返すのは如何にも無駄事のやうに感ぜられますが、併し往を知て來を推すのは作戰上の一秘訣とでもいひませうか、最も重要の事と信じますので例に依て賣行の狀態の概況を述ぶることに致しませう。

さて月の上旬に於ては生絲の賣行何となく穩であつたが氣配いよ〳〵強硬と見て取つた各商館は其買入れを信州上一帶に向つて直押或は「デニール」の缺點などを楯に破談を申出ずる者さあるやうな始末で七八日頃から十三四日頃迄の間なほは安値に賣り讓ずるより外ない有樣でありましたが十六七日頃に至つて歐米に於ける新規注文が顯はれたので市場は忽ち一變して騰かとなり和場も上進し成行を昂し併し廿三日頃から又々直輸筋の動靜が穩となり、夫れと共に各商館の買控への態度に出でましたので面白からざる氣配の下に越月するやうなことになりました。

絲況

生絲最高價月別前年對照表

本月中の入荷は二萬七千百七十七個半で昨年の同期よりも四千六百九十八個を增し手合は八千八百二十九個で之も昨年の同期より二千八百二十九個を增したのです、而して十一月中に於て最も高價に賣行きましたのは山梨縣の矢島組金太及新潟縣の鈴木製絲の金太でありまして何れも千〇六十五圓に賣れ最も安かつたのは福島縣の共同荷造所一頭馬折返の八十圓でありまして、今左に本年一月以來の最高價と前年の夫れ百四と之を對照して參考に供しませう。

明治四十一年十一月白一日至三十日生絲集散表

御左に本月中の生絲集散種別表を掲げて參考としませう。

明治四十一年			明治四十年			價格の差
一月	山形縣	石黑商館製絲	一月	山梨縣	矢島組金太	二〇五
二月	山梨縣	矢島組金太	二月	山梨縣	矢島組金太	二六〇
三月	山形縣	清藤社太	三月	愛知縣	日登社細	四五〇
四月	愛知縣	日登社細	四月	山梨縣	矢島組金太	二六〇
五月	靜岡縣	正木製絲細	五月	靜岡縣	正木製絲細	三五五
六月	山梨縣	甲南社細新	六月	山梨縣	甲南社細新	四五〇
七月	山梨縣	廣瀨社太	七月	山梨縣	秋島組新	一四〇
八月	群馬縣	碓氷社羽子板	八月	群馬縣	碓氷社羽子板	一四〇
九月	靜岡縣	六龍社細	九月	靜岡縣	六龍社細	一四七
十月	靜岡縣	天龍社細	十月	靜岡縣	天龍社細	一四六
十月	山梨縣	矢島組金太	十月	靜岡縣	甲南社細	一四五
新潟縣	鈴木製絲	金太	新潟縣	鈴木製絲	金太	一四六
十一月	靜岡縣	城南社細	十一月	靜岡縣	城南社細	二四五

明治四十一年十一月自一日至三十日生絲集散日別表

	器械	座繰	挽返し	雜繰	合計
持越	二七、六三一	七、四三二	三、二一七	三、八四七	三八、八四七
入荷	二、二、一六九	三、五六四	一、三七七	六、六	二七、七七
賣了	一七、四五五	三、六八八	一、三六三	九	二二、五一五
地方仮屬	六五四	一六三	六四	一〇	八九一
繰部	三一六九一	七、五五五	三、一六七	二〇四	四二、六一八

備考

一、表中單位欄は九百目を一瓩とす

二、持越とは本月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査と係る

三、上記賣了とは賣了合計と若干の相違あり調査より調査迄の間に商談成立したるものあるを知るべし

四、賣了中未報告のものは入手四百六十七俵にして欧州に輸出せるものは二千七百六十八俵なりとす

尙左に生絲集散日別表を掲げて參考としませう。

生絲集散日別表

器械太△ 同中△ 同細○ 座繰○ 挽返し× 雜繰+

日	入荷	手合	賣了	引渡	輸出	地方仮屬	商名	社名	別種	最低	最高	摘要
一日												日曜日
二日	二、三五八	六二七	一、一六三	四五		一〇四	傳中山陽製絲 上野碓氷社銀紅葉	□ ×		一、〇二〇 八五〇		欧洲向弗々買翌み遺當品は小高き足取なり取
三日												大祭日
四日	二、二〇九	一三一	九四四	一八		一〇七	武蔵岩代共片倉組石原	+		八九〇 八九〇		上州南部座繰の商ひ出來ぜし外は目星し
五日	一、一四五	四〇七	七一三	一八	二、六一七	三七	上野岩代共榮社一提手	+ ×		一、〇一〇 八九五		一番館買氣有りて直段も穩りなく弗々商ひ出來ぜり
六日	八五六	一一八	八三六	五四		三九	岩代共南同光二	社 + ○		九八〇 八五〇		注文更に來らず商談行はれずして靜況に過ぎたりし
七日	九〇九	一八	一、一一二	三五〇	五三八							
八日												日曜日
九日	一、四一五	七二	一、〇九九	一一二								
十日	二七、七七	二二、五一五										
十一日	七六一	二九〇	五〇四	一一九	一、一一九	五四						
十二日	一、三一一	一一九	一、〇二八	五一六								
十三日	一、〇一九	一五九	一、一七一	一、一四二								
十四日	一、〇四〇		一、〇一六	三一八		一〇九	一、一四二			一、〇六七		
十五日												
十六日	一、五七二	八二七	四〇八			七	甲斐上野碓氷社二人線	×		一、〇三五 九五五		細筋座繰の商ひ出來し相場も品により
十七日		一、三一七	一、三七一			二二	甲斐信濃先鳥組	金		一、〇五五 九〇〇		相場軟して十圓高に商談出來し氣配は
十八日	八二三	八九八	九三七	一〇	二〇一	一五	甲斐信州瓦南	社		一、〇二〇 九二五		一番館へて買氣を呈し信州上一番格は
十九日	七四二	八二〇	八九五	三九		七四	上信濃碓氷社	組		一、〇一〇 九一〇		十圓高にて商談出來し氣配は
廿日	九九一	六一八	一、九五九	一七	七三	三〇	甲斐上野碓氷社紅葉	金 ×		一、〇六〇 八八〇		必要口へ五圓高にて少しく手合出來し人氣穩りなし
廿一日	八九一	三四七	一、四六八	二六	九七四	一〇五	遠江岩代共天龍二川	馬		一、〇五〇 八四五		商談靜なりしも穩りなく保合へり
廿二日												日曜日
廿三日												大祭日
廿四日	二、二五一	一三七	八六二	一〇二		一七	越後相模信濃碓氷社金柔	絹製 ×		一〇六〇 九〇〇		商談更に出てず風る閑散なりし
廿五日	一、一一七	三七	八七八	一四二	二、四二六	四	陸前岩代共柳川二馬	絹製 +		一、〇〇〇 八五〇		挽々しさ入荷に接ぜず一般に見送り續へて沈靜なり

廿六日	九七六半	一六六	三八四	六三	—	五二	丹波氷上共同社 岩代東北社紫	×□	一、〇〇〇 九二〇	少しく注文違したる向きあり多少商ひ出來せしが相場は品により一二十圓方安かりし
廿七日	一、一一六	七二	六九八半	三六	—	一二	陸前初瀬館 上野碓氷社銀	×□	一、〇〇〇 八八〇	折返し一番口手合あり外は染たる商談とてあらざりし
廿八日	八五六	一四四	七一七半	一八	五七四	二三	羽前群山社 岩代共同二馬	+○	一、〇〇〇 八四〇	前日同様の成行なりし
廿九日	—	—	—	—	—	—				日曜日
三十日	一、二二七半	六三	七三五	一一	—	三四半	甲斐白嶺社 上野交水社	×□	一、〇一〇 九五〇	多少買氣ある向も氣乘り薄にて錄々手合出來せざりし
合計	二七、一七七半	八、八二五	二〇、七八六	一、四八七	一二、二三五	八九一半				

尙左に本年一月以來の生絲集散の絲況を明らかならしむる爲前年對照表を示すとしませう

生絲集散前年對照表

年月次	持越	入荷	賣了	發戻	繰越	輸出 數量	輸出 價格
四十一年一月	四四、二一〇	一〇、九七二	九、八五五半	三二四	四四、三九三	五、九六二	
四十一年二月	四四、三九三	四、八七九半	一一、四六二	一、七一五	三四、八八〇半	五、六六二	
四十一年三月	三四、八八〇半	一〇、〇六〇半	九、六七〇	二、〇四四	三一、五七六半	六、四七九	五、九一〇、八九一
四十一年四月	三一、五七六半	一一、三一八半	一三、四五五	二、〇六五	二三、三七一半	七、三六二	六、九二五、四三八
四十一年五月	二三、三七一	九、五七四半	一三、二八四	一、二〇〇	一七、一三六半	七、一四四	六、八二五、八九一
四十一年六月	一七、一三六	一〇、八一三	一一、六〇九	二、四三五	一一、三九五	八、五五〇	七、一七四、二三一
四十一年七月	一一、三九五	二六、九九六	一九、九二四半	一、六四〇	一七、二三九	一〇、五六三	一〇、三五五、五一四
四十一年八月	一七、二三九	二六、七三〇	一九、九八三半	一、〇八一半	二三、六〇四	一一、四四六	一一、七三六、〇八〇
四十一年九月	二三、四六〇	二七、八三八半	一八、四六八	五六三	三二、二六八	七、二三〇	七、九四四、五七七
四十一年十月	三三、三七六	三一、六三七	二四、九五九半	一、二〇七	三八、八四七半	一四、八五四	一二、七九一、八〇八
四十一年十一月	三八、八四七	二七、一七七	二〇、七八六	八九一	四二、六一七	一一、二三五	一一、四九四、一四一
計	—	一九八、〇〇〇半	一七三、四五六	一五、七七五半	—	九六、七八七	九三、二一二、八八六
四十年十一月	—	一八一、三三三半	一三二、四八一	一九、三三七半	—	八六、五三八	一〇九、六〇五、九八七

問答

蠶網用りうきう草の件に就き質問

島根縣通常會員 賀元虎三郎

一、りうきう草の種子又は根苗を販賣する所と其代金を敎へて下さい。

二、りうきう草の乾きたるもの、其儘で使用することの出來るものを販賣する所と一貫目の代金を明細に敎へて下さい。

答　學藝委員 土屋泰

一、りうきう草は前年刈り採つた古株を殘して置いてこの古株を分て植ゑるものであるが苗として販賣する人があるといふを聞いたことがない。

二、りうきう草は靜岡縣引佐郡に於て、澤山作つて各地方に送り出して居りますから、販賣所と代價等は同郡農會に御尋ねなさい。

蠶室用燈火に就き質問

山形縣通常會員 松田巳作

一、目下各地に流行して居ります處のカーバイトを使い、アセチレン瓦斯を貯へて之を蠶室の燈火に使用しても害がないでせうか。

答　學藝委員農學士 川島勝次郎

一、アセチレンは漏れなければ蠶室に使用して害がありませんけれども價が廉くないから經濟でありますまい。

蛹體の顯微鏡檢査に就き質問

茨城縣通常會員 桑名初太郎

一、蛹を顯微鏡で檢査するには如何なる方法で爲すのですか

答　學藝委員農學士 川島勝次郎

一、蛹體の顯微鏡檢査は普通母蛾檢査と同一の方法で宜しい、されども蛾化前では病毒があつても鏡面に現れぬことが多いから之を行ふても殆ど無効です。

蛆害に就き質問

岐阜縣通常會員 武山桑太郎

一、學者の說には蠁蛆蠅は小葉物よりも大葉物に産卵すると云ふが、則標本（魏江）の如きものは實地調査するに魯桑の如きものよりも多く見受けられますが標本のは相違して居ますか。

二、蠶の三四齡には魯桑の如きは葉脈が太いから失れた蠶は殘して食しますが故其傍らの蛆卵も從つて食ひ殘される樣に思はれるが如何ですか。

三、蠶が蛆卵を嚥下してから孵化する迄には幾干の時間が有りますか、夫れに長短は有りませんか、若有りとすれば如何なるもが長くかゝり、如何なるものが早く孵化しますか。

四、會報百八十號說林中鈴木利一氏の說の如く高溫に飼育すれば死蠶を生ぜずとの說をなすものが當地方にも有りますが、此は溫度高ければ蠶體内にて消化作用迅に行はれ、蛆卵が孵化せざる間に糞と共に排出せらるゝのでは有りませんか又他に原因の有るのでせうか、尙又强壯なる蠶兒は蛆卵を嚥下するも消化作用適なる故、直に卵を糞と共に排出すとの說をなす者も有りますが、さる事は有るものですか。

答　學藝委員理學博士 佐々木忠次郎

一、蠁蛆蠅は桑葉の大小に拘らず其繁茂した者には必ず産卵する者であります。

二、蠁蛆蠅は桑葉の葉脈には産卵せずして、之に接する葉體に産卵するものなれば葉脈は太きも之に接する葉體に卵の産付けあるものなれば、此部の葉體を食すれば矢張卵を嚥下するを免れません。

三、蠶兒が蛆卵を嚥下したる後大抵三十分計を經て孵化するものであります。

四、會報第百八十號の説林中に鈴木利一氏の述べられた高温育は、蠶蛆の寄生を免かるると云ふことは、先づ高温育とは華氏の何度を標準として育蠶せられたるか、此點が明かでないから、高温育は蠶蛆の寄生が減少するや否やは確答することが出來ません。

蠶病消毒に就き質問

長野縣 通常會員　綠川源一郎

硫黄を燃燒して發する處の亞硫酸瓦斯にて蠶病の消毒た効力が有りますか、若し効力が有りましたならば五千九百四十立方尺の蠶室に於ては、何貫目の硫黄が入りますか御教授を願ます。

答　學藝委員 農學士　林　驛作

亞硫酸瓦斯は消毒の効力あるものなるが蠶室蠶具の消毒用としては「フォルマリン」に比すれば其効少なきのみならず種々の缺點ありて實用上適當でない、即ち色素を褪色し物體を腐蝕し人畜に有害である、且此瓦斯は空氣より重いから室内に擴散し難い從つて其効力完全に及び難い等の不利がある、又注意しないと引火して危險である、併しながら費用の點は安いから以上の缺點を承知した上で試むるには差支はない、其方法は豫め消毒すべき物體に少許の濕氣を與へ然かる後消毒室の百立方尺に對し硫黄三十匁乃至三十五匁を鍋に容れ、徐々に熱して溶解し流狀となりしものに點火して、徐々に燃燒するのである。瓦斯發散後二十時間以上も密閉せるまゝ放置しなければならない。

蠶の種類に就き質問

岡山縣 通常會員　村上德海

愚生蠶種を製造して居りますが理想の原種が有りません先般の諸賢繭質最も佳良の種類がありますなれば御教示下さい、尤も之は一化性のものに就て願ひます。

答　學藝委員 農學士　林　驛作

蠶の種類は非常に多きも凡ての點が優良である所謂理想的のものは未だ無い從來の試驗成績によれば小石丸、青熟、又青蓉は頁種である、併し名稱は同一にても實質には優劣があることがある故一概に指示し難い、宜しく自ら擇定するより外はない、右の内小石丸、青熟は京都蠶業講習所に配布を出願したら下附になるであろう。

蠶病消毒の件に就き質問

茨城縣 通常會員　田崎　巽

一、蠶室消毒噴霧器は何式が最も宜しいですか

二、「フォルムアルデヒード」を發生せしむるには「フォルマリン」液に硫酸及生石灰を加入する方法がある樣に聞て居りますが、該方法は果して有効で實際蠶業家の採用することが出來るものでせうか。

答　學藝委員 農學士　辻　暢太郎

一、消毒用噴霧器には一長一短ありて何れを以て最良なりと認むることは困難であるけれども、河村式は特に優秀なりと信ずるのである。

二、「フォルマリン」に硫酸及生石灰を加へて「フォルムアルデヒード」を發生せしむる法は、其操方困難であるから蠶業家の實際に採用すべき法でない。

胡枝子に就き質問

群馬縣 通常會員　關　孫四郎

或農學士の著書に農科大學胡枝子栽培試驗に於て年三回の刈芟により、一反歩に付明治廿二年に生草二千八百八十四貫六百目同廿三年に二千七百九十四貫九百目の收穫があるとあります、若し上記に近い收量があるならば、予が地方の經濟事情は殊に之を栽培することが出來ますから、之を栽培して桑園の肥料としたいと思ひます、就ては左記に就き御教授を仰ぎます、(一)植付は何尺の畦に何尺の距離を以て一株に何莖を植付くれば宜しいでせうか、(二)肥料の用量及び施肥する期節、(三)手入の仕方、(四)植付初年から採收することが出來ますか、(五)何年目位より充分の收穫があるものですか、(六)植替は何年目位にすれば宜しいですか、(七)實蒔て繁殖しますならば其播種の方法及び實蒔と分株繁殖との利害得失はどんなものでせうか。

答　學藝委員 農學博士　横井時敬

一、繁殖法は分株が通常です。

一、植付は四尺に四尺位が宜しい。

一、肥料とて多く要らぬ灰肥過燐酸などを適宜に早春頃施せば最も良しからう。

一、手入は冬間に一回も中耕せば宜しからう。

一、春に植付たらば其年にも多少の收穫は得られやうが、三年目の後に至り始めて充分の收穫があるでせう。

一、随分長く收穫があらうけれども、植替の年限に就ては未だ經驗がない之を要するに胡枝子を飼料としてまた肥料として多く栽培したことがないから、經驗に乏しく充分の答をすることが出來ない。

繭殺蛹乾燥並に貯藏に就き質問

京都府 通常會員　谷口善識

一、殺蛹乾燥をなすに厚付けより薄付けを良ろしいと考へます、然るに買入の際一時に輻湊した時、厚付けの手段より外になく不得止厚付をするとせば最適一平方に對する升量及何粒重り位迄は解舒に甚だしい影響がありますまいか、右の場合に於ては温度と時間はどの位が宜しいでせうか。

二、殺蛹と全乾燥とを除き其中間に於て生繭より何步減りの者は、何日間位は紙袋入れとし積で置きまして（外氣浸入せざる室と多少浸入する室との區別なく何れも晴天のみと見做し）醱酵作用が起らぬものでせうか。

三、亞鉛張りの貯繭室に全乾燥の繭を袋入れとすると袋に入れず繭のみ詰め置くも(便不便を不問)繭質に何等の影響もないものですか。

答　學藝委員　石居一郎

一、繭の殺蛹及乾繭は共に薄置きを可とするは貴説の如くである、されども繭が輻湊して其處理に困難を感ずる場合にありては、厚置きは止むを得ません其の程度は殺蛹の時は二粒半乃至三粒、乾繭の時は二粒並べ以上ではいけません、是等の程度なれば甚しい害はありません、例へば二尺に三尺の箔なれば厚置となすも殺蛹の時は一斗以上乾繭の時は七升以上を容るゝは甚くありません、温度は殺蛹、乾繭共に百七十度乃至二百度迄を可といたします、而して乾繭にありては中ば乾燥し得たるとき百七十度を以てするを可とします、時間は容量の多少及室の構造及其方法等に由りて異るものであります。

二、本間は中乾燥の繭の貯藏に就ての質問の樣です然らば大體左の如き時間内にありては甚しき醱酵作用は起りますまい。

二割減じたるもの	紙袋入	二十時間乃至三十時間
四割減じたるもの	同	六十時間乃至七十時間
六割減じたるもの	同	一ヶ月内外

但晴天なれば外氣が浸入すると否とに依りて大した差もありますまい。

三、亞鉛張の貯繭室であつても空氣の浸入は到底免らることが出來ませんから、繭のみ詰め置くのは其質を惡くいたします、故に室の大小を問はず袋入とし貯藏するが良い。

蠶兒飼育に就き質問

埼玉縣 通常會員　小林瀧松

一、午前二三時頃食桑盡き蠶座が乾燥するときに適度の快温のみを與へ置くのは却て蠶兒を饑ゑしむるの恐れがある、寧ろ翌朝飼桑を與ふる迄火力を廢し假令冷にして五十度内外に至るも其儘温度の下降するに放任する方宜しからんかと考へますが如何でせう。

二、給桑の好時期は總體蠶兒がどの樣な動作を現はす時が適當ですか。

三、一見強壯の蠶兒が、蠶座を離れて席の周邊に匍ひ出て、或は頭を揃へて席の緣を臨むは何の爲めですか、而して此現象は古い箔目の疎いものに多くつて、若し此蠶兒を新しき箔目の密なるものに移すときは、蠶兒は皆蠶座の上を再び匍出つゝあるやうなことはありません之は何故ですか。

四、當地は數年前から蠶種の合同購入を實行して居ります、然れども時恰かも養蠶農家の時期であるから、蠶種家の蠶況及成績を視察することが出來ません、之は甚だ遺憾であります、居ながら蠶種製造家の蠶況成績を精細確實に知るの便法がありますまいか。

答　學藝委員 農學博士　外山龜太郎

一、御考察實行されても差支へなし、但し餘り極端にならざるやう希望す、又蠶の種類及び發育の程度によりても加減ありたい。

二、飼育上より言へば桑下の適宜に乾燥したる時を以て可とし虫の性質より言へば、習中の食桑が多少消化したる後を以て可とする、換言すれば食後一時休止し

(三)、御意志の如き可き樂に(二)、虫の性質にもよる(二)、蠶座の狀態及室内の溫度の如何による三、風の工合にもよる

四、六ヶ敷御質問である今日には明法がないでおならう。

玉繭絲の件に付質問　山形縣　横山壯輔

一　三河國產玉絲の眞なる產地は何郡ですか。

二　有玉絲の製絲業は旧絲の一人捲ですか。

三　原料の繭に夏秋蠶繭に限りますか將た春蠶繭にても同等の眞品を製造することが出來ますか。

四　工女一人、一日の製造絲量は何匁位ですか。

五　設備が加入ふことは容易ですか（約年ヶ年間）。

答

愛知縣技師
特別會員　橋本定吾

一　近年の創業で還元玉絲の等級市及び二川町附近は盛なる產地であります。

二　現在工場組織で繰出生絲工場の數並總に一人捲に相違なく組付けたと異りませぬ況も一人前の原料は三尺內外であります。

三　原料の種類に制限はないされども選出の原繭は他の玉絲產地へ再び輸送して居る夏秋蠶繭と春蠶繭と同位のものは出來ない、同業組合に於ける左の製造標準によりて了解せられたい。

等級	繭種	製法
優等	金繭	原料
一等	金紅葉	夏秋支那繭
同	金孔雀	スカリ取
上	同	同
二等	金鳩	同 上
三等	金鳩	春繭秋繭
四等	金鳩	春繭秋繭
五等	金ブラ	春繭	ホーキ付
		ホーキ付

四　繰絲功績に玉絲の等級及繭原料の眞否に依りて一概に云へないけれども金繭印にて平均一日八十匁內外は繰製することが出來る。

五　設備として通常の人物が少い、加ふるに種々の事情と困難があつて殆ど讀みがなかのは吾々の平素慨歎として居る所である。

【農村の娯樂問題】横井農學博士曰く近來農業關係者以外の人が田園趣味を鼓吹するに至つたのは喜ビに堪ぇぬ次第で、之を鼓吹されたなら田園を樂しむものが多くなるはたしかである、左りながら此鼓吹者は如何に田園趣味を解釋して居るだろふか、單に山光風水の清いと云ふこと、幷に農業は樂しいと云ふことでは曾て農業に從事した事のないものにはよいかも知れぬが、農者業に向ては悲安にならぬ苦しいことは苦しい、肥料や醱酵瓦斯などで强ち清新の風水とばかりも行かぬ、田園の樂しいと云ふことは、常事者に取つては或程度迄しか効果かない、若い者は萬事活動するを好む、都會は便利で活潑の樂しみがあるに引かへ、農業には活潑の樂しみかない、若い者が都會に出たがるも無理はない、若し田園の樂しみを今日の盛にして當て田園を樂しましめんとし、無暗に都會に出たがる者を止めるのは、人情であるまい去る者を止めんとせば、農村を趣味ある田園とせねばならぬ即ち娯樂を與ねばならぬが今日の娯樂は人道や風俗其他の欠點があつて奬勵しても宜いと思ふものが殆んどないが、從來の弊害ある部分を除き好い部分丈け奬勵せねばならぬ、又四十三年からは暦本に大陰暦がなくなるから農村の娯樂に變化を生じて來る故に平常の日には可成日曜を休むことにしたいが仕事の都合で必ず休むと云ふ譯に行かぬから別に暦本に何日頃と大体を定めて必ず休むと云ふ譯に行かぬから別に暦本に何日頃と大体を定めて當て其日取は村々にて閑な時を撰ふようにし平等に樂み共に勵むことが自治の本旨あろふ斯くしたなら自治の實踐を與ぐることが出來るだろふ（雜誌斯民）

果して之で三徑荒に就かんとする農民を引き止め得るだろふか甚だ疑はしき限なれ現今農休みをば春に夏に秋に行ふて居る處は殆んど全國一般なるべし、其の娯樂を清新にし樂みを平民的ならしめ農村の改善に勉むることは吾人貧賤することは敢て人後に落ちぬ考なり、左りながら清新には素よりせねばならぬが人を止め易き引き易き又嫌り易き醜汚の娯樂があつてさへ然り、効果の程度はざるを得ない、利に向て走り害に背て去るが人世公道の原則ならば射利に空想的成効にあらざるべしとの最と甚だしい咋今に於て娯樂の爲に引止められようか、夫れよりも農業の眞味の味を味はさす方法を講ずるが先きではあるまいか、是か難事じやからと云ふて捨てては置けぬ吾人は趣味の問題と同時に此方面の改策を鼓吹して欲しいが如何？

【廿七年間如何に道場と戰ひ來りし乃】大隈伯の實驗談　吾輩は餘り力が有り過ぎて所謂千里の力を百里の處に振ひ過ぎて失敗した、自分で直接に仕事こそせね、乾分共にやらせるが乾分共が餘りエラ過ぎるからイカヌ例へば大學生の讀むべき本を小學生に賣り付け樣とすると同樣駄目だ、併し吾輩は決して困たとは云はぬ、死ぬ迄愚痴は零さぬ、人間は運り損するものでない、成らざるを成らずとする是れ成れるなりと斯う考を轉じて行けは後悔の必要もない、愚痴か起れば酒でも飲むさ、人間の知慧には限りあるもの、愚痴になる迄考へるのは間違て居る、愚痴と馬鹿とは餘程近い親類である、抑も吾輩は町に下つて二十六七年、逆境と戰つて來たが戰へば戰ふ程勇氣が增す、敵が攻めて來るから戰ふので、宜しいやつて見ろ百斤の力で敵が攻めて來るなら己れも男だ百二

抄録評論

【農業觀】織田一氏曰く農業の奬勵は人口を都會に集注する弊を防止して地方農園の荒廢郡村の衰殘を救濟する所以で富國强兵の實踐を量ぐる捷徑であるが我國の農業は動もすれば衰退せんとする故に之を一般農民の雲すが儘に任するときは其改良發達は期し難きを以て國家は特に保護奬勵を施すの必要あるのみならず其保護奬勵は國家存立上缺く可からざる理由あり若し夫れ國家が保護奬勵宜しきを得は豫期の發達を爲さしむること至疑ならずと（農業世界）

然り之に就て吾人は異論なし、異論なきのみならず寧ろ保護奬勵の今日迄微なるを怪をすんばあらず、マア〳〵ドーかコーカ食みて土を塊つて居るからいゝじやないかにして餓かれたではあるまいか、折角心配して與れた農業はドーやらさゝやかな農業者には御利役がなさそうな、常食とする甘い味噌、甘い漬物も勞働者の勞苦を慰するには餘り痛が大きくつて喉嚨を通らぬ樣だ、左るにても農民は其論旨の有難いのに泣くだろう、唯國家の豫期する發達とは何處で、保護奬勵を具體的にしたら如何のものかモー少し痒い處へ手を？

十斤の力で發ぬ返してやれと云ふ存念が起きる此の反發心が境遇を產み出すので、最初は逃げようと思ふて逃げて見たが、行き詰つて仕方なく反抗した、やつつけて見ろ取手に取つて不足はない、いざ見參と振り返れば不思議なものでたいしたる手創も負はぬと云ふ樣な有樣で今日迄來たか一體人間に取つて此の壓迫は極めて大切なもので壓迫かなくなれば人間は夫れ迄であるが壓迫を加へられれば初めて知慧も付けば悧巧にもなり段々向上して行く夫れ故に吾輩は滿腔の俗衷かは知らぬが寄せ手の面々に向つては常に虛誇の意を表して居る犬の子も三年で吾輩も少しは悧巧はなつたが油斷はならぬ、やり潰す迄は遣つけねばならぬので初めて百二十五歲の長壽の必要が起つて來たのである、實業之世界）

政黨に背く水の陣を取つて壓迫を受けた伯は早稻田大學に其反發的成功を表した、壓迫がドント來れば上に飛ぶし、しなやかに來れば横に飛ぶ、縛の下の柳も遂には自向を見付け出して末にや靡當となる、自然の壓迫に對しても反發的心を要することは多々益々だ斯く云ふ吾輩も壓迫の中に七年、伯に比ぶればまだ二十年足らぬ呵々

【文科大學々制改革】文學士が就職口がない爲に卒業論文制度を廢して試驗制度に改めんとする意見多く、其實行を見んとするに至れりとか、之其學力衡下せるを救剤し、再び文學崇拜の時代を作らんとすと、果して注文通り往くや否や、世は實利主義、實物主義に爲事を引き付けて進まんとして居る、文學旺盛の奈良平安時代の跡に武骨時代が來た其後に明治文學が來た、若し世の潮流が渦旋を爲して進むとすれは、今此の渦旋が何處らに居るか面して矢の方向は何ちらに向ふか考へねば、制度改革を何邊やつても先きから御氣もじ樣ではあるまいか

【肥料取締改正運動】　客年十月より實施を見たる肥料取締規則は、營業者を束縛すること甚たしきの故を以て、一二ケ月立つか立たぬに早くも改正運動に奮し、全國の同業者聯合會を同き、其決議事項を主務大臣に具申せりと、更に全國商業會議所聯合會に向ひ、改正建議案を提出せりと、

今改正肥料取締規則が如何なるものなるかは云ふの要なし曾て房州砂を賣つて、さんざ、農家を苦なしたこともあつた大根か好く出來るだろふ麥が好く出來るだろふと樂んで、金を拵つたが空だのみに終つた時代もあつた、全國十三の肥料會社か重いか五百二十萬の農家が重いか、若し煩に堪えぬと云ふなら、御商賣御止めもこれ迄にしたらいかゞ、煩雜のもの、辛棒せねば儲かりもせず、だまされた上げくはたへりもすること是非なけれ

【日韓農業談】　韓國農務局長中村塗氏曰く、韓國の氣候は養蠶製絲には日本よりも一層好く適して居る、三十九年から今年迄の經驗に依れば飼育の上に於て日本よりも手數を省くとの由來るのは著るしい、是はつまり空氣が能く乾いて居るから蠶坐か濕けると云ふ事はない、寧ろ薄い桑の葉などを蠶にやつて食ひ餘しが早く乾らき過ぎて困る位である、彼の葉か厚くつて蠶坐か濕けると云ふ樣に云ふて居つた魯桑などは韓國に於ては最も適して居る、丁度好い桑である、病蠶なども強かに上該問題になつて少し見えると云ふ有樣で、春蠶期中などは雨が二三日しか降らぬ前に彼に桑を切つて蓄へると云ふ樣な必要もないぞ（中央農事報）……益々多望と云ふべしだ

會務錄

評議員會

十二月八日午後三時より本會事務室に於て評議員會を開く出席者及決議事項左の如し。

會頭男爵　松平正直　副會頭　農學博士　酒匂常明

石井一郎　林鶴作

本多岩次郎　伯爵　正親町實正

若尾璋造　加賀山長四郎

吉雄慶正　辻龍太郎

角田喜右作　土屋泰

綿木喜三　桑田熊蔵

男爵　船越衛　法學博士

理學博士　佐々木忠次郎

紫藤章　下田　伊左衛門（いさは屋）

問會の始め松野會頭より多年本會議員の職に盡瘁せられ又本會理事として努力せられたる星野長太郎君に代り病氣の爲療養の勞を煩ぜず、遂に去十一月十七日歿去の訃音に接したるに講演諸賢と共に驚く悲惜へさる所なり、依て本會名代表し特に吉雄理事を會葬せしめ香奠として金百圓を贈りたる旨を報告し、次て定款には理事の欠員ある場合に於て必要と認めたるときは總會の議決に依て補充する旨の規定のあるが、會則に於ては目下必要と認めざるを以て明年の改選期迄欠員の儘に爲し置かんとの報告あり、滿場異議なく夫とり議題に移れり。

決議事項

一、明治四十二年度豫算

吉雄理事より詳細の豫算説明あり總会長は本會の設立の趣旨及其の學會の學會の發展の概に鑑みて更に異議なしと認べ、角田、若尾、下田等の諸君の賛成あり異議なしと滿場異議なく可決確定す。

二、大日本蠶絲會女子蠶業講義錄講習規程

三、女子蠶業講義錄發行に付き基本金一時流用の件

右二題を一括として吉雄理事より本會に於て女子蠶業教育の一助に資せん爲女子蠶業講義錄を發行せんとする趣旨の說明あり、若尾、綿木二氏の賛成、下田、角田、正親町等の諸氏質疑を述べ加賀山、佐々木二氏の賛同後修正成あり、結局二字句を修正して別項記載の如く決定せり。

四、支會規則中改正の件

吉雄理事より支會規則第十二條に於り本會に對して徴收せる會費の二割を分付する規定なるが、幾に本會に於て定定せる各府縣の會員募集定數に達したる支會には、其後の徴收會費に對して三割を補助することとなさんとすとの說明あり、角田氏ゞ賛成し異議なく別項の通可決せり。

有名問題を語りて例本會の事業上に關し種々協議する所あり、會頭より第六回功績調査委員を設け別記載の如く選擧したる旨を報告し、午後八時過散會せり。

大日本蠶絲會女子蠶業講義錄講習規程

第一條　本會は女子蠶業設會の發展を計るため當女子蠶業講義錄を發行し毎月一回講習員に配付す

第二條　本會發行の女子蠶業講義錄の科目左の如し

一、蠶業總論　一、養蠶法　一、桑樹栽培法　一、蠶病及消毒法　一、機械使用法　一、製絲法　一、蠶種製造法　一、蠶種製造及消毒法　一、屑繭製造法　一、蠶業に關する法規

附錄　課外講義　一、家事經濟、育兒及衛生、裁縫、料理等、時事報導、江湖雜答

問題答

第三條　講習期間は十ヶ月とす

規定の學科なる講習せざる者には帝國により講習證書を授與す

第四條　講習員たらんとする者は左の講習料を納むへし

本會々員　金貳圓　一時前納

本會々員外　金參圓

第五條　講習料の領收は送なる以て其證と爲す

但し領收證希望の者には端書か封入へし

第六條　既納せる講習料は中途にして退學するも之を還付せず

第七條　講習員既習の學科に缺き短縮めるときは質問なる爲質問に待當

第八條　講習證書なる求め回答すへし

講師の應答なる求め回答すへし

講習證書樣式左の如し

第　號

講習證書

府　縣特別通常會員（會員外）何　某

本會規定の女子蠶業講義錄の科目を講習したることを

證す

年月日　會頭　名

支會規則中改正

第十二條　本會に左の但書を加ふ

但し第二會員臺集後定數に達したる支會には三割を交付す

參照　支會規則

功績調査委員

今回第六回功績調査委員を會頭より左の如く選擧せられたり。

土屋泰　角田桂之進

西直次郎　羽田喜右衛

支會の新設

今回高知及福岡の國地方委員部なる設し、新に支會なる設置正副會長及幹部員は總裁殿下より、委員部長及商議員は會頭より夫々囑託せられたり

高知支會長　石原健三

同副會長　和田世民

同幹事長　大塚盛太郎

同委員部長

安藤富田其太郎　香美藤田喜金　長岡東山齋馬

土佐山崎喜代太郎　香川森下直樹　高岡佐野傳

幡多小島純太　高知小川直己

同商議員

仙頭米太郎　遠藤春正　松尾富功錄　淺羽春馬

金地嘉正　望月平太郎　茨木定穀　別役傳

四角義顯　吉其禎吉　岡林忠盛　大西正義

神戸其顯　四山精一　辻重忠　横山穀三

佐竹義晴　寺原長輝

福岡支會長　寺原長輝

同副會長　折原巳一郎

同幹事長　片田豊太郎

支會職員の囑託

茨城外八支會の職員は中興勤のり支會長副會長は總裁殿下より、委員部長商議員は會頭より左の如く囑託せられたり。

茨城支會長　森伸輔

秋田支會長　森正堅

群馬支會長　佐藤孝三郎

同副會長　同委員部長　同商議員　内田佐藤

福島支會長　同委員部長　青沼錄太郎

岩手支會長　同委員部長

博貝尾形魁蓉　和賀石川七郎　綾部静俊元長

東京弁細川荒雄　氣仙伊奈金雄

由形支會委員部長

南村山吉田守信　東村山長谷川與作　最上藤澤與輝

南置賜土田義孝　南餘中澤弘蔀　足羽東忠蔵

福井支會委員部長

島根支會商議員　宮脇休一郎

山口支會大津委員部長兼商議員　横俊治

地方委員部の囑託

德島及廣島地方委員部職員中興勤のり地方委員副長は總裁殿下より、地方委員は會頭より左の通囑託せられたり

德島地方委員副長　細田秀太郎

同地方委員

山崎熊太　河原正名　川人英次郎　磯部豊次　小田耕介

大崎花作　佐藤重太郎　川田迪太郎　大島英二

廣島地方委員部地方委員　窪月國馬

特別會員の推擧

左の諸氏は本會功勞者及篤志者待遇內規に依り本會々務に貢獻せる勞功顯著なる廉を以て今回本會々頭より特別會員に推擧せられたり。

信濃支會　竹下源六　有賀眞太郎　佐々木憲夫　赤羽魁蔵

大星忠一郎　樋井文平　上田幸次郎　宮澤嘉登　津金宇平

笠原謙吉郎　千野泰　岡角熊三郎　武井謙一郎　伊藤義男

北澤米重　花岡覺吉　伊藤九衛　矢崎藤吉

羽生善太郎　小林安太郎　一ノ瀬金次郎　仁科岡人　鄉澤岩太郎

宮澤喜平治　淵戸平助　林茂　唐木茂　北原岡智之助

原勇次郎　正木鶴太郎　木下良太郎　中島德　小澤明之助

竹野內九治　倉澤卯之助　三原儀十郎　中村長右衛門　宮田鋼吾太

鍵迫高市　深田喜作　草間明三　宮田鋼吾太

本郷芳子　樋渡秀枝　曾根原鉄太郎　森貞次　森島太郎

小澤治忠太　林盛三郎　四牧長太郎　岡村久吉　河原藤一郎

上野篤吉　上野篤吉　上原佐次郎　鳳岡重義

北村謙介　川上和人　小林富一　宮田今朝次郎　宮澤政之助

齋藤泥太郎　矢口乙吉　宮下量平　山本庭一郎　遠牧作庭　大日方喜一郎　白澤馬吉　伊東三右衛門　志訓秀英

高田元一郎　關房吉　丸山筆吉　高寺音次郎　高山佐門太　大田文五郎　柴田幸吉　松下雄治　西澤長次郎

相澤頼太郎　西山五右衛門　羽田喜助　高寺音次郎　長澤榮太郎　川上治一　伊藤博次郎

中山德十　淳田清太郎　齋藤多賀重　青木繁作　北澤新太郎　高野省太郎

林佩一　淳田清太郎　齋藤多賀重　青木繁作　北澤新太郎　高野省太郎

西山五右衛門　羽田喜助　青木繁作　川上治一　伊藤博次郎

窪田清　山鳥藤三郎　小林清造　大槻久之助　關瀬叡

町田歌吉　市川佐治右左門　中澤吉四郎　小澤孟太郎　樋本新太郎

鵜澤眞吉　菅波藤市　朝日森徹　小澤孟太郎　中曾根佐吉　坂本才右工門

堀內岩市　藤澤豊　德水宗吉　綱島林吉　榮岩榮之助

高橋垣吉　萩原長治　四澤宗平　竹內藤太郎　高橋寸太

埼玉支會　小林嘉行　遠藤才吉　安藤春吳　河合龍三

愛知支會　田中榮治郎　水谷博之助　作清

宮城支會　齋田作治　古藤春助

福井支會　齋田作治　古川芳助　加藤繁　藤島宗太郎　鈴木輝太郎

福岡支會　古川芳助

富田豊次郎

通信委員の囑託

在組青鳳島紙原氏に左の通囑托ぜられたり

大日本蠶絲會通信委員なる囑托す　在組青　鳳島紙原氏

婦人部の設置

本會婦人部は目下各支會に於て設置の準備中なるが今般富貴支會に於ては長岡婦人部なる設き婦人部規程及內規を設け本會に報告せたり。

理事學藝委員の出張

山形支會に於ては去十一月廿二日由形市に第四回蠶繭會を開設したるみ見て、本會より理事吉澤慶正學藝委員今西直次郎の二氏出張せり。

星野理事の出

本會理事星野其氏は義に二度の招す處となり東京市麹町區飯田町の別邸に於て病を療養せられつゝありしが癒石其效なく嘗歌十二月年前三時遂に逝去せ

ある新築の貸席數に堪へざるなり、氏の葬儀は十二月十四日郷里群馬縣多野郡美保根村大字水沼に於て執行せられたるが、本會よりは吉池理事會頭代理として會葬せられ且つ香奠金壹百圓を佛前に備へたり、氏の官僚及本會の吊辭は次號に掲載すべし

本會三重支會品評會

本會三重支會は蠶種、繭、生絲、出殻繭、桑苗、蠶具の六種に就き支會事業の第一着手として品評會を曩冬十一月一日より七日迄三重縣會議事堂に開催し、月の四日其褒賞授與の式を擧ぐるに當り會頭松平男爵には臨席の爲吉池理事及重富書記を伴ひ、都大路は車馬の往來いと繁き　天長の佳節、紫雲靉靆たりし空は暮靄めたる黃昏過ぐる六時半新橋を發せられぬ、車窓遙かに見渡せば房總の山は淡く波に碎けて漁火の飛ぶ影いと早く岩に碎くる灘の泡沫は幽渺のあなたに輝る月の、餘光にほの白く見ゆれども戀しき富士のねは、現つゝの視覺につ定かならず名古屋に着すれば安藤技師出迎へとして共に待たれたれど　關西線の發車に尚二時間余の餘裕あるを以て支那忠支店に憩ひ發車を待つ、今に始めぬ事ながら關西線及參宮線の歩み遲きことよ、辛じて午前八時十分津驛に着すれば、林支會長以下支會役員幷に有志者及多數の會員に迎へられ一同車を連ねて諧潮館に入り小憩の後午前十時式場に宛てたる日本赤十字社三重支部に臨席せり。

褒賞授與式

昨日東の空は頻りに照りて、汗ばむ許りの天氣なりしに、時雨の御座せる津の國は、雨こそ降りたれば、今日の式典如何があらんかと氣遣ひたりしとか、されど朝まだきより頓に晴れ渡りて霜荻のさゝのきいと靜けく、雁の聲落を受けて、伊勢海は殊の外紺碧の色増し津々浦々の霞晴れて、磯近く、げに給もすが／＼しふ夢みそふの菊日和、きれゞ餘興の煙火絶ず轟きて、夢破るは幾所ながら御氣の帯の惑ありき。

午前十一時第一號鐘は響き渡りて授與式の開始を告げぬ、此時既に式場は立錐の餘地なく第二號鐘にて來賓着席し第三號鐘にて松平會頭には林支會長の先導にて臨場、一同座定まるや瀏喨たる君が代の奏樂あり次て林支會長は徐ろに登壇し御親手として先に頒發せられし詔書を拜讀し終て左の式辭を朗讀せり。

會報購讀者
を一時に五人以
上紹介せられた方には左
の會報購讀券を差上げます
(一)五人以上の紹介者は半年分
の會報購讀券
(二)十人以上の紹介者には一
年分の會報購讀券
(三)以上五人を増す毎に半年
分の會報購讀券

式辭

大日本蠶絲會三重支會第一回品評會出品の審査結了を告げ褒賞授與式の式典を擧ぐるに當り會頭閣下親しく臨場して爲に褒賞を授けらる本會の光榮何ものか之に過さん

抑我支會に於ける今次の品評會は實に其初回なるに拘す出品區域二府三十縣出品點數無慮二千零七十四點出品者千六百五十五人の多きに達し大に本會の光彩を添へたり蓋し當業者の參考に資すへきもの極めて大なりと云ふへし而して其列品比較的優良にして改善の途亦見るべきもの尠しとせず是畢竟當業者の努力熱誠の致す所たらずんばあらず惟ふに國運の發展に依り宇内人文日進の大勢に應じ其惠澤に浴すへきは這回の聖詔に宣諭せらるゝ所にして國民は須らく奮勵努力以て聖旨に奉答するの覺悟なからざるべからず而して蠶絲業の振興發展は實に吾國産業充實の爲に最も急務なるものゝ一なり諸子は宜しく會頭閣下の懇篤なる告辭を服膺して深く審査の成績に鑑み益奮勵起して以て斯業の大成を期せらるべし以て式辭とす

明治四十一年十一月四日

大日本蠶絲會三重支會第一回品評會長
三重縣知事正五位勳五等　林　市藏

次に石川審査長は左の申告文を朗讀して褒賞者に褒賞授與の稟請を爲せり

申告文

大日本蠶絲會三重支會第一回品評會審査結了を告げ褒賞授與を稟請するに當れるは小官の光榮とする所なり

出品點數は蠶種三百六十八點繭千百三十九點出殻繭二百〇八點生絲三十八點蠶具三十三點桑苗九十六點にして審査成績の概況を報告すべし

蠶種にありては若干優良品を認めたりと雖比較的色澤不齊調製其宜しきを得ざるもの尠からざりしは遺憾とする所なり

繭にありては色澤一般に良好なるも往々上蔟後の注意を欠き或は殺蛹乾繭及貯繭の不良なるものあるが爲め其美質を損するの遺憾少からず緊緻は比較的不良にして繭層稍薄なるもの多し種類は又春蠶最も多く形狀も稍々齊一に近しと雖も夏秋蠶は頗る雜駁に傾き著しく長形に奔るもの或は大形に過ぎたるものあり絲長は春蠶は稍々少く之に反し秋蠶は比較的多くして其平均春蠶を凌げり秋蠶中人工越冬蠶は出色の觀あれども飼育の日尚淺く一部小數の區域に限ずれば將來進んで研究を要すべき點あらむ

出殻繭に於いても春蠶は稍々整一に近きも秋蠶は形狀色澤緊緻何れも春蠶に比し劣れるのみならず雜駁に過ぎたるの欠點多し

生絲にありては器械生絲は概して色澤手觸佳良なるも座繰製絲は往々不良なるものあり抱合は兩者とも感ずべきもの少し又生絲の整理に於ては絡交の不完全なるもの幾角の固着に過ぎたるもの又餘留編絲の不可なるもの或は折返のものあり器械檢査の結果は一二少數のものを除くの外概して佳良なり其特徴とする所は大類稍々多きと小類の著しく寡少なるは注目すべき點なりとす要するに出品の大部分を占めたる三重縣産出の生絲は外觀内容とも不同の欠點あると同時に一部分極めて優良なる精品あるは因りて以て改良の餘地多き所以を示すに足れり

蠶具類は在來既に定評あるものにして餘り賞揚して普及を計るべき品あらず

桑苗にありては發育概れ良好なるに拘はらず幹根の充實惡しく軟弱缺點あるもの多し

以上審査結果優等六百四十四點を選拔して既に閣下の裁定を經たり玆に謹んで褒賞授與あらんことを稟請す

明治四十一年十一月四日

大日本蠶絲會三重支會第一回品評會審査長
蠶業講習所技師從六位　石川準太郎

仍て松平會頭は林支會長に代り登壇し左記一二等受賞者には銘々に三等受賞者以下へは其總代に賞狀を林支會長は賞品を授與せり

◎壹等賞

△蠶種　群馬縣碓氷郡安中村　田中宇三郎　宮城縣伊具郡丸森町　八巻雄三郎
△繭　福島縣伊達郡掛田町　菅野宇傳治　三重縣安濃郡草生村　若林七郎平
同縣員辨郡稻部村　近藤みすへ　福島縣伊達郡掛田町　假谷與四郎
福島縣伊達郡掛田町　安田甲子太郎　三重縣飯南郡港村　加藤榮次郎
同縣阿山郡山田村　岩野德三郎
△生絲　三重縣阿山郡上野町　東洋製絲株式會社

◎貳等賞

△蠶種　靜岡縣小笠郡佐倉村　清水儀重　福島縣伊達郡伊達崎村　石幡吉四郎　群馬縣碓氷郡板鼻村　清水治郎造　長野縣諏訪郡原村　清水吉太郎　同縣同郡春田村　小泉澤口松　山梨縣東山梨郡上萬力村　代永鶴太郎　長野縣諏訪郡玉川村　宮坂來吉
△繭　福島縣伊達郡伊達崎村　八巻恆次郎　三重縣安濃郡高宮村　横江安次郎　同縣度會郡宮坂村　濱田彌之助　三重縣名賀郡猪田村　吉川岩太郎　同縣員辨郡鋼田村　伊藤彦次郎　福島縣伊達郡伊達崎村　石幡吉右衛門　三重縣員辨郡笠田村　木谷市次郎　同縣阿山郡戸井村　藤田良次郎　同郡中田村　樋村德藏　同北牟婁郡三野瀬村　井谷政次郎　同縣□村伊藤俊介　福島縣伊達郡掛田町　安田甲子太郎　三重縣鈴鹿郡石藥師村　北川繁吉　三重縣飯南郡大石村　梅田密藏　同縣員辨郡丹生川村　山北淺右衛門
△出殻繭　鳥取縣西伯郡天津村　野口鹿重　福島縣安達郡栗野村　池田利七　三重縣鈴鹿郡椿村　丹羽太市郎　同阿山郡桐田村　松山成樹　三重縣一志郡高岡村　高岡製絲株式會社
△蠶具　三重縣一志郡波瀬村　小畑伊之助　畑孝作
△桑苗　三重縣多氣郡津田村　關谷多市　同一志郡小野江村　田中寅吉

蠶種　三等十五名　四等三十五名　褒狀五十五名　繭　三等五十五名　四等百名　褒狀二百四十名　生絲、三等四名　四等四名　褒賞六名　出殻繭　三等六名　四等十五名　褒賞三十五名　蠶具　三等一名　四等二名　褒狀四名　桑苗　三等四名　四等八名　褒狀十五名

右終りて松平會頭に代り林支會長登壇し左記の彰功狀及三重縣主催第九回關西府縣聯合共進會の際本會員にして一二等賞を受領せる者に對し副賞を授與せり

彰功狀

三重縣阿山郡上野町

有限責任生絲販賣信用組合　伊　賀　東　海　社

氏に生絲共同販賣組合を組織し品質の改良に努め伊賀國一圓を團結し販賣擴張の宜しきを得遂に内外市場の聲價を博するに至る其功績稱揚すべし仍て茲に之を表彰す

明治四十一年十一月四日

大日本蠶絲會三重支會長正五位勲五等　林　市　藏

△副賞授賞者　生絲　一等宇治山田市濱會製絲場　三重郡三重製絲場　同二等津市新四製絲株式會社　員辨郡服部富之助　鈴鹿郡丹波太市郎　繭　二等賞河藝郡新井文五郎　員辨郡出口久　飯南郡小林伊兵衛　蠶種　二等安濃郡長谷川藤次郎　飯南郡紗川亮吉の十名にして其文案左の如し

一、農務縣典　　一部　　郡　區　　會　員　姓　名

明治四十一年本會主催の九州關西府縣聯合共進會出品(何々)に對し(何)等賞を受領せられたるは平素斯業改良に思實なるの結果たるを認む仍て本會は商議員會の決議に基き右副賞として茲に銘鑑の賣箱を寄贈し以て功を表彰す

明治四十一年十一月四日

大日本蠶絲會三重支會長正五位勲五等　林　市　藏

右授與し終りて壇を下るや松平會頭は登壇し左の告辭を朗讀せられたり

告　辭

明治四十一年十一月四日大日本蠶絲會三重支會第一回品評會褒賞授與の式典を舉行せらるゝに當り正直來て此盛儀に列するを得たるは深く光榮とする所なり

惟ふに本縣は本州の中部に位し氣候温和各種の物產に富み蠶絲の產額も亦數て全國府縣の後に落ちず殊に伊勢製絲業の如きは夙に機能を以て稱せられ其名聲遠く海外に顯はる然るに之に反し蠶種の製造は發達せず本縣に來たる多からざるものあり故に本縣の蠶絲業をして一大發展を爲さしめ完璧たらしめんと欲せば須らく其蠶種を選定すると同時に其製造を改良し養蠶の普改を圖らざるへからず此等の責は一に會員諸君の雙肩に懸る諸君の責任も亦實に重且大なりと謂ふへし此秋に際し當支會品評會を開設し以て斯業の啓發に資せんとす洵に美擧なりと謂ふへし

抑も當支會は設立以來日尚淺く未だ會員の數未た多からす事業の體備都らさるを憾と爲せり然るに今同品評會を開設し事業振作の端を開かれたり此機を逸せず愈協努力會員の增募を圖りて支會の根據を固定し以て斯業改善發達の淵源と爲し之に由りて國家富強の實を收められんことを一言以て告辭となす

明治四十一年十一月四日

大日本蠶絲會々頭

正三位勲一等男爵　松　平　正　直

次に三重支會各郡委員長總代として岩田安濃郡長の祝詞並に伊藤三重縣製絲同業組合長の祝詞出品人總代井田鶴十郎の答辭ありて零時五十分式全く終りを告げたり。

品評會場　式後林支會長の案内にて縣會議事堂なる陳列場を一覽せり今其光景を記さんに正面には金壇に水盤の跡美しく國母陛下　御製の御歌を記せる額を揭げ入口の右手には農產物の統計を夫れ〳〵圖示して其比較を示し之に次て蠶絲統計を圖示し更に三重蠶業發達史を春は櫻夏は團扇秋は菊冬も大小を描き趣味の內に知了せしめんと期せるは甚付きなりき次て千百三十五點の繭を兩側に各郡區及府縣に更に二百七點の出發繭を之に次て三百五十點の蠶種を陳列し中央に七點の生絲を陳列し入口の左手には三十一點の蠶具類及九十二點の桑苗并に參考品を陳列せり而して蠶病豫防所にては有毒蠶種と無毒蠶種を并列し有毒步合を比較して識別に易からしめんと勉めたるは、參考品として少からず價値あるを思はしめき餘與小野の遺風に倣せたる諷刺人形は蠶具類を以て考案製作し出來映見事にして何より喝采を博せり

當日來會者の重なるものは林三重縣知事高橋安濃津事務官飯田安濃津裁判所長、松田農商務技師石川京都蠶業講習所技師德田生絲檢査所技手縣高等官一同、河藝飯南、多氣の各郡長、津市長谷川農事試驗場長樋口農事講習所長津商業會議所會頭各新聞記者竝に各種團體代表者、三重支會商議員各郡市委員等五百余名なりき

園遊會　津商業會議所は本會三重支會の品評會開催に就き種々便宜を與へられたるは勿論當日は午後二時より偕樂公園に園遊會を開き支會諸員の擧を讚ぜられたり會場を一覽し終り林支會長に導かれて園遊會場に趣けば餘興の婦樂今正に酣にして妙技百出他に見られぬ觀賞なりしが相撲は亦伸々に振ひたるものなりき餘興の終興など試みて宴會場に臨めり。

歡迎會　此日午後六時より大觀亭に於て松平會頭の爲に大歡迎を開き一行招待を受けたり林支會長の挨拶に次て松平會頭は挨拶を兼ね一場の講話を爲して宴に移れり、宴正に闌にして興熟するの時林支會長立ちて松平會頭の萬歲を三唱し衆之に和して祝杯を舉け、次に松平會頭立ちて林支會長の萬歲を祝し衆之に和して舉酒祝杯を傾け洵間種々の律師特の餘興あり一同歡を盡して散會せり

明くれは五日　松平會頭には熊本支會品評會褒賞授與式に臨席すべく林支會長始め其他多數の會員及有志に見送られ午前九時五分發の汽車に投じ同地に向ふ、此日午前九時より赤十字社支部樓上にて松田農商務技師石川京都蠶業講習所技師德田生絲檢査所技手の講話あり午後四時閉會せり總數三百餘名

熊本支會發會式幷に第一回品評會

本州に於る蠶絲業の牛耳を信州が取れると假定したならば九州に於ける信州の地位は熊本である、而して其經營組織等が整頓して蠶商叱咤將に活動の舞臺に入らんと、盛に狼煙を舉げつゝあるは事實である、吾人は過去に於て夙其曙光を認めたる同縣の種蠶共同飼育並に肥後蠶絲共同組及大なる抱負を持して穩健に成立した九州蠶絲信託會社の相互が相關連して、同州蠶絲の誘導者たるべく多大の効果を舉けられんことを願ふて止まぬ、と同時に此間に處して誘導扶掖の任に當る本會熊本支會が新に二千五百餘名の會員を增募して三千七百餘名となり、客年十一月七日に其發會式を舉げ同時に事業の第一步として品評會を開いた、同縣下では之を蠶絲業の新紀元として迎へ勇氣百倍し上下一致して其目的を達すべく決心して立つたのは皆り集ふ人々の面に溢れて居つた

吾等は十一月五日午前九時に津を辭して關西線に投じた、將に開かれんとする大演習の爲に沿道は一入の忙しさを增した風情であつたが、奈良の都の養蠶此地に在る山々の紅葉は今を盛りと、瞬に麗りて、時めける昔しを語り顏、梅田驛に待つこと二時間、午後五時十八分發に乘り換へ、ゆらるゝ程に日は暮れて阪神間に通ふ電車のみ徐に明く見えて、須磨明石の夕なぎも、十三夜の月なればと賴みたりしが曇に暗みて陸頓興乘らざれば思ひ止み眠むるともなく醒むるともなく、尾道糸崎過を過ぐる折は、月中空に澄み渡りたれど男氣だになし岩國に着すれば東の空ほのあかく下關に着せるは午前十一時半、あどけなく關門を渡りて九州鐵道に乘れば林立せる帆檣に次て宏大の煙突甍噴き盛に煙を吐きつゝ鐵鎚の響勇しき枝光を過ぎ遙かに大宰府を拜しつゝ、行き交ひ繁き炭鑛の轌便に織りなされ進めば羽犬塚に日は暮れ初めて有明の滓も闇に分かずなりぬ、大牟田に着すれば安達熊本縣技師及福島九州蠶絲信託株式會社長出迎として茲に在り同乘して上熊本に着せるは六日午後七時四十六分、川路支會長初め役員其他有志者の盛なる出迎を受け月明歷史に名だゝる城跡を過り研屋支店に投せり

發會式幷に褒賞授與式

明くれば七日風少しく寒き空はあれど日麗かに雲霽れ渡りたり午前十時其式場に宛てたる縣會議場に臨めば既に二千五百餘の會集場に滿ちて其開會を待てり、三發の煙火を合圖に着席せり、席定まるや松平會頭は川路支會長に案內せられて臨場し定めの席に着くや、喇叭の樂隊歌を吹奏、終て石川支會副會長舉式の旨を演べ、安達熊本支會幹事長登壇して會務の報告を爲せり次て川路支會長は登壇し左の式辭を朗讀せり

◉式　辭

抑も本縣に於ける蠶業の盛衰は嚮た遠くして文獻の徵すべきもの鮮しと雖其上絲團に列せられたるは嚴せて延喜式に在り爾後興廢の迹歷然たらざるもの久しかりしか寶歷年間に至り藩主細川氏大に斯業を勸獎し降りて維新後更に之を勵東諸州に探り再び獎勵誘掖之が振起に力めたるも氣運尙未だ到らずして遂に衰頽に歸したり然るに輓近漸く機熟し時到り製絲既り當しきに進び機關皆體を備へ日に月に駸々として隆盛の域に進み成蹟大に見るべきものあり於是昨年二月を以て當支會を創設し縣下斯業先進の諸氏と共に專ら會務の擴張に勗めたる結果僅に期月ならずして會員三千有餘の多きを算したるのみならず支會活動の第一步として縣外三種品評會を開催し出陳點數千百十三受賞人數四百三十六に達するの盛況を觀るに至れり

茲に於て本日をトして支會發會式竝褒賞授與式を舉行し本會々頭松平男爵閣下及縉紳各位の發臨を辱うしたるは當支會の光榮として寔に感謝に堪へざる所なり然りと雖今日の現狀は未だ支會豫期の半にたも達せず前途更に一層の奮發と努力とを要するものあり庶幾くは本會の指導と會員の協精とに依り將來に於る支會の進運と斯業の發展を期し以て有終の美を濟さんことを終に茲の支會並品評會關係各位の勞を深謝す

明治四十一年十一月七日
大日本蠶絲會熊本支會長
從四位勳三等　川路利恭

次て石井審査長は左の審査の梗概を朗讀して證書授與の禮辭を爲せり。

◉講　評

今回大日本蠶絲會熊本支會第一回繭外三種品評會開設せらるゝに際し不肖一郎審査委員長の任を辱ひ審査委員諸氏の補佐に由り審査を結了するに至りたるは洵に光榮とする所なり

本回の出品總點は一千百十三點にして內繭八百八十點蠶種一百六十二點桑苗四十九點蠶具二十二點なりとす而して各出品中には比較的優良なるものなきにあらざれども又大に改良を要すべきもの尠しとせず即ち繭に於ては概して繭層厚く纎長に富み且繭節少なく製絲原料として恰適せるが如しと雖も更に一面より之を精査するときは殺蛹其時期を失し乾繭又其方法を誤り甚は貯繭上の智識に至りては殆んど缺くるものゝ如し爲めに固有の色澤を損し甚しきに至りては瘢痕を生じたるを見るは遺憾とする所なり

蠶種に於ては概して産着惡しく形狀色澤共に不等にして之を他府縣生產のものに比し遜色なき能はず殊に調製上に於て甚だしきを認む獨り蠶種頗數に乏しからざると臺紙の一定せるとは稍意を强うするに足れり

桑苗に於ては出品數僅少なりと雖も概して優良にして大に見るべきものあり然れども間々梢條梢長に失して不充實なるもの或は發根不充分なるもの又病蠶害に罹りたるものを見たるは惜むべきなり蠶具に於ては出品數最も少なく且其種類區々たるを以て審査上稍々困難なりしも實用に適するもの極めて少く殊に出品の過半數本縣外に在りしは遺憾のことなりとす

顧ふに本縣は蠶絲業に於ける西四の先進地たると共に出品中見るべきもの乏しからず若し夫れ以上の缺陷に鑑み向後倍々改良に努むるあらば庶幾くは覇を中原に爭ふの日亦遠きにあらざらんか茲に審査成績に基き優良なるものを撰抜して同賞に敘録す希くは褒賞授與あらんことを

大日本蠶絲會熊本支會第一回品評會
審査委員長從六位　石居一郎

依て松平會頭には川路支會長に代りて登壇し左記一二等者には銘々に其他は各種總代に證書を授與し川路支會長は賞品を授與せり。

一等賞

△繭　◎德島縣美馬郡岩倉村外山又三郎◎鹿本郡山東村平八百八◎上益城郡福田村九鬼當次◎阿蘇郡高森町森岡榮次◎菊池郡泗水村大野德

△蠶種　二化性國の錦宮城縣八巻雄三郎、一化性又昔　熊本縣天草郡上津浦村島山安次郎

二等賞

△繭　◎福島縣伊達郡長岡村扶桑蠶業講習所◎菊池郡泗水村齋藤スズ◎鹿本郡晝形村牧田和作◎菊池郡河原村川上ツエ◎飽託郡川上村藤本己太郎◎玉名郡石貫村小山初太郎◎鹿本郡田原村清田勝美◎飽託郡西里村安武官吉◎菊池郡河原村川上フイ◎鹿本郡來民村河崎トマル◎福島縣伊達郡梁川町蠶業講習所◎鹿本郡田原村清田仁作同川東村品山芳太郎◎天草郡本戸村吉田長五郎◎菊池郡花房村笠破虎◎天草牛深町中原ヤス◎上益城郡陣村志水文太郎◎天草郡鬼池村濱口トシ◎菊池郡河原村松野三藏◎下益城郡豐福村木田仁太郎

△蠶種　◎來熟菊池郡泗水村菊水合名會社◎改良又昔島根縣簸川郡知井宮村伊藤壽一郎◎白龍飽託郡大江村合名會社長野製種組◎又昔下益城郡中山村岩本重藏◎又昔天草郡楠浦館田彌作◎又昔玉名郡大野村清野傳◎又昔菊池郡泗水村齋藤長五郎◎又昔上益城高木村中村榮人

△桑苗　◎魯桑飽託郡大江村森楠忠四郎◎同石原八藏

三等賞　苗七十四人、蠶種二十人、桑苗四人、蠶具一人

四等賞　桑苗八人、蠶具二人ありき

右授與し終りて松平會頭には左の告辭を朗讀せり。

◉告　辭

我國貿易品中の巨擘として常に輸出入の均衡を保たしむるものは蠶絲なり故に之が生產の增減は直に國家經濟の消長に關する所大なるの言を俟たず殊に輓近急速なる時勢の推移は國運の隆盛と共に蠶絲業を驅りて寸時も其發展を怠るべからざるに至らしめたり

此時に當り熊本支會は蠶絲業の振興を圖らんが爲め會員を増募して支會の基礎を堅くし以て發會式を行ひ且活動の第一着歩として斯業生産物の品評會を開設し本日を以て褒賞授與の式を擧ぐるに至る正直來りて此席に列し親しく會員諸君に面接するを得るは洵に欣喜に堪へざるなり由來本縣の蠶業は明治初年に際し當局の指導宜しきを得たるを以て其進捗顯る見るべきものありたりと雖も其後十年の變亂の爲め一頓挫を來せり然るに爾來縣當局の施設と當業者の努力と相俟て其發達著しく巍然として九州蠶業界の首位を占め範を隣縣に垂るゝに至れり

今出品物に就き之を觀るに種類の繼続一せる品質の佳良なる稀に見る所にして本縣蠶絲業の爲め慶賀に堪へざる所なり然れども尚之を他の先進地方に比較せば殺蛹に蠶種に將た飼育に尚幾多の改良すべきものあり又會員の數尚多からずして支會は未だ斯業發展の重任を託するに足らざるを感ぜしむ希くは會員諸君更に一層奮勵を加へ大に會員を募集すると共に一面品評會の實績に鑑み採長補短品質を改良し種類を進め縣下蠶業の振興を期し本會の目的に一歩を進め以て大に國富の涵養を圖られんことを聊か希望を述て告辭となす

明治四十一年十一月七日
大日本蠶絲會會頭
正三位勳一等　男爵　松平正直

次に美濃部飽託郡長の祝辭、山田代議士の演說、河田熊本織物組合長、和田鹿兒島支會代表者の祝辭、長野蠶種改良組合代表者の演辭あり佐藤太平氏答辭を朗讀し石川支會副會長終式の旨を宣し式は全く終りを告げたるが當日支會婦人部設置並に活動に關する建議案、熊本縣の主腦を集めたる穗村男爵、古莊嘉門、山田珠一、村上一郎、湯地恒雄諸氏の連署を以て提出せられたるを以て支會は潔く之を採納し、一般會衆に朗讀して其主旨を告知し追て精細攻究の上具案實行することゝし奏樂の内に散會せり。

品評會場

に宛てたるは同縣物産陳列場の一部にして入口玄關には國旗を交叉し寄付きには、野菊白菊園など數寄を凝らして生けられて、金屛風に圍まれ、觀覽者の眼を誘へり右折すれば六間に十間もあらんか大廣間の東北二面には統計を掲げて其生產を示し中に畦取りて八百八十點の繭百六十二點の蠶種四十九點の桑苗廿二點の蠶具を陳列し飾るに萬國々旗を以てせり、扨て見るに繭蠶種の優良なるものありき

當日來會者の重なるものは川路熊本縣知事、石川內務部長、穗村男爵、松村、高森、山田の貴衆兩議員、辛島市長、各郡長、縣會議員、石居東京蠶業講習所技師、田島京都蠶業講習所技手、加納福岡縣技師、玉木長崎縣技師、和田鹿兒島縣技師、辛島大分縣縣林學校教諭、林滋賀縣技手、各新聞記者、各實業團體代表者等にして集まるもの合計三千餘名なりき。

講話會　當日午後一時より縣會議事堂に於て松平會頭、吉池理事、石居審査長田邊審査部長の講話ありて午後四時散會せり。

園遊會と招待會　午後四時より物産館側の樹林に於て立食の饗應あり午後六時より同地精養軒に於て盛大な招待會を開き本會の一行は之に懇招を受けたるは感謝する處である。

八日熊本支會は同縣蠶絲業の爲に盡瘁し物故せられたる諸先發の爲に招魂祭を執行せられた松平會頭は吉池理事重富書記を伴ひて臨席し、而して吉池理事は岡山支會と會務打合の爲、同日午後出發同地に向ひ、松平會頭は熊本醫學專門學校の卒業式に臨み十日午前七時四十分發の急行に投じ川路知事以下の關係當局者並に有志者に送られ同地を發し見送りの爲同乘せられた安達同縣技師と大牟田にて別を告げ十一日午後九時に新橋着にて歸京せられた。

下野支會第九回品評會

大日本蠶絲會下野支會は第九回品評會を客年十月十五日より十九日まで五日間同縣々會議事堂に於て開催し十五日午前十時褒賞授與式を同樓上に擧行せるを以て本會よりは松平會頭信田事務員を随へ午前七時二十五分上野發の急車に投し同地に向ひたり田村副會長は出迎として小山驛より同乘し十時十五分宇都宮に着すれば堀田事務官以下當該關係者並に有志者の出迎を受け直ちに入り暫く休憩の後式場に臨めり午前十一時第一鈴にて出品人及會員着席第二鈴來賓着席するや田村副會長擧式の旨を告げ樋口副會長は左の式辭を中山支會長に代り朗讀せり。

式　辭

大日本蠶絲會下野支會第九回品評會審査結了を告げ茲に本會々頭松平男爵閣下の臨場を得て褒賞授與の式典を擧ぐ抑も本會は明治三十三年第一回繭蠶種品評會を下都賀郡生井村に開きし以來歲を閲する九星霜毎回出品點數多きを加へ殊に今回の如きは前回に比し一躍二倍の増加を見るに至れり其品質亦頗る優良にして著しく進歩の成績を示せるは喜ふ所なり之れ實に斯業の發達に伴ふ現象なりと雖とも抑も又會員諸氏の熱誠なる盡力なくんば焉ぞ此盛況を見るを得ん然

り℃雖とも本縣は氣候風土能く蠶桑に適し餘地頗る多く而も蠶繭の產額之を福島、群馬の隣縣に比すれば未だ及ばさること頗る遠し此の如きは實に遺憾とする所にして本會の品評會を開き優劣相比し長短相較ふるは一意斯業の改善發達に資せんとするに外ならず今や帝國の狀勢は國威の發揚に伴ひ益々國力の充實を企圖するに於て急且つ切なるものあり庶幾は會員諸氏宜しく今回の成績に鑑み深く其改善發達に意を注き以て國家に貢獻する所あらんことを一言以て式辭とす

明治四十一年十月十五日

大日本蠶絲會下野支會長正五位勳四等　中山己代殿

右終るや井上審查長は左の報告文を朗讀し褒賞授與の申請を爲せり

報告

大日本蠶絲會下野支會第九回品評會開催に際し審查委員長の重任を負ひ斯道に熟達せる審查委員諸氏の熱誠なる助力により茲に審查結了を告げ其成績を報告するの光榮を有す

今回の出品は一府十八縣に亘り蠶種百四十七點繭一千五十七點生絲三十二點總計一千二百三十六點にして之れを前回に比すれば其點數二倍以上の增加を來し殊に本縣の出品は其十分の九に達し斯業發展の實證を示せり

蠶種は累年原種用種の增加を來し其品質亦大に改良せられ當業者苦心の蹟歷然たるものありと雖も尙往々殊更に加工して其表面を粉飾するものあるは宜しく改む可き所なりとす、繭は概して優良なるも往々根本的光澤不良なるもの殺蛹乾繭其時機を逸し或は其方法を誤りたる爲め光澤を損し又は解舒を不良ならしめたるもの及び繭健比較的少きものあるは頗る遺憾とする所なり思ふに光澤の不良なるは上簇中飼料換氣の注意を怠りたるによること多し故に將來此點に向て大に注意を要す生絲は絡交頗る良好に再繰中切斷の少なかりしは最も喜ぶ所なり然れども比較的類節多かりしは其原因繭質によるもの多しと雖も煮繭法の不適當なるもの亦其原因たれば將來此點に向て一段の注意を要す審查成績の概要以上の如し今優品四百十四點を選拔し賞を擬す希くは褒賞授與あらんことを

明治四十一年十月十五日

大日本蠶絲會下野支會第九回品評會

審查委員長　井上伍虎

仍て松平會頭は樋口支會副會長に代り登壇し左記一二等賞者には夫れ夫れに三等以下には夫れ〱總代に褒賞を樋口支會副會長は賞品を授與せり。

◉壹等賞

蠶種	下都賀郡生井村	荒井角太郎
春蠶繭	山形縣南村山郡上山町	本木榮次郎
秋蠶繭	下都賀郡生井村	田村清吉
生絲	宇都宮市一條町	岡部弘治

◉貳等賞

蠶種	下都賀郡生井村	澤留元藏
	同	田村清吉
	同	大橋代藏
春蠶繭	群馬縣新田郡澤野村	金谷捨之助
	福島縣伊達郡鑑山町	菅野宇兵衛
	同　梁川町	大竹宇兵衛
	同　伊達崎村	龜岡源四郎
	群馬縣勢多郡南橘村	天海井平
	福島縣安達郡大平村	高橋喜次郎
	兵庫縣氷上郡和田村	田路三枝子
	福島縣伊達郡掛田町	安田甲子太郎
	河内郡本郷村	上野嘉吉
	山形縣東村山郡大寺村	渡邊久兵衛
秋蠶繭	河内郡本郷村	野澤龜吉
	同	吉口由三郎
	下都賀郡穂積村	武井スム
生絲	那須郡親園村	高橋泰
	鹽谷郡熱田村	鈴木製絲所
	那須郡川西町	菊池三之助

三等賞蠶種繭六十四名　生絲六名

四等賞蠶種三十四名、繭二百五十七名、生絲十一名なり右授與し終りて松平會頭には左の告辭を朗讀せり

告辭

大日本蠶絲會下野支會は第九回品評會褒賞授與式を擧ぐるに當り正直乘り此盛典に列し親しく諸君に面接するを得るは誠に欣喜の至に堪へざるなり抑も蠶絲は我國輸出品中の首位を占め斯業の盛衰は直に國家經濟の消長に關すること大なるを以て當業者たるものは寸時も其改良發達を計るを忘るべからざるなり不幸にして客歲以來海外經濟界不振の餘波は煮て絲價の低落を促し當業者意氣消沈殆と極度に達せるも今や漸く絲況挽回の機運に向ひつゝあるを以て早晚回復の時機を覩るは敢て疑はざる所なり然るに一たび沈滯せる人氣は今尙不振の狀を持續するものあるを免れず故に時に際し鼓舞獎勵以て悄沈せる人氣を挽回し斯業發展の餘勢を誘むるは誠に必要の事たるなり下野支會茲に見る所あり品評會を開催し當業者の生產品を一場に集め以て各自奮勵の資と爲す洵に機宜に適したるの措置なりと謂ふべし今出品物に就き之を見るに進步の跡見るべきもの多く確に將來の改良發達に裨益する甚少ならざるべきを信ず然りと雖も實業の改良發達は一時的興奮に依て之を全ふすべきものに非ざれば當業者は能く今回の實蹟に鑑み今日の劣者は範を優者に採りて明日の優者たらんことを期し今日の優者は益其長處を研き以て他日の大成を期せざるべからず顧れば本縣の蠶絲業は遠く延曆年間に其萌芽を發し明治初年より大に進步の傾向を取りしと雖も之を他府縣に比すれば其進捗頗る遲々たるものあるを覺ゆるは極めて遺憾とする所なり當業者諸君宜しく當局の施設と相待ち一層奮勵努力斯業の發達を圖り以て國家の富源を涵養せられんことを望む聊か蕪辭を陳して告辭とす

明治四十一年十月十五日

大日本蠶絲會會頭正三位勳一等男爵　松平正直

次て田村縣農會副會長の祝辭特別會員碓井要作鈴木今四郎齋藤富吉氏より寄せたる祝電を披露し受賞者總代荒井角太郎氏答辭を朗讀して式は全く終りを告げたり式後來會者に折詰を饗し休憩後松平會頭は支會の懇請を容れ來會者の爲に有益なる一場の講話を爲し午後四時五分宇都宮發の汽車に投して歸京せられたり。

島根支會第四回品評會

本會島根支會は第四回品評會を客年十月二十四日より二十七日迄同縣簸川郡平田町に於て開催し二十五日午後三時を以て褒賞授與式を平田劇金株式會社内に於て擧行せり本會よりは松田農商務技師會頭代理とし臨場軈て定刻に至るや第一鈴にて諸員着席第二鈴にて來賓着席し村上事務委員長開式の挨拶を爲し次て藤木副會長は島根支會長に代り左の式辭を朗讀せり

式辭

大日本蠶絲會島根支會繭外二品々評會審查結了を告げ茲に褒賞授與の式を擧ぐ惟ふに蠶絲は本邦重要の物產にして之れが消長は國運の隆替に關す苟も業に蠶業に從ふもの常に研鑽練磨產額の增殖と品質の改良とを計るに努め專心一意國力の充實を期せざるべからず今會場陳列の諸品を通觀するに其點數總て二千七百六十一點受賞七百十七點品評會としては其數敢て少しとせず而して品質に於て特に優越佳良のもの乏しからざるは偏に當業諸子か熱誠奮勵の結果に外ならず然りと雖も熟々本縣蠶業の現況を察するに地廣く人多く蠶桑の業擴張すべきの餘地尠からず諸子は今日の榮に安んずることなく能く審查の成績に鑑み詳かに時勢の要求に稽へ益々奮勵努力各其業の改善發達を圖り以て國力の發展に貢獻せんことを期すべし一言以て式辭とす

明治四十一年十月二十五日

大日本蠶絲會島根支會長代理

副會長從五位勳五等　藤木光安

次て川島審查委員長は左の申告文を朗讀して褒賞授與の申請を爲せり。

申告

大日本蠶絲會島根支會第四回繭外二品々評會開設に際し不肖審查委員長の囑託を受け事務委員長以下諸氏の周到なる用意と審查員諸氏の勵精なる幇助とにより審查終了を告けたるを以て茲に出品成績の概評を報告し合せて褒賞の授與を申請せんとす

抑も本會の出品は繭二千四百九十二點蠶種百五十八點生絲百十一點總數二千七百六十一點にして前回に之れを比すれば出品點數に於て減少せりと雖も品質に於ては大に改良進步の績の著なるものあり之れ當局の獎勵其の宜きを得たると當業者諸氏の熱誠其の業に當りたるの結果に外ならざるを信す今各審查の概評を擧げ當業者諸氏の參考に供せんとす

繭、繭にありては形狀緊緻其宜きを得製絲に好適なるもの少なからずと雖も尙は形狀長きに失し兩端及中央に厚薄不同なるものあり色澤に於ては概して良好なりと雖も往々上簇中の注意を缺き殺蛹の時期を失し乾繭其宜しきを得ざるも

のありて固有の品位を損ぜしものあるは遺憾とする所なり解舒は一般に良好なりしも往々絲量に乏しきものあり其他繭層緩度に於ては可良なるもの少なからざるを認む

秋蠶繭は品種雜駁色澤形狀共に區々にして殺蛹の時期を失したるものあり從て選良と認むるもの少なく爲めに製絲上品位の一定を期する能はざるが如きは大に改良を加ふべきものなり

蠶種、蠶種にありては優良なるものありしも概して整齊なるもの少なく色澤形狀産着調製等未だ充分ならざるものありしは遺憾とする所なり病毒の如き殆んど認むる能はざりしは大に喜ぶべき處にして是れ畢竟豫防法施行其宜しきを得たると當業者諸氏の注意とによるものならん尚後病毒の驅除豫防上一層の留意あらんことを望む

生絲、生絲にありては絲質良好にして色澤亦艶美なるものありと雖も一般に趣味に乏しく往々手繰細綛又は軟弱に失せるものあり纎度は概して不齊なる傾きありて顆節の如き大小共に多し操絲上改良を加ふべきもの少なからず此他絡交再繰共に良好なるを認む玉絲は概して良好なるもの多く就中顆節の少なきと絲條整齊なるものありしは最も見るべき點なりとす

之れを要するに前回に比するに總ての點に於て見るべきもの少なからざりしと雖とも改良を加ふべき餘地尚ほ多し就中桑近夏秋蠶飼育の發達と共に桑葉の採取過多なるにも拘らず桑園の肥培不充分にして蠶兒に充分の豊富なる桑葉を給與する能はざるやの感あるは最も缺點とする所なり當業者諸氏にありては宜しく是等の點に留意し益々斯業の改善發展を企圖すべきなり

右謹んで審査の概況を錄告し褒賞表を添付す庶幾くは優等者に對して褒賞授與あらんことを稟請す

明治四十一年十月二十五日

大日本蠶絲會島根支會聯外二品々評會審査委員長

正六位 川島勝次郎

右終りて左記一二等賞者には銘々に三等賞以下には總代に授賞せり。

壹等賞（金牌）

△春蠶繭 八束郡森山村花本鹿次郎、同郡佐太村安達孫右衛門、簸川郡出東村植田雄太郎、同仁多郡三成村藤田キヨ、同八束郡森山村梅木忠七、同郡同村花本周右衛門、簸川郡平田町新見鶴藏、美濃郡吉田町水口傳市、大原郡幡屋村永瀬健藏

△秋蠶繭 仁多郡布勢村高橋善三郎、同隱岐蠶業講習所東文輔

△生絲 能義郡安來町田中榮三、同上二岡林吉

△春蠶種 美濃郡豊田村綿熊次郎、同宮城縣伊具郡丸森町八巻雄三郎

貳等賞（銀牌）

△春蠶繭 八束郡乃木村大野寅、同郡本庄村青山萬之助、簸川郡直江村川井英一、同郡杵築町板倉利太郎、八束郡森山村岩本兵次郎、同郡佐太村安達房之助、八束郡古志村園山伊三郎、簸川郡出西村青木榮三郎、八束郡森山村岩本シゲ、同郡同村梅木兵市、同郡同村岩本善太郎、美濃郡高城村槙民吉、同郡同村中島次郎右衛門、仁多郡横田村宮田忠太郎、能義郡廣瀬町田中房市、造賀縣申村治助、邇摩郡久利村森山幸三郎、安濃郡鳥井村北山タメ、飯石郡一宮村片寄ヨキ、同郡同村市場滿野、大原郡春殖村門脇儀三郎、美濃郡高城村和田金右衛門、簸川郡江南村立花啓三郎、同郡平田町山口利太郎、同郡同町大谷彌吉、八束郡野波村北川周藏、簸川郡江南村江角勝太郎、同郡東村槙本新一郎、同佐香村佐藤小太郎、八束郡片江村伊田定六、飯石郡一宮村富田長次郎、能義郡廣瀬町藪榮三郎

△秋蠶繭 仁多郡横田村藤原富太郎、八束郡佐太村吉岡金五郎、周吉郡磯村橋本傳六、八束郡波入村門脇雅恒、簸川郡杵築村神門一郎、那賀郡松山村蠶立蠶業習講所、邇摩郡五十猛村林久吉

△生絲 鹿足郡津和野町高須マタ、茨城縣木村勝一郎 仁多郡三成村平野安太郎、同簸川郡杵築町西尾製絲場

△蠶種 簸川郡知井宮村伊藤啓一郎、埼玉縣橋本丹藏、八束郡出雲郷村引野榮之助、長野縣矢ヶ崎三彌 簸川郡杵築町板倉利太郎

外に三等受賞者貳百四十六名、四等受賞者四百六十二名ありたり

右終りて松田農商務技師は左の告辭を代讀せり

告辭

金風颯々として萬象實を收めんとするの秋茲に大日本蠶絲會島根支會は品評會を開催し廣く優良絹品を蒐めて研鑽琢磨の資に供せんとす洵に斯業の爲め慶賀の至に堪へざるなり

本縣の地勢西邊に乘し北陸に面せるに拘らず昔日中絲國に列せられ今又隱然中國蠶絲界の牛耳を執るに至る就中官民一致夙に種類の統一を企圖し漸く其效を奏し能く全國に示したるは本邦蠶絲業の爲め欣躍措く能はざる處なり然と雖とも繭質に尚改良を要するの餘地あり桑園荒廢の傾向なきにしもあらず凡そ蠶絲業上の事一として忽諸に附すべきものなしと雖も桑園の如きは斯業の根底にして之れが培養増殖は一日も忽にすべからざるなり顧ふに當支會の品評會は回を重ぬること茲に四回一回を經る毎に一段の盛況を加へて今回は其出品點數無慮二千七百有餘點に及ぶ此の如きは從來他に多く見ざる處にして本縣當業者の斯業に對する熱心を表現するものと謂ふべし此熱誠を以て將來事に當らば繭質の改良桑園の完成亦容易ならんのみ

顧して茲に一言以て望まんと欲するものあり他なし當支會創設既に久しありと雖とも會員の數未だ多からず斯業改善の機關と爲すに不充分なるは窃かに以て遺憾とする所なり宜しく本縣の良跡と種類統一の成果に鑑み發奮以て之が經營に全力を傾注し蠶絲業の發展を圖り國家の富力増殖に資せられんことを一言蕪辭を陳して告辭となす

明治四十一年十月二十五日

大日本蠶絲會々頭正三位勳一等男爵 松平正直

右に次て來賓の祝辭受賞者總代の答辭ありて午後六時式全く終れり因に今回の出品は一府廿四縣に亘り其點數二千七百六十一點の多きに及べりと而して同月二十六日を以て島根支會商議員會及同支會總集會を同町大林寺に於て開けり商議員會に於ては次回品評會の開否其他數件を議議せしが次年度に於ても引續き該會を開催することに議決せり

總集會は同日午後三時井口幹事長の挨拶を以て開會し第一席に於て川島京都蠶業講習所技師の栽桑に就ての講話あり桑樹の生理より說き起し各種桑園の仕立方に至り實例を引證して指摘せらる、第二席に於て松田農商務技師は世界蠶絲業の狀態よりして本邦斯業の有望なるを說き近に山陰地方に於ける製絲業の現在未來を警告する等何れも地方適切なる講話にして當業者の得る處尠なからず惜い哉日既に黃昏に及ぶを以て井口幹事長は閉會を告げ散會せしは午後六時を過ぎたり而して該品評會は二十四日より二十七日迄四日間の豫定なりしも幸にして好天氣打續きしと他に教育品展覽會古書畫覽會等の同地に開館せらるゝあり縱覽者日々萬を以て數ふるの盛況を極めしを以て三會共に一日を延期し同月二十八日閉會せり

蠶桑雜觀

▲**露國の日本生絲** 本邦生絲の年々露國に輸入せらるゝもの其額を合して一千萬圓以上に達し尚逐年增加の趨勢なれども此内約八割は獨佛二國商人の手に依り獨佛產品として輸入せられ殘額僅に二百萬圓が横濱原商店の手にて直接歐露に輸入せらるゝに過ぎずといふ。尤も日露貿易の發達に伴ひ直接輸出も漸次發達するの見込なきにあらざるも露人の購入者は一般の相場に頓着なく時々煉飛の高價に買ふことあり或は非常の安價にあらざれば買はざることありて殆ど何等の標準なきものゝ如く爲に直接貿易の發達には頗る困難の事情ありといふ。

▲**大浦農相の視察** 大浦農相は押川次官下岡農務局長等を隨へ昔臘七日午前横濱へ赴き生絲檢査所に寄り、一覽の後横濱蠶絲外四品取引所へ行き、生絲取引の模樣を視察し、野澤屋高島屋等の絹物直輸店及サムライ商會の美術店を觀覽して歸京せられたり充分視察して遺憾なく斯業發展の爲に施設せられんことを望む。

▲**折返絲の改製** 上州南部三社の座繰絲は夙に市場に一頭地を抽んで隆々好實行を示しつゝあるに反し、折返絲は兎角其成績宜しからず縱令本年の悲況は特殊の事情に由るとするも折返絲が從來特に座繰絲に一籌を輸するは、要するに平素折返絲賣捌きの機關頗る複雜にして南部座繰の規約よく整ひ步調一齊なるに及ばざること確に一缺點なりとし舊織來折返絲の重なる產地掛田、柳川、保原、桑折等の有志者は盛に同志を勸誘し今春新繭期より座繰製絲法に變更せんと運動するものあるに至り、既に伊達郡の一部にては去九月上州碓氷社と交渉の結果同社支部の名稱の下に座繰製絲を開始する由なり此の成績にして良好ならんに

は福島縣折返絲の前途は一大變革を見るならんといふ。

▲帝國冷藏庫の名古屋支庫

帝國冷藏庫株式會社にては名古屋市笹島町に冷藏庫を新築するに決し、十二月上旬起工式を擧げ本年三月までに落成せしむる見込なりと、而して名古屋冷藏庫は主として蠶種の貯藏保管を目的とし其の他一般の冷藏物品保管並に製氷事業を營む筈にて已に今春愛知縣蠶種檢査所を始め其の他蠶種家より夏秋蠶種を東京冷藏庫に保管實驗したる處、發生も飼育も好結果を得、東京蠶業講習所に於ても其の他各地の蠶種家よりも囑託し孰れも成績佳良を認めたる由なれば、今後蠶種保管上に於ては大に利便を得るならんといふ。

▲新案暖房器

小石川戸崎町御法川工場にて發賣する暖房器は其構造全部堅牢なる鑄鐵製にて裝室の傍に蒸氣室あり外部の水槽より來る水は此に蒸發し、火焔を緩和するが故普通煖爐の如く鐵壁焼爛の虞なきは勿論、炭酸瓦斯を發散せざるが故温熱極めて爽快にして、最も衞生に適し燃料の消費は普通器の三分の一にて足り、不經濟なる蒸汽管裝置と普通煖爐との中間に在りて一新機軸を出したる者あり、普通暖房用の外乾燥器としては勿論蠶室温暖用としても最も便利なるものなりと云ふ。

▲女子養蠶講習會

長野縣にては第二回女子蠶病豫防吏員養成の爲め、本年一月より蠶業講習會を開設する由なるが、右は年齡十七歳以上の女子にして高等科卒業者若しくは之と同等以上の學力を有し一個年以上養蠶の經驗あるものは試 の上入所せしむべといふ、因に講習科目は養蠶法、蠶體生理大意、蠶體病理大意、蠶病消毒法、理化大意、顯微鏡使用法 製絲大意、實檢蠶粒子の檢查、蠶病豫防に關する法規等にして、講習開設の豫防事務所及時日人員等は左の如し。

一月十一日より三月三十日迄小縣(百二十人)、南佐久(二十人)、埴科(六十人)下高井(二十人)、上水内(五十人)

二月二十一日より三月三十一日迄諏訪(四十人)、上伊那(二十人)、下伊那(三十人)、東筑摩(八十人)、南安曇(四十人)、北安曇(二十人)

▲石川縣美能郡に於ける記念的事業

伝に承る所によれば明春櫻花爛漫東風駘蕩微薫を送り黄鳥囀々郊外に囀るの候畏くも皇太子殿下北國に鶴駕を枉げさせ玉ひ親しく民情風光を賞はせらるゝと之れ實に千載一遇の盛事にして縣郡團體は勿論一般人民は如何にして殿下を迎へ奉り赤誠を捧ぐべきかは頗る慎重講究すべき事柄にして今や奉迎準備さては献納品の撰擇に官民擧て寡念怠りなき模樣なるが其設備たるや趣旨を奉戴し浮華を去り國力の向上發展に最も重きを置かざるべからざること素よりなるが能美郡農業技手村田榮文氏よりの通信に依れば石川縣能美郡に於ける記念的事業計畫は經濟の主旨によれる模範的好事業なるを以て其概要を左に錄し大方に紹介せん

北陸鐵道線粟津驛美川驛間兩沿線數百町步の畑地は能美郡に屬し地味素より瘠土たるを免れずと雖とも古來桑茶甘藷大豆蔘等の農作物混植せられ其た亂雜を極めたる古代の遺物たるの觀あり去れは獨桑之れが整理は當路に於て唱導し種々調査研究を持續しつゝあり曾て本會會頭松平男爵此地に出張せられたる砌りも蠶業の發展上桑園の改良増殖に關する警告をせられたることあり、元來能美は縣下の產業地として他に卓越し現郡長亦頗る斯業に熱心にして經驗あり殿下行啓の記念は生產的事業を撰擇せざるべからずとの意見を有し前記畑地整理たる桑園開殖は物產陳列場兼公會堂たる造營物と共に 殿下の行啓記念事業として顯はれ二萬餘圓を投して愈々着手せらるゝことに決したりといふ。

▲蠶業大辭書

昨年十一月漸く完成したる蠶業大辭書は頗る好評を博し、第一版は特に盡きんとするの盛況を呈し、特價販賣を撤回したるは新項廣告欄に見ゆる如くなるが、最初の豫約頁數一千三百頁に對し六百餘頁の增加を見るが如きは從來其例尠きことにして、發兌書院の損害も決して鮮少ならざる由、然れども素と營利を離れて斯業の爲に、敢て本書の刊行に當りたる勸業書院主は他より豫約金追徵の勸告を受けたるも、斷然之を斥けて具管完成に努め以て營に自己が社界に對する責任を明にするのみならず大に國家の爲に貢獻せんことを期せられたるは、現代に珍らしき心懸けと云ふべし、吾人は斯かる書の刊行せられたるを悦ぶと共に斯業關係人は勿論學校團體等は之を座右に供へ朝夕重寶せられんことを勸むるものなり

▲生絲檢查所月報

十一月に於て生絲檢查所の檢查内譯左の如し。

檢查件數

檢查年月	原量	正量	品位	檢減	計
本月	一	四、一九二	六、〇〇二	三	一〇、一九七
前月	一	五、五六三	七、九六三	一	一三、五二六
昨年當月	五	三、〇九九	三、六一三	一	六、七一八
本月累計	一	三八、三一八	四九、二五二	一一	八七、五八一
昨年當月迄累計	五	三五、四四七	三三、九二一	四	六九、三七七

正量檢查

		含水量百分比例	
一檢查件數	四、一九二件		
一總全量	三四五、六八七斤	平均	一一、四七
一總風袋量	六、四三〇斤	最多數	一三、三三八
一總原量	三四〇、二五七斤	最少數	九、〇六
一總無水量	三〇一、二四七斤		
一正量	三三四、三八五斤		

品位檢查

絲別	檢查件數	再繰中切斷數	纎度 平均	纎度 纎太の差	類節 大節	類節 小節	強力及伸度 纎度	強力及伸度 強力	強力及伸度 伸度
		回	デニール	デニール	箇	箇	デニール	グラム	割
細絲器械	三六三	八	一〇、八六	三、八八	一	一八八	一〇、七〇	四〇、八	二、〇
座繰撚造	二	二	一〇、九六	三、二五	一	九五	一〇、九六	四〇、〇	二、〇
座繰折返	一	三六	一二、一八	三、七七	二	二〇〇	一二、一八	三〇、〇	二、〇
中細器械	八〇三	八	一四、〇三	四、二五	三	二三八	一四、〇八	四八、四	二、一三
座繰撚造	三七	八	一五、三三	四、五五	三	一四〇	一五、二四	四八、七	二、一八
座繰折返	三六	二〇	一三、一六	三、九九	二	一七四	一三、一六	四七、七	二、一四
太絲器械	四、三六	三〇	一四、〇七	四、三七	二	三八	一四、二七	五二、八	二、一四
座繰撚造	二二	二〇	一四、八三	四、八七	二	一六六	一四、八三	五五、一	二、一四
座繰折返	七二	二二	一四、三六	六、六六	二	一八二	一四、三六	五〇、四	二、一九
特太器械	一四	四	一九、六五	六、六六	一	一九六	一八、八五	六五、七	二、二九
特太玉絲	二六	七	四〇、六三	四八、六六	—	—	—	—	—

蠶 海 涓 滴

△晩香坡市　民有志大會を開きて加奈陀の日英條約加入を取消し東洋人排斥を主張すべき決議を爲したりとイヤも乍ら彼等の沒人道的行動呆るゝの外なし。

△生絲は本　邦輸出品中年額一億萬圓を超ゆる最も重要の生產品なるに拘らず當業者に資金の融通を圖るべき特殊銀行なきは慥に是れ斯界に於ける一缺陷。

△農商務省　蠶絲銀行に就て調査する處あり本會亦調査に着手す具體的成案の出るも近きにあらんか之が設立は焦眉の急國會議員諸氏にも其調査を望む。

△三重縣飯　南郡蠶種貯藏庫の設計成り松坂公園下手樋附近に百餘坪の地を相し建設工事に着手したりと傳ふ斯者貯藏庫熱各所に起る是注目すべき現象。

△一昨年來　物價たりし印度は昨年の農作物頁好の爲頗る順調に向ふと銀價下落の原因印度の不振に在との說ある今日此報導に接す是も世上の一福音か。

△米國大統　領の撰擧は大勢既に共和黨の勝算に歸したるも株式市場は撰擧の翌日一寸暴騰の趨勢を見せたるのみにて爾後の狀態之に添はずとは不思議。

△乍併米國　の農作物豐收を極むれば漸次同國の經濟界は好況とならん此際蹉跌の現象なきは却て穏健なる回復の步調を示すものならんかとは楓越の談。

△近年栃木　縣各郡を通じて實の詳作漸く盛となり同時に春蠶を中止する事勘からずとは大に攻究すべき問題乍ら養蠶も煙に卷かれたと來てはオト殘念。

△京都蠶業　講習所一年生河野太平去月十七日窃盗放火嫌疑者として捕縛せられしも高塀を飛越えて行方を晦す天網疎にして之を洩しゝか同胞の顏汚し。

△製絲賃料　値下の件より工女一同の激昂となり遂に同盟罷工とまで騷ぎたるは群馬縣前橋市の某精絲社、曲の何れに在るかを問はず喧嘩は全く兩成敗。

△製綱課稅　問題に上田蠶綱組合痛く反對ー檄を松本長野の同業者に傳へ稅務監督局に押掛けたりとは眞乎無暗に課稅は大なる間違當局速に之を徹せよ。

△昨年一月　以降十二月十四日迄の生絲輸出高數量九百九十五萬八千七十九斤價格一億七十四萬三千百有五圓也昨年と大差なき輸出價額に達せん目出度。

文藝

植物異名（承前）

松林花翁

桂、○莪、かなむぐら、やへむぐら、○蓼、としこえくさ、こぞくさ、しやり、芭蕉、綬帽子、○零余子、ぬかご、落花生、○梅、花の兄、匂草、風待草、香ばへ草、香散見草、このはな、はつかくさ、はるつげくさ、かとりくさ、好文木、百花魁、大庾公、羅浮梅、○梅實、落霜紅、賽珊瑚、霜茶、○葎、かなみ草 ○獨活、のだら、つちたら、獨搖草、○卯花、雪見草、はつみくさ、夏雪草、道もとめ草、垣見草、溲疏、○楊盧、牡荊、にんじんぼく、○五架木、八角茶、○求なけら、○茴香、懐香、○瓜尾草、椿桂草、○蘭、しりくさ、○牛膝、ゐのいひ、ゐぬくづち、○莪胡、あまあかな、○鎖牙、こまつなぎ、○凌霄花、紫威、○葉蔦、あぴつる、○野大黄、しぶくさ、ぎしぎし、羊蹄、○野芹、ねびる、山蒜、○海苔、あまのり、むらさきのり、ほしとり、紫菜、○木耳、若海苔、赤菜、○莪蒿、うはぎ、○澤瀉、さじおもだか、剪刀草、○苣薹子、おにひあくさ、材にみるくさ、おほみくさ、○莞、みとこへし、男郎花、○莪草、いぬたで、○胡頽子、もろなり、胡桃、○柞、ゆし、はゝそ、ならのき、○槐杞、ぬみぐすり、○約櫟 くぬぎ、櫟樹、櫪木、○桑、商陸樹、○山梔、榾桃、○胡頽、なはしろぐみ、○九年母、香橙、金柑、乳柑、○榠櫨、きぼけ、○榧 榧、香榧、○櫟、棉楓、諸葛木、○九輪草、寶幢花、○茨菇、地栗、水慈姑、烏芋、○葛、鹿豆、絵無草、○寄蓮、かくもくさ、やまくさ、○萱草、わすれくさ、うれへわするゝ草、○白鮮、ひつじくさ、○苦參、まひりくさ、○女貞、ひめつばき、たつのき、○黒疾、ひきさくら、○柳、風見草、川露草、川そひ草、風無草、根水草、春薄、○杉、つみ、○寄生、ほよ、保夜、○黄蓍、よはぐさ、○赤箭、かみのやからなとくし、○山丹、佐草、○山吹、面影草、かゞみぐさ、棣棠、○薇根子 山たちばな、○薯蕷、ながいも、諸薯、山薯、○益母草、めはじき、茺蔚、○商陸、いなすぎ、○莞蕨、めはじき、○楊梅、なつかり、鶏頂紅、○棠梨、あかりんご、こりんご、鹿梨、○蜀漆、うぐひすのいひね、○松、千代見草、常盤草、初見草、色千代草、延見草、千歲木、騰木草、藥草、翠草、琴ひきぐさ、百草、色無草、めさましぐさ、千枝草、ゆふかげぐさ、醫狀、木中仙、霜下傑、秦大夫、十八公、○輝實、かつねくさ、かつはくさ、あまな、○曼陀羅花、やまなすび、○藻、こも、かつみ、ふしぶ、かすみぐさ、蒋、菰、茭、○松藻、聚藻、○鶏頭、みづそゝぎ、鶏冠花、洗手花、○枳椇、金鉤梨、○罌粟花、米囊花、賽牡丹、錦被花、○花髻草、荷包牡丹、魚兒牡丹、○藤、二季草、松見草、むらさきくさ、さのかたのはなよつな草、紫藤、○木芙蓉、きばす、文官花、○扶桑花、りうきうむくげ、○佛桑槿、香蘇、○蕩蔽、ゑびかつら、○扁蓄草、雪蓮花、賀正蘭、○馬尾香、蘭、○菹、おほふくべ、瓠、なかくび、瓢、ひさご、ひつうたん、○萱、まるすげ、莞、水葱、○菖、救冬、○鹿角菜、つのまた、海蘿、○辛夷、やまあらゝぎ、ひきさくら、したなか、こぶしはじかみ、猪心花、○昆布、ひろめ、ゑびすめ、海布、○牛蒡、きたきす、うまふゞき、牛房、蒡翁菜、○小蓼、鉄、○檜、こぬれ、とふさ、米木、○樋 へみ、○小錦毬、鐘毬、○楯、こうぞ、かみすきくさ、○菅、藺、藜、雉衣、○芍藥、えびすぐすり、やまさけ、ぬみくすり、將離、○枝 ほつき、ほつえ、またふり、永え、○天門冬、くさすきかつら、○歡陽草、四ひらの花、おたしろ草、またふりくさ、○菖蒲、ふき草、○莠 もろはくさ、もろかつら、二葉草、かさしろくさ、庭草、畔見草、かしあふひ、馬蹄辛、○澤蕪、はなあやめ、○朝顔、しのゝめ草、蕣、牽牛花、○葵、よし、なにはぐさ、よかす、玉えくさ、さえれくさ、わすれ草、氷室草、蘆波草、○木通、わけび、通草、あけびかつら、おめかつら、○千歲藟 甘葛、○小豆、さゝげ草、○杏、からもゝ、文杏、紅玉、○剪戎、虎刺、壽庭木、○綿、萬歲樹、構樹、○梧 碧梧、○薊、なにあざみ、薊草、○麻、こなりくさ、○蘭薊、緑蕉、胡蕉、○荒布、海帶、黒菜、○楝、せんだん、雲見草、○鳥草樹、ざくぼ、○榊、はわかの木、玉くしのは、楊桐、○櫻、かさしぐさ、吉野草、尋深草、地藤花草、仙名草、夢見草、○萬玉嘉、さなかつら、五味子、○山歸來、さるとりいばら、○豇豆、大角豆、八角豆、○石榴、いろたま、安石榴、石留、銀匣、時珠、○山櫨、糖毬子、○紫薇、百日紅、○山茶花、茶梅、○皂樹、皂莢、○荏、蘇、くまつゝ、ちきさゝ、儘、○藤蘿、松蘿、○覇王樹、仙人掌、

○蜀椒、ふさはじかみ、なるはじかみ、○菊、かはらよもぎ、からよもぎ、花の弟、ままりくさ、百夜草、星見草、よはひ草、千代見草、こかねくさ、おきなくさ、秋の花、おとめ花、長月花、いなて草、草のあるじ、○桔梗、一重草、ありのひふき、ありのひこと、なかとゝき、あさがほ、○木、やまちもの、○榧、ひとはくさ、○金柑、ひめたちばな、金橘、○金盞花、常正花、○榭、ひさぎ、○菌、茸、蕈、くさひら、たけ、○木耳、耳檽、○瀰葉、ゆつりは、楪、親子草、交讓木、大糞樹、○夕顔、たそかれくさ、すゞけの花、壺盧、なりひさご、瓠瓜、壺蘆葫瓜、○百合、鬪鶏、○虎耳草、虎鬚草、耳草、獅子耳、○鬱破草、猿耳、細辛、○櫻桃、にはざくら、玉帶花、○柚、大橘、○馬蹄草、くまつゞら、○蓮、のこぎりくさ、○茗荷、蘘荷、○涼筋、めうがのこ、○鼠尾草、みつかけくさ、千鳥前、○水葵、さはききやう、浮薔、なぎ、ことなしくさ、○水松、うみまつ、海松、○胡胡、こまぜり、○蜜柑、柑、金囊、水晶毬、○海棋、金線草、○石楠草、さくなむぎ、とびらの木、石楠花、○薔薇、やまうばら、しのくびのき、おもとぐさ、○夏枯草、うるき、○生薑、はじかみ、○忍草、ことなしくさ、○紫苑、おにのしこ草、くさまき、○檳、莠草、○棕櫚、棕櫚 鬘葵、○紫蘭、白芨、○春蘭、報春先、○秋海棠、斷腸花、○麝香草、鈴子香、○忍、海州骨碎補、○胡蝶花、いちはつ、鳶尾、○春菊 蒿菊、○越瓜、あさうり、○椎茸、香蕈、香菌、○松露、麥蕈、地膽、○卜治茸、玉蕈、しろしめじ、○槐あんじゆ、○王孫、つちばり、ぬはりぐさ、○豌豆、のらまめ、○狗尾草、ゑくさ、莠、ゑのこぐさ、○姫百合、光草、山丹、鶴頂、○日陰草、かゞみくさ、狐のかだせ、○睡花、撥子花、はやひとくさ、○白英、碧下紅、ほそび、つくみのいひね、ほろしくさ、一楡、ささくさ、みつば草、よつばくさ、宿草、柏、扁柏、○苗苓、きさのき、○柊、杜谷樹、狗骨、猫頭刺、○未央柳、金絲桃、○蚊子木、古度子、○榧 たうへんぼく、てんじやうしらず、てうらんのき、○綱胴、たうぎり、○美人草、麗春花、ひなけし、はなけし、○姫萩、遠志 茀花、○莧、ひやう、○菱、みずくさ、みつも草、○海鹿草、鹿尾草、羊栖菜、○木蘭、木蓮、もくらに、くろもむじ、○羊躑躅、いはつゝじ、○榿、おみの木、○紅葉、箸葉、鶏田草、いかるがはしば、錦草、色見草、嬰莖草、楓、かへで、槭樹、○桃、仙木、三千代草、御川古草、みちとせぐさ、○藻、河藻草、みづくさ、○木槿、石瓜、丹青樹、○木犀、岩桂 九里香、○綬草、よじりばな、ねじばな、○海雲、海藻、○菊菜、たうきび ○芹、根白草、あく、つまなしくさ、あさら、香芹、○石箒、いはぐすり、すくなひこのくすね、いはのしれ、石吏鬚、○仙翁、剪秋羅、○石菖、ねからみ、飼香草、○菫、狗脊、紫萁、○榊草、かたばみ、酢醤、○菫、一葉草、二葉草、一夜草、二夜草、手向草、紫花地丁、○薄、見たれ草、數波草、露曾草、穂波草、みくさ、穂よりくさ、茫、○菅、みしば、○李花、梅つきゝ花、○杉、いそ木、○捨草 いつまでくさ、ねなしくさ、佛甲草、○西瓜、白虎渇、○杉菜、節々菜、接續草、○蕣 霊香草、

俳句拔萃

蠶業篤志家の井芸有衛門翁國益補助の目的を以て蠶業を勸誘する俳句及び蠶業上の利害得失須知の俳句數百を集められ冊子編纂中のものこたび翁の承諾を得公益の爲摘拔萃する事とはなしぬ

松林花翁

掃立るかひこやぬくみ七十度　信濃 依水
蠶大事たしむ煙草も神にたて　同 同
桑出せよ二眠の頃の蠶砂捨　薩摩 小竹女
霜の夜は火を焚け春の桑畠　同 同

雨寒し火を少し焼けかひこ室　信濃 欧泉
乾き過く飼屋は蠶の縮れけり　同 同
蠶室の濕氣恐ろしシヤ鋼子　同 同
夢の間に眠りて出る夏蠶哉　同 山岸
養ふ業で國の益なす秋蠶かな　同 同
世を安くは此所に蠶飼の主哉　同 柳川
草臥も嬉しや蠶も上げ仕舞　同 きさる
籠の數を算へ晴せ蠶とこそろ哉　同 松曳
二番子は貯金となる蠶哉　同 雪窓
秋蠶飼ふ人や季候の仲へ廊め　同 芳山
夜も晝も分かぬ蠶飼の寢起哉　同 生桑
立願り家蜂太く秋蠶かな　同 甘田
待合へ蠶蛹の眼やおかしこ時　同 笑和
家内中勞れ知らぬや當り蠶　同 如山
夏引の絲依田川の譽れかな　同 嘉鳳
種や桑まして機業の蠶哉　同 同月
當り蠶や朝日夕日の届く家　同

うき勤めせぬ蠶習ふ蠶飼哉　同 曲水
世な捨た人も手傳ふかひこ雨　同 同
蠶室を嫌ず誰事や養の島　同 千尋
世と共に開く野山や桑畠　同 同
蠶業や晉日なしの山家まで　同 白仁
君が代や民安らけき當り蠶　同 花露
是家にもかゝる蠶の機業哉　同 御信
飼つ蠶國家の貧富人次第　同 梅花
利益つゝ得つゝ蠶上手　同 同
初市や願りに賞ふ蠶　同 千尋
年々に國に減らず蠶哉　同 曲水
當て種屋は誠守る蠶哉　同 國窓
飼寶や何時も勤み蠶飼哉　同 生泉
蠶兵の基礎とて勤み蠶飼なり　同 室秋
君に忠親に孝なる蠶飼哉　同 兵悲
御旗にもなれと育つる蠶飼哉　同 幸月
賑しさの頃も賑はす秋蠶かな　同 一花

蠶沙とる度やこしたゝ捨て知れ　同　依水
油斷なる飼屋に學ぶ氣染哉　同　同
二眠蠶飼眠の倍と晴す箔　同　同
かひこ守夜るも晝より乾かせよ　同　同
室温のかひこ冷桑の度數增せ　同　同
恐ろしゝ害ぞ飼に桑の時なれ　同　同
四つ眠り蠶は五十時から　同　同
上簇飼屋温度も蠶ら　同　同
一枚上簇蠶の四百と　同　同
四日目のよふし蠶の明け拂　同　同
掃落す蠶のまぶの六日つ　同　同
買妻は日數出さぬ蠶飼哉　同　同
春より蠶も倍温け眠の倍の箔　同　同
三眠の蠶や二眠の倍の箔　同　同

蠶ろ、臭ひ病ひと知れし蠶沙取　薩摩　小竹女
かひこ室風來る方は明けてよし　同　同
乾温き蠅取て取れ眠りし　同　同
壯健や尾頭上げる二眠蠶　同　同
尾頭の瘦て起ける病む蠶　同　同
飼ひ當ての蠶に直る世にかひこかな　信濃　梅花

夜はいつか明けて嬉しき蠶飼哉　同　甘信
珠まして家にはつれわ蠶飼哉　同　芳山田
智は繭の寶ともなる蠶哉　同　依ナ
良龍の御衣も蠶絲の功哉　同　同
飼ひの飼へ春蠶とらは夏秋蠶　同　同
よき種は飼屋飼よし繭もよし　同　同
不良種斷は飼屋の明りよ哉　同　小竹女
水桑に暑さいたはゝ秋蠶哉　薩摩　同
美しき恐蠶桑葉に開く野邊　同　同
桑植や蠶開し數のあと　同　同
養蠶や寸暇もあらば書を讀めよ　同　同

（蠶の名稱に就て）

幾往昔戀ちらぬ蠶や叉昔　信濃　依水
片寄らぬ蠶中眠の殺哉　同　同
系統の素性正しき蠶哉　同　同
青白の蠶や黄金の色のよき　同　同
飛白蠶やしぼまであらき育ち振り　同　同

青熟に學ぶ蠶の生徒哉　信濃　依水
白龍の蠶井に登りけり　同　同
繭までもかたき蠶い小石丸　同　同
搔しき蠶の光りや錦　同　同
中叉も大叉と化すかひこ哉　同　同
銀白の蠶しろかれ黄金哉　同　同
あかひきの蠶は壯者と呼れけり　同　同
赤熟の蠶旭の光りかな　同　同
白玉の蠶貧家の滋養哉　同　同
國一の夏蠶大和の錦哉　同　同
國富の名は何處迄も夏蠶哉　同　同
千代鶴の夏蠶や操松の色　同　同

懸賞募集

狂句

金坊子選　（第十二回披露）

秀逸

西の年蠶で金なたんと取り　京都　素華
雨が來た桑が足りぬと飯や牛ば　信州　曉風
蠶遣つて借金の當り年　同　同
蠶時鼠居候猫主　山形　面白
切れかゝる縁な綿絲で繋ぎ留め　磐城　覚水
くづ絲が力んで暮の餅を搗き　武藏　花友
戀人の給て種屋は迎へられ　岐阜　青坊
桑摘に旅行な娘ぬる新夫婦　愛知　岩洪
親父より娘殺師な信用し　群馬　蠶洲
大種屋番頭丈は特撰し　大分　鐵之助
先生が今年も蠶病試驗なし　同　同
給桑時亭主の留守が首な出し　茨城　鬼外
蠶時嫁が姑な叱つて居　靜岡　薫る
當り蠶で息子響く流連し　同　同
村蠶の色赤くて數一郎青くなり　常陸　一笑
黑くなり仕遂げた繭は雪の肌　甲府　知月
穴は穴でも風穴は繁富し　尾張　冷霧
老蠶とまけぬ氣のさす蠶時　山梨　英水
蠶粒子は飯の種まで喰ひ盡す　栃木　蠶人
樽飼ひ高ひやうても直は安い　同　同

人

法螺吹かぬ無言な蠶糸を吐き　尾張　冷露

地

上簇祝ひ親父の前も隱し藝　愛知　下川

天

舐た舌今では惚て居る蠶種屋　茨城　鬼外

選者吟

當り蠶此所にも嗚天下あり　金坊子

俚謠

選者高橋鬼川選　（第十二回披露）

秀逸

乙女床しや桑摘む先へ蝶々ちら／＼邪魔をする　丹波　霞泉
御代の榮ゆる印はあれ／＼見やれ初荷の絹の絲　磐城　覚水
一人二人と皆よい娘並ぶや工場も調へて　常陸　檜椎松
遠く離れて絲とるけれど心は離れぬ主のそば　福島　碧水
嫁は桑摘み姑は飼蠶中で亭主は温度とり　常陸　一笑
戀の苦勞を親には云へず蠶疲れと云ふつらさ　滋賀　松甫
無理と知りつゝ嫁いだ村蠶が家内不和合の種となる　同人
主は喇叭が合圖の務め嫁る起るも私や汽笛　三河　古舟
蠶祝の名に事よせて嫁見みされたる恥しさ　大分　鐵之助
私が蠶の拗き摑りは露西亞を負かした日本兵　千葉　榮蠶
私の相棒て蠶が可愛い起す伏するも氣にかゝる　出雲　天虫生
繭の長野で一等賞も主の蠶種の無雙ゆゑ　長野　雲外
細い契りの絲引き工女未な樂しむ名譽章　武藏　花友
銀盛りも工女で暮らす心美くし繭の花　三河　芳由

五彩

國の光りをます絲のつや吹耳に苦心なする工女　羽前　松風
芽は出されど只口あいて起きてくれとお蠶が呼ぶ　豊後　藤軒
絲の切れ目が縁切れならば繼け／＼と精な出す　長野　曉星
釜で煮らるゝ私の身體未は錦で雲の上　同人
座敷殘らず蠶に取られ客をもてなす蠶座敷　愛知　今有
嫁を貰ふて蠶は當る立てゝ畏は六ツの花　千葉　梅居
夫婦仲よく飼ふ蠶の繭は堅い心の小石丸　羽前　空亭
結になる迄切れないやうに堅く結んだ絲の絲　同人
桑の畑にちら／＼床し何所の娘やら襷やら　愛知　下川
初日影さす門松見やれ繭によく似た枝の雲　京都　素華
夫婦仲よく蠶飼て富んで未は生絲の友白髪　愛知　冷露
唄て織り出す絹ハンケチも戀の哭を試ふやら　同人
桑みかけまと不圖目を覺しや乳を搜して坊も泣く　茨城　鬼外
着せて嬉しさ眞綿の羽織娘心のあたゝかさ　愛知　下川

人

灯細めて不在とはにくい裏にや桑ふる影法師　茨城　柴沼鬼外

地

結ふた島田の艶ないけれど出來た繭には艶がある　羽前　寒河江空亭

天

強くかゝるな此の糸しぶき濕りがちなる此袖に　福島　渡邊碧水

選者吟

◉御題「雪中松」

巽の巽操はかうしたものと
雪をかざした姫小松　　鬼川

懸賞募集 一と口噺 （第十二回披露）

秀逸

◎次亞燐　　愛知 天涯生

父『此蠶は細蠶と見えて太とらないよ』子供『それなら次亞燐を呑ましたらよいでせう』

◎夏と冬　　群馬 狂文生

先生『皆さん物があつくなれば伸び冷えれば縮む例を擧げて御覧なさい』一生徒『夏は暑いから日が長く冬は寒いから日が短いのです』

◎萬金膏　　茨城 鬼外

父『蠶を外して首がまはらぬ』子『お父ちやん萬金膏をおはりなさい』

◎健全な心　　岐阜 風月

醫者『精神を丈夫にもたんと早く癒りませんよ』患者『ソンナ事は到底出來ません』醫者『なぜ』患者『でも患心は健身にやどるといひますから』

◎棄蠶　　常陸 檜橙松

甲が乙に向つて『今年も大分あちこちに棄蠶が見えるやうですネー』還省『ナニ棄子とは見逃がすわけにいかね』

◎鐵砲虫　　岐阜 貫道

弟『兄さん桑園、耕耘は危險ですからおよしなさい』兄『なぜ』弟『先生が桑樹には鐵砲虫がかくれて居るとおしやりましたから』

◎絹の着物　　甲府 知月

父『今年は蠶が當つたからお前にも洋服を調へてあげやう』小供『僕は洋服はいやです』父『それでは絹がよい』

人賞

◎鐵道院　　茨城 岩上瀬五郎

甲『鐵道廳は今度鐵道院となつたさうだ』乙『では何をするのだらう』甲『頻々と事故があるから破車の治療をするのさ』

地賞

◎蠶絲會報　　徳島 一勇濟

甲『蠶絲會報は一ヶ年に何回發行するのかね』乙『君の云つてる通り三四會報だから十二回發行するのだよ』

天賞

◎微粒子病　　島根 如電

小供『微粒子病は蠶ばかりの病ではないの』父『なぜ』小供『デモ隣の蠶種屋も微粒子病で倒れたと』

讀者文藝懸賞募集

俳句 （原稿〆切毎月末日遲來沒書）

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題

一月分　新年。海苔。鷽。白魚。福壽草。
二月分　初午。梅。鶯。青饅。春月。
三月分　花。霞。蝶。畑打。蛤。
四月分　蠶。朧月。牡丹。時鳥。初鰹。
五月分　新茶。新樹。鯉幟。花橘。閑古鳥。
六月分　蠶蛾。水鷄。百合。螢。夏月。
七月分　夏蠶。瓜。夏氷。夕立。富士詣。
八月分　月。萩。鮭。露。鴫。
九月分　菊。鴈。霧。稲。鶉。
十月分　紅葉。新蕎麥。小春。柿。水鳥。
十一月分　山茶花。綿入。冬月。貝晴。鉢叩。
十二月分　冬至。寒梅。霰。鉦叩。寒月。

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

▲規則　一題一句つゝ一人五句限り一ヶ月分つゝ端書にて東京新宿北裏一二三松秋花翁宛送らるべし。遲期のものは沒書。應募者は本會々員若くは會員外と記し住地の府縣郡町村番地姓名雅號共明記せらるべし。之れなき者は縦令其選に入るも贈賞せず。

狂句（川柳） （原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に關係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

俚謠（都々逸） （原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に關するものにて女工などに唄はしめても差支なきもの（但し卑猥なるものは沒書とす）

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

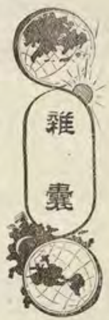
一と口噺 （原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし（但し卑猥なるものは沒書とす）

▲懸賞　天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年分◎人（一人）會報三ヶ月分

注意　狂句、俚謠應募の者は用紙一枚に付き五句限り（一と口噺一人に付三ツ限り）▼用紙は郵便はがきに限る。▲應募は本會々員若くは會員外と記し住地の國郡町番地姓名雅號共明記し大日本蠶絲會文藝係宛にて送らるべし住所氏名無き分は縦令其選に入るも贈與せず



▲天狗連で蠶業が改良される　群馬縣多野郡長國穀三郎氏蝶髯を撫し煙草の烟を輪に吹いて曰く「一體群馬縣殊に私の許には蠶業の天狗連揃て中々鼻息が荒いので私などは下手な講釋なぞしたら最後ギユーツといはされるだらうと思つて何にもいはぬ、其代り君等はよあきうやつて銘々天狗がつてゐるが用心しないとさうやつてゐる間に他に後れをとるよといつてるです」……と之を聞いた傍の老農中山重兵衞氏「ハツゝゝが併し銘々天狗がつてゐる間こそ蠶業も改良されますが天狗がらなくなつた日にやそれこそお仕舞ひです」……と破顔微笑

▲一圓の金を五十錢の直打もない樣に使ふから駄目だ　中山重兵衞氏又曰く「一體蠶業家は一圓の金を五十錢の直打もないやうに使ふから駄目ですよ、御覧なさい米の三俵も荷車へつけて草鞋穿きてウンスラ〳〵と梭押付きて町へ賣りに來る、一日がゝりで賣た揚句が十五六圓にしかならない、そこで晝飯には大福の二ツ三ツも頰張つて燒芋の三百も土産に買つて歸へる、家の子供は饅頭を土産に買つて來れと賴んで置いたので首を長くして待つてゐると、お爺父の風呂敷包から燒芋がコロがり出す、そこでお爺父饅頭は腹によくない、燒芋は體の爲にいいとか何とかいつて誤魔化して仕舞ふ。ところが今度絲を賣りに行く段になると「お父さんドンナのでもいゝからね―洋傘を一本買つて頂戴な」と娘がネダル、いゝとも〳〵と重ね返事て、桑附下駄に洋傘さして羽織の一枚も引掛けて出て行く處で忽ち四十兩五十兩になるので、お爺父先生急に氣が大きくなつて洋傘は甲斐絹の上等を買ひ御茶屋の二階でお酌相手にお晝飯と洒落たすそうです、米を賣つたときには一圓の金を五十錢の直打もないやうにして使つて仕舞ふこれではいくら蠶が當つても迚も百姓の懷ろは肥りつこない……」と、夾お尤もといふ顏つきでフームフムーフム

▲ネー君困るぢやないか　蠶界の奇傑角田實有作氏曰く「此頃の華族や紳士とか紳商とかいはれる連中も困つたものだ、二十六億圓の借金で國民はウン／＼といつてゐる最中ヤレ演劇發融、ソレ園藝研究のと殆ど道樂に寧日なしといふ有樣、コレで戰後の經營で御座るの、農蠶の獎勵で御座るのとネー君困るぢやないか」と頭を叩いて眼を圓くする。

▲亂廻し內閣にも困つた　氏又更に氣焰を吐いて曰く「此頃の內閣は亂廻しのお轉さ、西園寺の皿も落つて柱の管だがコイツ中々廻はすに骨が折れさうだ、落ちない內がお慰みといふ有樣だがどの內閣も／＼皆亂廻し計りのには驚いたれ……」と頭を又叩く。

新刊紹介

製絲の捷徑 第七版 附繭の製絲　松下憲三朗著

本書は玉絲製絲、細絲製造及眞綿の製造に就て詳細に說明し且つ三十有餘の挿圖によりて丁寧に圖解し誰にも判り易きやうにしてある殊に細絲紡績の製法及繭數絲並等に就き概要を記したるなどは用意頗る周到といはればならぬ冬期農閑を利用して之を讀み讀んで更に之を實地に應用せられんことを一般養蠶家に奬めたいのである。

實驗 小野式普桑栽培法 風穴秋蠶飼育法 全　小野元兵衛著

山梨縣に其人ありと知られたる小野元兵衛氏は普桑の栽培に就て一種新式の方法を發明せられ且其栽培に依りて得たる桑葉を蠶兒に與へて優良の繭を獲るとに頗る妙を得られて居る故に氏に就て教を受けんと欲する人も尠くないが此時に當りて本書を世に公にせられたのは洵に喜ばしいことである小野式普桑栽培法に於ては第一章緖論第二章普桑栽培の實歷第三章採苗法第四章栽植法第五章仕立法第六章耕耘第七章施肥第八章收穫法第九章桑園の收支計算法第十章普桑と春蠶飼育に分ち風穴秋蠶飼育法に於ては第一章蠶種第二章護種法第三章掃立第四章普桑第五章除沙方法第六章眠起の取扱第七章上簇第八章飼育標準第九章飼育上の注意第十章蠶病の驅除第十一章晩秋蠶飼育上の注意第十二章蠶室第十三章總結論に分ちて仔細に解釋されてあるから讀者必ず大なる利益を得るであらう。（定價壹圓發行所東京市日本橋區蠣殻町丸山舍）

通俗 栗蟲利用法　明法學士 洞口猷壽著

曩に桐蠶利用法を公にして喝采を博したる著者又此度栗蟲利用法を公にしたのである、何事も利用の世の中、少したりとも利用しうべきものあらば進んで大に利用すべしであるが、栗蟲の如きは到底捨つべきものにあらざることはいつぞやの本誌に掲載した、故榎本子爵の說に徵してみても明かである、著者嘗て明治大學に在りて法律經濟の學を修められたる丈けありて、同じ利用の方法でも其說く處が頗る巧みである、一度本書を繙く者はナールホド利用の道は斯うしたものかと首肯さるゝであらう。（定價三拾錢、發行所東京市京橋區南傳馬町二丁目有鄰館

寄贈書目

明治四十年度事蹟報告	城丹蠶業講習所
明治四十年度事蹟報告	京都蠶業講習所
蠶種製造上の免疫法	埼玉縣立農事試驗場
蠶病豫防事務功程	秋田縣
月報	東京商業會議所
蠶病豫防成蹟	山口縣蠶病豫防事務所
蠶病豫防事務成蹟	愛媛縣蠶病豫防事務所
明治四十年外國貿易概覽	大藏省
園藝家禽家畜製紙産業組合事例	農務局
蠶業成蹟報告書	德島縣蠶種同業組合
蠶病豫防事蹟	千葉縣
四十年度業務報告	福島縣工業試驗場
報德のしほり	服部昌松氏
桃、蘋果、柑橘の栽培	智利硝石及會日本本部
蠶病豫防事務成蹟報告	北海道蠶病豫防事務所
夏秋蠶用桑樹栽培法	池田榮太郎氏
秋蠶全書	首木伊之助氏
稅蠶便覽	大島和輔氏
夏秋蠶之大勢	鳥羽久晉氏
農商務省商品陳列館報告	農商務省商工局
京都府天田郡蠶業調査書	京都府天田郡蠶絲同業組合
蠶絲同業組合業務成蹟報告	鹿兒島縣生絲同業組合

農作物病蟲害豫要覽		東京府農會
東京府農會一覽		東京府農會
蠶病豫防成績		埼玉縣內務部
愛媛縣農商工統計便覽		愛媛縣內務部
桑園增設計畫概要及其成績		秋田縣
蠶病豫防事務成績		山形縣
一府十縣聯合共進會紀念寫眞帖		長野縣協贊會
埼玉縣案內		埼玉縣
東京商業會議所統計年報		東京商業會議所
波多野鶴製絲教育論		紳榮株式會社
實驗 小野式普桑栽培法 風穴秋蠶飼育法		小野元兵衛氏
蠶病豫防事務成績報告		群馬縣內務部
農業新聞		農業新聞社
蠶病豫防事務成績		長野縣
新時代	第二—三號	新時代社
蠶事報告	第三四號	東京蠶業講習所
蠶業講義錄	第八—九—一〇號	大日本蠶業講習會
工業之大日本	第九—一〇—一一號	工業之日本社
農家之母	第三—四號	農家之母社
四ヶ原女子蠶友會報	第八號	四ヶ原蠶友會
蠶絲器械新報	第一號	蠶絲業器械新報社
農家副業案內	第一二號	博文館
會報	第一號	京都府農林會
日本蠶友會報	第四二號	日本蠶友會
阿波蠶絲時報	第一四號	德島縣蠶絲會
蠶事報告	第一七號	京都蠶業講習所
九州之實業	第一號	九州之實業社
福神	第一ノ二號	福神舍
通商彙纂	自四八至六五 外務省通商局	
月報	第一四三—一四五號	橫濱商業會議所
實業之世界	第五—七號	三田商業研究會
大日本山林會報	第三一〇—三一二號	大日本山林會
農業教育	第八七—八九號	農業教育研究會
日本農業雜誌	第九—一一號	讀賣新聞社
新民	第七—九號	報德會
工業化學雜誌	第一二七—一二九號	工業化學會
學士會月報	第二四七—二四九號	學士會
大日本農會報	第三二七—三二九號	大日本農會
大日本私立衞生會雜誌	第三〇五—三〇七號	大日本私立衞生會
農業世界	第一〇—一三號	博文館
農事雜報	第一二五—一二六號	農事雜報社
氣象集誌	第九—一一號	大日本氣象學會
北越之蠶業	第七四—七五號	新潟支會
大農團	第二二八—二三〇號	帝國農家一致協會
京都府農會報	第一九四—一九六號	京都府農會
藝備農報	第一五九—一六一號	廣島縣農會
埼玉農報	第四二—四四號	埼玉農報社
新潟縣農會報	第五七—五九號	新潟縣農會
蠶業新報	第一八六—一八八號	蠶業新報社
岐阜縣農會報	第一九—一一號	岐阜縣農會
島根縣農會報	第一二五—一二七號	島根縣農會
北海道農會報	第九三—九五號	北海道農會
圖書月報	第一二—一三號	東京書籍商組合事務所
中央農事報	第一〇二—一〇四號	全國農事會
會報	第二二七號	帝國農家一致協會
動物學雜誌	第二三九—二四一號	東京動物學會
染織時報	第二六三—二六五號	大日本織物協會
會報	第三四—三六號	長野縣蠶種同業組合聯合會
何鹿實業月報	第一一七—一一八號	何鹿郡蠶業會
兵庫縣蠶業會報	第九一—九二號	兵庫縣蠶業會
生絲月報	九—一一月	原合名會社
中外商業新報	九—一一月	商況社
橫濱貿易月表	九—一〇月	橫濱稅關
關西之蠶業	第四一—四二號	關西蠶業社
統計集誌	第三三〇—三三二號	東京統計協會
山梨縣蠶桑時報	第四六號	山梨蠶友會
愛國婦人	自一六〇至一六五	愛國婦人會
植物學雜誌	第二六〇—二六二號	東京植物學會
衣笠蠶友會報	第二五號	衣笠蠶友會
武德誌	第八—一〇號	武德會
城丹蠶絲時報	第三三—三五號	城丹蠶絲時報社
昆蟲學雜誌	第二ノ八號	昆蟲學會

北海道蠶絲會報	第五七—五九號	北海道蠶絲會
農學會々報	第八三號	農學會
土佐蠶絲時報	第七一—七三號	土佐蠶絲時報社
山口縣農會報	第五九—六一號	山口縣農會
日本之家禽	第九—一一號	日本家禽協會
實業之埼玉	第三ノ八號	實業之埼玉社
產業組合	第三五—三七號	大日本產業組合中央會
扶桑	第七三—七五號	扶桑館
蠶繭農事報	第二一—二三號	蠶繭農友會
福岡縣農會報	第一一三—一一五號	福岡縣農會
工業雜誌	第三九五—四〇〇號	工業雜誌社
千葉縣蠶絲時報	第二三號	千葉縣蠶絲同志會
岩手縣農會報	第六八號	岩手縣農會

Statistique de la Production de la Soie en France et à l'étranger

Bollettino di Sericoltura No 40–44.

Pubblicata a cura dell' Associazione dell' Industria e del commercio delle sete in Italia

Bulletin des soies & des soieries No. 1630–1643

Revue hebdomadaire Lyonnaise indépendante

人事彙報

▲鈴木貞太郎氏 本會新潟支會幹事長にして新潟縣技師なる同氏は今回高等官五等に陞敍せられたり

▲今井保一郎氏 本會山梨支會幹事長にして山梨縣技師なる同氏は今回高等官五等に陞敍せれたり

▲阪本釤之助氏 本會鹿兒島支會長にして鹿兒島縣知事なる同氏は今回二級俸下賜せられたり

▲森正隆氏 本會秋田支會長にして秋田縣知事なる同氏は今回二級俸下賜せられたり

▲川島純幹氏 本會滋賀支會長にして滋賀縣知事なる同氏は今回二級俸下賜せられたり

▲笠井信一氏 本會岩手縣支會長にして岩手縣知事なる同氏は今回二級俸下賜せられたり

▲伊澤多喜男氏 本會和歌山地方委員長にして和歌山縣知事なる同氏は今回二級俸下賜せられたり

▲堀内秀太郎氏 本會德島地方委員副長にして德島縣事務官なる同氏は今回一級俸下賜せられたり

▲川口彥次氏 本會大分支會副會長にして大分縣事務官なる同氏は今回一級俸下賜せられたり

▲横田長太郎氏 本會特別會員にして東京蠶業講習所技手なる同氏は今回蠶業講習所技師に任し高等官七等に敍し九級俸下賜せられ東京蠶業講習所在勤を命ぜられたり

▲荒木武雄氏 本會特別會員にして京都蠶業講習所技手なる同氏は今回蠶業講習所技師に任し高等官七等に敍し十一級俸下賜せられ京都蠶業講習所兼東京蠶業講習所勤を命ぜられたり

▲菅正懿氏 本會信濃支會幹事長にして長野縣技師なる同氏は今回靜岡縣技師に任し高等官三等に敍し年俸三十圓下賜せられたり

▲稻垣乙丙氏 本會學務委員にして東京帝國大學農科大學教授なる稻垣博士は今回從五位に敍せられたり

▲鈴木梅太郎氏 本會學務委員にして農科大學教授なる鈴木博士は今回從六位に敍せられたり

▲外山龜太郎氏 本會學務委員にして東京帝國大學農科大學助教授なる外山博士は今回正七位に敍せられたり

▲土居伊太郎氏 本會通常會員にして滋賀縣技師なる同氏は今回正七位に敍せられたり

▲池田常藏氏 公衆の利益を興せし廉を以て賞勳局に於て去月二十二日藍綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し

福島縣伊達郡粟野村 池田常藏

資性溫厚夙に心力を養蠶製種の事業に竭し明治九年選まれて蠶種會議所議員となり尋て委員に舉げられ輸出蠶種の檢査に從ひ其粗製濫造の弊を憂ふるや同志を糾合して一社を組織し推されて社長となり專ら蠶種の精選に努む養蠶期に至れは特に教師を各地に遣はし又自ら各種の試驗所に就て研鑽を積み其習得したる所は必ず之を印刷し無代價にて當業者に頒ち或は顯微鏡講習所を設け或は各地に講話して當業者の啓發に努力し殊に微粒子病の豫防は原種を板製に改むるに如かさるの說を唱導し率先之を實行すると共に剌害多年溫熱消毒器を摘出して稗益を當業者に與へ其他桑樹萎縮病の原因を研究し蠶蛆驅除驅害豫防等に焦心する等孜々として斯業の發達に盡瘁すること玆に三十有餘年洵に公衆の利益を興し成績顯著なりとす依て明治十五年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲山口太三郎氏 實業に精勵せし廉を以て賞勳局に於て十一月十三日綠綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し

群馬縣北甘樂郡吉田村 山口大三郎

資性溫厚夙に志を製絲の事業に專にし地方生絲濫造の宿弊を一掃せんとするには先づ品位を齊一にし而して共同販賣するに如かざるを覺り爲々之を同業者に勸說せり明治十七年北甘樂製絲會社の南蛇井組長に選まれ尋て副社長に舉げられ補翼の任を竭し會計する所尠からず同社の甘樂社と改稱するや推れて社長と爲り偶經濟界の不振社業の艱澀に際し克く糾紛を除き熱苦勵精附來年所を閲して社運益隆盛を致し分工場を埼玉縣下に設け組合區域を各地に擴張し又社員を米國に派遣し需要の實況を査覈し或は技師の練習を爲さしめ今や一箇年の產額四萬四千餘貫價格二百九十萬圓に垂んとし一意斯業の發達に力め聲價を海外に揚ぐるに至る洵に實業に精勵し衆民の模範たるものとす依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲佐藤量平氏 同上の故を以て賞勳局より十一月十三日綠綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し

群馬縣北甘樂郡磐戶村 佐藤量平

資性堅忍夙に意を製絲事業に專にし座繰製絲の粗濫を憂ひ揚返工場を設て其弊を矯め共同販賣の方法を設けて利益の增進を圖り明治二十六年下仁田製絲會社の興るや之が社長と爲り鋭意力を改良に盡し產額年に增加し明治四十年の如き製絲二萬八千貫餘價格百八十萬圓餘に達せり同年米國に渡航視察し歸朝後專ら需要地の好尙に適するの方法を研究し爲めに大に聲價を海外に揚ぐるに至る加之曾て村長の職に就き自治の發達に力め教育を奬め產業を誘掖したる等の事蹟も亦尠からず洵に實業に勵精し衆民の模範たるものとす依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲齋藤正次郎氏 同上の故を以て賞勳局より十一月十三日綠綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し

群馬縣北甘樂郡磐戶村 齋藤正次郎

資性溫厚夙に地方製絲の粗惡にして商況振はす價格低廉なるを歎し同業者を勸論し自ら先じて揚返工場を設け百方奔走共同販賣の端緖を開き尋て各揚返工場を連結して北甘樂製絲會社を組織し選ばれて社長となり絲品の弊害及び共同販賣の實蹟を舉げ在職七年屢々物議の起るも居中調停感情を融和し遂に克く基礎の確立を見るに至れり後ち下仁田精絲會社の興るや副社長と爲り克く補佐の任を盡し社務の整理に事業の改善に鞠躬盡瘁し殆と家を顧みず社員皆其德に服し社業頗る隆盛の域に進し聲價を海外に輝揚ならしむ洵に實業に精勵し衆民の模範とす依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲上坂忠七郎氏 公衆の利益を興せし廉を以て本月六日藍綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し

福井縣今立郡服間村勳六等 上坂忠七郎

資性溫厚夙に父祖の遺業を繼承し舊水戶藩内に栽植したる漆樹の漸次減少するを憂ひ適地を撰擇して之が補植を爲し且先年來粗惡漆液の輸入增加し從て漆器の聲價著しく失墜し爲には我國同業者の困憊甚しきを嘆し輸入品防遏の爲め之が栽植の勸獎遊說に努め傍ら漆搔職工の養成保護に盡力し又荒蕪地開墾の目的を以て桑及養蠶を奬勵し成績見るべきものあり又居村紛爭の間に植林を爲し冬期副業として木挽職を勸め村民之れに因り生計を助くる事尠からず加之農事試作場を設けて米麥作の改良小作人の奬勵に保護品害豫防等の方法を講じ組合を設けて貯金を奬勵し自費を以て教師を聘し近鄰の子弟に教授し河川を浚渫道路を修して運輸交通に便益を與へ或は糾紛を解きて村治を融和し村長を授けて傳染病隔離舍若くは小學校舍の建築に斡旋盡力したる等洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲早川政行氏 本會石川支會商議員なりし同氏には去十一月二十五日卒逝せられたり痛歎の至りに堪へざるなり

次號目次

本號の發表迄に決定したる次號の目次は左の如し

●吾社は如何にして製品を統一するか　下仁田試験場　佐藤量平

●繭質の悪くなつた原因　高山蚕糸業学校教諭　小林董二

●困つた問題は同種異名と同名異種　大日本蠶絲會評議員　角田喜代作

●桑園の改良は如何にして爲すべきか　群馬縣桑園　中山重兵衛

●品種改良と卵形又昔　埼玉縣蚕業試驗場技手　水野辰五郎

●予が六十日間日記の筋道　大日本蠶絲會評議員　八田達也

●蠶絲業者の安息日　大日本蠶絲會理事　吉地慶正

●蠶の翅の研究　東京蠶絲講習所技手　高橋伊勢次郎

●四十一年蠶業界の回顧　門前弘多

●予の觀たる印度の蠶絲業　農學士　須田金之助

大日本蠶絲會報廣告料

特等		並等	
回數	一頁半頁	一頁半頁	四分ノ一頁
一回乃至二回（一回ニ付）	十五圓	十二圓	四圓
八圓	五十錢	五圓	三圓五十錢
三回乃至六回（一回ニ付）	十二圓	七圓	四圓
七圓	四圓	十圓	六圓
七回以上（一回ニ付）	十圓	六圓	五十錢
六圓	三圓五十錢	八圓	五圓
四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク			

●會員ハ右料金ノ二割引トス●特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絕ス●料金ハ前金ニアラサレハ掲載セス●一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

●本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十二年一月一日印刷發行

編輯發行人　東京市神田區錦町三丁目十八番地　小池市松

印刷人　東京市神田区美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區錦町三丁目十八番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

禁轉載

AVI.

1°. Le bulletin de l'Associations ricicole du Japon est l'organe des membres de cette societé qui compte actuellement plus de 30,200 membres.

2°. Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous les faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3°. Dans ce rapport sera inscrit dans les langues européennes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4°. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par les interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Sériciicole du Japon.

NOTICE.

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 30.200

2) This association has for its object the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

4) The association will collect and publish articles and studies foreigner of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultural Association of Japan.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Soie. Silk. Arrivée. Arrival.	Soie. Silk. Vendue. Sold.	Soie. Silk. Renvoyée. Sent back	Soie. Silk. Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filaturs.	Maximum du prix. Highest prices. Prix. Prices.
	Picols.	*Picols.*	*Picols.*	*Picols.*		*Yen*
1	—	—	30	—	——	—
2	1.326	654	59	—	Sanyoseishei.	1,020
3	—	—	—	—	——	—
4	1.213	531	60	—	Katakuragumi.	980
5	644	401	21	2.617	Kanrasha.	1.010
6	440	470	22	—	Nankosha.	980
7	511	626	8	538	Nansosha.	1.020
8	—	—	—	—	——	—
9	796	613	25	—	Ushuisha.	990
10	484	695	38	504	Kanrasha.	996
11	429	284	10	1.119	Kaizuseishi.	960
12	737	578	15	—	Kōnansha.	985
13	573	296	7	—	Tōshinyosha.	980
14	585	179	14	1.142	Yamamuraseshi.	985
15	—	—	—	—	——	—
16	884	280	4	1.067	Kōseisha	1.050
17	465	771	12	—	Yajimagumi.	1.055
18	467	527	8	—	Kōnansha.	1.020
19	417	553	42	—	Ushuisha.	1.010
20	557	1.102	17	73	Yajimagumi.	1.065
21	551	826	59	974	Tenrugawasha.	1.050
22	—	—	—	—	——	—
23	—	—	—	—	——	—
24	1.266	4 5	10	—	Zaguriseishi.	1,065
25	628	494	2	9.436	Yanatsuseishi.	1,000
26	549	216	29	—	Hinamikyodosha	1.000
27	628	393	7	—	hatsusekan.	1,000
28	482	403	13	—	Gunsansha.	1,000
29	—	—	—	—	——	—
30	630	413	19	—	Hakureisha.	1,010
31	—	—	—	—	——	—
Total	15.289	11.601	551	11.235	——	—

1 *yen* vaut environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Novembre 1908.)

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(November 1908.)

	Report. Brought over.	Arrivé. Arrival.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back	Arrivé. Brought forward.
	Picul.	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*
Filature. Filature.	14.979	12.470	9.256	—	368	17.814
Zaguri. Reseul.	4.073	2.005	1.738	—	92	4.249
Kakeda. Orikoyeshi.	1.741	775	699	—	36	1.781
Autres. Other.	83	37	—	—	6	115
Total.	20.878	13.536	11.692	11.235	551	2.457
1907.	18.393	12.644	6.483	3.584	1.542	25.035

2. The red worm thus produced remains constant from its first appearance. It is recessive toward the ordinary black worms and segregates from the latter according to the Mendelian law of heredity.

3. Sometimes it happens that the segregation of both characters is not complete, as in the case observed by Correns[1] in plants.

4. In the experiment described in a previous paper[2] we obtained a new form quite different form the the parents. We may mention.
another case, in which "blue worms" and brindled worms or "*Kasuri*" arose spontaneously from the normal worms. All of them, however, were results of crossing and are quite constant from their first appearance.

Any instance of pure mutation not yet observed. Hence we are now inclined to believe that the sporting which are commonly met with in the silk-worm is mostly due to hybridization, that is to say, hybrid-mutation as Lidfo ss* says, and not mutation in the sense of De Vries.

1. Correns: Scheinbare Ausnahmen ect. Ber. d. d. Bot. Gesell. Bd. 20.
2. Toyama: Studies on the hybridology of insects. 1. Bull. of Agric. coll. vol. 7. 1906.

* B. Lidforss-Studier öfver artbildningen etc. 1905.

MARCHE DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA

Citons sommairement la situation de notre marché au mois de novembre dernier.

Contrairement à la situation de la fin du mois précédent, notre marché a été très calme pendant les dix premiers jours et les prix n'ont fait que baisser.

Les demandes nouvelles étant arrivées, pendant la dizaine suivante, tant de l'Europe que de l'autre côté du Pacifique, notre marché a présenté soudainement son activité et les prix ont augmenté. Mais entrant dans la dernière dizaine, presque toutes les maisons hésitant à acheter les articles, l'acalmie vient de régner de nouveau sur la place. Toutefois, l'arrivage de marchandises de ce mois monte à 27,177 1/2 balles et présente une augmentation de 4,698 balles comparativement à la même période de l'an passé, et le nombre des balles traitées montant à 8,829, présente, lui aussi, une augmentation de 2,829 balles.

Voici d'ailleurs les tableaux indiquant le mouvement de la soie durant la même période.

RAWSILK MARKET.

THE YOKOHAMA RAWSILK MARKET.

We summarize below the general condition of the Yokohama rawsilk market during the month of November.

In a marked contrast to the close of the preceding month, a profound calm at first reigned on the market, and the prices showed a decidedly downward tendency. In the middle of the month, the arrival of new orders from Europe and America greatly dispelled this stagnancy. So that the business became active and brisk, and the quotations were consequently on the rise. But in the end of the month, the foreign firms came to assume an attitude of reserve, so that this hopeful condition proved only momentary. Generally speaking, however, this month was far better than the corresponding month of last year: the quantities of the silks put on the market totalled 27,177 1/2 bales, an increase of 4,698 bales over those of the same period of last year, while the volume of the commodities actually changed hand was 8,829 bales, also showing an increase of 2,829 bales.

The following tables show the movements of the silks during the relative period:—

No. of mating	Oviposition	Hatching	Kind of worms hatched
10	27/9/06	24/4/07	Simply black worms, no red.
11	30/7/06	23/4/07	"
13	17/9/06	"	"
14	"	"	"
15	"	"	"
17	30/7/06	"	"
♀ black. ♂ red 18	"	"	"
♀ black. ♂ red 12	"	"	"
♀ black. ♂ red 16	"	"	"

Every mating yielded only black worms. They mounted on 21–22nd May 1907 and the months emerged 6–12th, June 1907. From these moths 231 matings were obtained. All the matings produced red ank black worms nearly in the proportion of one red to three blacks, except one mating which yielded only black worms. From them, we selected at random 89 matings and counted the respective number of red and black worms in each mating. The total number, as Table 10 shows, was 32,271, of which 8,173 (25.32%) were red and 24,098 black. In single cases, however, the proportion of red and black worms varied from 19.79 : 80.21% to 33.33 66.66%.

TABLE 10.

No.	Number of matings.	Red worms	Black worms	Total
G 1	25 "	2,181	6,747	8,928.
G 2	23 "	1,674	4,684	6,358.
E 1	20 "	2,174	6,654	8,828.
E 3	89 "	2,144	6,013	8,157.
Grand total		8,173	24,098	32,271.
mandelian Expectation		8,068	24,203	32,271.

Now we see clearly that the character "red" is recessive towards "black," a character of differant lineage, according to Mendel's law of heredity.

Résumé of the results obtained on the inheritance of the red and black characters:

♀ Univoltine black worms × ♂ Tetravoltine black worms.

The first generation — All black worms (18 matings).
627 matings.

The second generation — 490 matings → Uniform blacks; 137 matings (Mixed offspring)

The third generation — Only blacks. Discontinued.
110 matings (only blacks.) 27 matings.
Red (2103)+ 65 matings → All red except one mating in which Red (187)+ 16 matings → All reds.
Black (194) 16 matings → Red (881)+ Black (2529).
Black (7162) 22 matings → Red (1363)+ Black (4634). discontinued.

The fourth generation — Black only.
40 mating → All red

Black-crossing.

(1) Hybrid black worms × red. (reciprocal crosses)
The results. Red worms 480 + black worms 481.

2) Pure black worms × red.
The first generation — All black worms (15 matings).
The second generation — 231 matings
Red (8,173) + black (24,098).

Summary.

1. The sport "red worms" may arised from the normal black breed by crossing which apparently bring about the segregation of the character.

B. Mating between black worms.

No. of egg-batches	Date of hatching	Date of hatching	Kind of worms hatched		Total	
			Red	Black		
1	10–23/9/06	7/10/06 et 24/4/07	134 (28.68%)	334	468	
2*	"	"	33	128	161	The rest eggs died.
3			64 (29.35%)	154	218	
4*			11	40	51	The rest died.
5			85 (27.97%)	226	311	
6			70 (28%)	180	250	
7			81 (25.87%)	232	313	
8, 9, 10			208 (25.08%)	622	830	
11*			36	125	161	The rest died.
12			5 (13.88%)	31	36	this is the total
13			63 (22.5%)	217	280	
14			102 (26.7%)	280	382	
15*			39	41	80	The rest died.
16			27 (23.47%)	88	115	
Total			839	2,364	3,203	
Mendelian expectation			800	2,402		
Deviation			38			

* Excluding those marked with an Asterisk.

Now we see that every mating produced red and black worms nearly in the proportion of one red to three blacks and thus the supposition in the previous generetion was proved to be true.

Back-Crossing.

1. Hybrid black × red, or DR × R.

♀ Dark worms from 3 of the fourth generation.
♂ Red worms from 1 of the fourth generation.

Their results are given in Table 7.

TABLE 7.

No.	Oviposition	Hatching	Kind of worms hatched		Total
			Red	Black	
1	17/9/06	7–8/10/06	190	198	388
2			165	146	311
3			125	137	262
Total			480	481	961

As the Mendelian principle demands, every mating gave red and black worms in the proportion of 1 red to 1 black.

2. Pure black × pure red, or D × R.

♀ Red worms from 1 of the last generation.
♂ Pure black worms (a cross between tetravoltine race and Theophila mandarina)

♀ Pure black worms, as above mentioned.
♂ Red worms, as above mentioned.

The results are given in Table 9.

TABLE 9.

No. of mating		Oviposition	Hatching	Kind of warms hatched.
♀ red, ♂ black	1	16/9/06	24/4/07	Simply black worms, no red.
	2	15/9/06	"	"
	3	"	8–9/10/06 et 24/4/07	"
	4	16/9/06	24/4/07	"
	5	"	"	"
	6	17/9/06	"	"
	7	"	"	"
	8	"	"	"
	9	"	"	"

TABLE 5.

Number of red and black worms in each mating of parentage No. 25.

No. of egg-batches	Number of red worms	Number of black worms	Total
9	54 (20.45%)	210	264
10	67 (24.18%)	210	277
Total	121 (22.36%)	420	541
Mendelian Expectation	135	406	541
Discrepancy	−14	+14	

From the results of these two generations, I think, it is sufficiently clear that the black worm is dominant over the red and that the segregation of both characters in the offspring follows Mendel's law of heredity.

It is important to notice, however, that sometimes there occurred an incomplete segregation of the two characters. In Nos. 14, 25 and 4 described in Table 4 the segregation of the recessive character is not complete, as has the case in No. 29 for the dominant character. Similar cases of seeming exception to Mendel's law are mentioned by Correns.

Of the 65 pairings of red worms, all yielded uniform red offspring, except one mating No. 2 from parentage No. 26, which produced 187 red worms and 194 blacks, that is to say, nearly in the proportion of I red : I black. I accounted it to be a case of $(D+R) \times R$ which is due to the mixing of some hybrid black worms to the red group during the rearing. If so, every mating of the black worms should produce red and black worms in the proportion of I red to 3 blacks in the next generation. The result of the next generation will confirm this.

The Fourth Generation (F_4).

In this generation, we kept for experiment.

1. Red worms from parentage No. 26 of the last generation,
2. Red worms from the mixed parentage of the last generation,
3. { *a.* Red worms / *b.* black worms } From the mating No. 2 of parentage No. 26 red, which produced red and black worms in nearly equal proportion (see Table 3).

They mounted on the first to fifth, Sept. 1906 and the moths emerged 18–22 Sept. 1906.

72 pairings were made, in which the offspring of the red matings remained constant, while those from the black ones produced, as we expected, red and black worms in the proportion of 3 blacks to 1 red. Table 6 and 7 give the details of the experiment.

TABLE 6.

Offspring from the mating between red worms.

1 and 2.

No.	Date of oviposition.	Numbers of egg-batches.	Date of hatching.	Kind of worms hatched out.
1	14/9/06	3	16/4/07	All red worms, no black.
	18–22/9/06.	5	"	"
2	17/9/06	32	24/4/09	"

40 matings produced red worms with no exception. From the first appearance they remained true to the parent.

TABLE 7.

Worms from egg-batch No. 2 of parentage No. 26, which produced red and black worms in the proportion IR : IB.

3.

A. Mating between red worms.

Date of oviposition.	Number of egg-batches.	Date of hatching.	Kind of worms hatched out.
18–13/9/06	16	7/10/06 et 17/ 4/07	All red worms

They also remained true to the Parents.

The offspring from other matings which yielded simply black worms remained true to the parents in the subsequent generations and never once produced any red worms, as far as my experiments went.

The Third Generation (F_3).

Both red and black worms found in each mating of the second generation were reared separately. The mounting took place on the 16th-18th July and the moths emerged between 29th July and 2nd August 1906.

69 matings of the black worms and 65 matings of the red worms were made, of which the former laid the eggs which yielded uniform (black only) and mixed (red and black) offsprings, and the latter only red worms, as is shown in Table 3:

TABLE 3.

Parentage.	Kind of Parent worm.	Emergence of moths and oviposition.	Hatching of the eggs.	Kind of worms hatched out.
25	Black	29/7–2/8/06	16–17/4/07	Of the 58 matings obtained from this parentage, 35 yielded only black worms, and the rest red and black worms.
	Red	"	"	Of the 25 matings, all produced red worms.
26	Black	"	"	Of the 11 matings. 8 yielded only black worms, and 3 red and black worms.
	Red	"	"	Of the 12 pairings, 11 produced simply red worms while only one red and black worms nearly in the proportion of 1 red : 1 black. It must besupposed, however, that this was due to accident.
Mixed parentage	Red	"	"	Of the 20 batches, all produced uniform red worms, no black ones.

The number of both red and black worms found in each black mating is shown in Table 4 and 5.

TABLE 4.

Number of red and black worms found in each pairing of parentage No. 25.

No. of egg-batches*	Number of red worms	Number of black worms	Total
8	53 (25.6%)	154	207
9	53 (22.45%)	183	236
12	73 (20.11%)	290	363
15	60 (24.59%)	189	244
17	66 (24.81%)	200	266
6	70 (28%)	180	250
7	32 (27.11%)	86	118
8″	54 (24.1%)	170	224
11	79 (23.93%)	251	330
14*	2 (0.49%)	401	403
15	90 (24.45%)	278	368
16	98 (24.62%)	300	398
19	66 (22.93%)	309	375
20	82 (27.51%)	216	298
23	78 (22.28%)	272	350
25*	18 (9.2%)	225	243
27	26 (20%)	104	130
29	65 (32.27%)	137	202
33	27 (16.16%)	140	167
39	43 (25.14%)	128	171
41	83 (22.49%)	286	369
46	44 (11.42%)	341	385
Total**	1,242 (22.78%)	4,214	5,456
Expected number from Mendelian theory	1,364	4,092	5,456

* Each batch of eggs represents the total of the eggs laid by a pairing.

** Excluding those marked with an asterisk.

The characteristics of the red worms: the head of the newly hatched worm is shining brownish red, the ground color of the body beautiful orange-red, the hair-bearing tubercles lighter than the ground color and the hairs or bristles light reddish-brown. After the first moult, the ground color of the body becomes whitish and in the later stages we find two kinds of worms, one having the common markings, the other destitute of all markings, as in the pale worms of the common breeds. We can distinguish, however, the worms of the normal breeds from the red, since the markings which are dark brown in the former are light brownish red in the latter.

In the common breed, however, the head of newly hatched worm is shining black, the ground color of the body smoky black, the hair tubercles light brown and the hairs and the bristles light smoky.

For the aske of convenience, we shall call hereafter the former as the "red worms" and the latter or the normal worms the "black worms."

Of the 627 matings before mentioned, some, e.g., No. 6 gave rise to tow kinds of worms, red and black, while others produced black worms only, as is shown in Table I,

TABLE I.

No. of parentage.	Number of eggs from each parent.	Date of hatching.	Kind of worms hatched out.
1	134	21st–22nd June '06.	Every batch produced simply black worms.
2	139	"	"
3	102	"	"
7	115	"	"
6	137	"	110 batches produced only black worms, 27 batches red and black worms in the proportion shown in Table 2.

Each batch is the total of the eggs laid by a moth.

The number of the red and black worms given by each mating of the parentage No. 6 is given in Table 2.

TABLE 2.

No. of eggbatches.	Kind of worms hatched from each batch.		Total number of worms hatched out.
	Black worms	Red worms	
1	356	100 (21 %)	456.
2	383	108 (21.99%)	491.
3	353	80 (18.47)	433.
4	358	92 (20.66%)	450.
5	329	85 (20.53%)	414.
6	268	95 (20.66%)	363.
7	285	109 (27.66%)	394.
8	346	103 (22.93%)	449.
9	296	85 (22.36%)	380.
10	311	107 (25.59%)	418.
11	314	101 (24.33%)	415.
12	267	87 (24.57%)	354.
13	225	63 (21.87%)	288.
14	265	68 (20.42%)	333.
15	241	79 (24.37%)	320.
16	217	73 (25.17%)	290.
17	240	73 (23.32%)	313.
18	329	76 (18.74%)	405.
19	327	97 (22.87%)	424.
20	205	56 (21.45%)	261.
21	346	102 (22.76%)	448.
22	237	58 (19.66%)	295.
23, 24, 27	Both red and black worms were produced, but the number was not recorded.		
25	315	94 (22.98%)	409.
26	350	112 (24.24%)	462.
Totals	7,162	2,103 (22.69%)	9,265.
Expected Mendelian figures.	6,948	2,315	

These figures immediately suggested that we had to do with the phenomena of Mendelism, with the black worm dominant over the red.

A SPORT OF THE SILK-WORM, BOMBYX MORI, L., AND ITS HERIDITARY BEHAVIOR.

BY

K. TOYAMA.

(Zoological Institute College of Agriculture, Tokyo Imperial University).

Amongst our experienced silk-worm breeders it is known that certain breeds occasionally throw off some red worms, but as to how they are produced and how they behaved in inheritance much obscurity still prevails.

In the year 1905 I found some red worms suddenly arisen from a cross between two normal black breeds, and thus a series of experiments was conducted with the intention of working out the laws of its inheritance. The results will be given in the following pages.

The First Generation (F_1).

In the spring of 1905 we crossed a Japanese univoltine breed called "*DATE-NISHIKI*" with the male of a tetravoltine breed, "*TOBUHIME*," and obtained 18 batches of eggs.

The newly hatched worms of both parent breeds are brownish black, i.e., normal in color. In the fifth stage, however, we have only commonly marked worms in the former breed and both common and pale worms in the latter.

The eggs obtained from this cross hatched out on the 20th–21st April of the next year. All the worms when hatched were brownish black in color, that is to say, they remained true to the parents.

The Second Generation (F_2).

The dark worms derived from the cross above mentioned spunn cocoons on the 23rd–26th May and the moths emerged on the 8th–10th, June, 1906.

From these moths we obtained 627 batches of eggs which hatched on the 21st–22nd June of the same year. The newly hatched worms of some batches, to my astonishment, were of two kinds, one quite normal in color, and the other beautiful orange-red without any intermediate forms.